山形県埋蔵文化財センター調査報告書第162集

上野遺跡第2次発掘調査報告書

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

上野遺跡

第２次発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第162集

２００７

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

上野（わの）遺跡

第２次発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第162集

平成19年

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した上野遺跡の調査成果をまとめたものです。

上野遺跡は、置賜盆地の北東端に位置する南陽市の南東部、吉野川左岸に広がる内原段丘に立地します。遺跡周辺の土地は、水田や、さくらんぼ・ブドウ・ラフランスなどの果樹栽培地として利用されています。南陽市には、５世紀代の国史跡稲荷森古墳をはじめとする、著名な古墳が数多く分布していますが、遺跡近郊にも蒲生田古墳群や二色根古墳群等の終末期古墳群の分布が認められています。また、遺跡南東には伊達氏以前から軍事的要所であった二色根館のような中世城館の分布も認められます。

このたび、県営農地環境整備事業（上野地区）に伴い、工事に先だって本遺跡の発掘調査を実施することとなりました。平成17年度に第１次調査が実施されており、今回は第２次調査に当たります。

調査では、第１次調査に続いて、縄文時代中期の土坑や柱穴が検出され、それらの遺構に伴って縄文土器や土製品などがまとまって出土しています。また、中・近世の掘立柱建物跡が検出され、上野遺跡における集落の変遷を探る貴重な資料を得ることが出来ました。その他、弥生時代の溝跡や、古墳時代の杭跡なども検出されています。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な文化的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査において御協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成19年３月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター
理事長　　山口　常夫

本書は、農地環境整備事業(上野地区)に係る「上野遺跡」の第２次発掘調査報告書である。
既刊の年報、現地調査説明会資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。
調査は、山形県の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
出土遺物・調査記録類は、報告書作成終了後、山形県教育委員会に移管する。

調 査 要 項

遺　跡　名	上野(わの)遺跡
遺跡番号	平成16年度登録
所　在　地	山形県南陽市大字上野字上野４他
調査委託者	山形県
調査受託者	財団法人山形県埋蔵文化財センター
受託期間	平成18年４月１日～平成19年３月31日
現地調査	平成18年５月８日～６月19日
	平成18年９月４日～９月26日
調査担当者	調査第一課長　野尻　侃
	主任調査研究員　須藤孝宏(調査主任)
	調査研究員　菅原哲文
調査指導	山形県教育庁教育やまがた振興課文化財保護室
調査協力	南陽市教育委員会
	南陽市農林課
	南陽市体育館
	上野フルーツランド整備推進協議会
	山形県教育庁置賜教育事務所
	山形県土地改良事業団体連合会置賜事務所

凡　例

1　本書の作成は、須藤孝宏が担当した。

2　遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第Ⅹ系（世界測地系）により、高さは海抜高で表す。また、方位は座標北を表す。

3　本書で使用した遺構・遺物の分類記号は、下記の通りである。

ＳＢ…掘立柱建物　　ＳＤ…溝　　ＳＧ…河川　　ＳＫ…土坑　　ＳＰ…柱穴

ＳＸ…性格不明遺構　　Ｐ…土器・陶磁器　　Ｓ…礫　　Ｗ…木・木製品

4　遺構・遺物実測図の縮尺・網点などの用法は、各図に示した。

5　基本層序および遺構覆土の色調記載については、1997年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版土色帳」によった。

6　発掘調査および本書を作成するにあたり、下記の方々からご協力・ご助言をいただいた。ここに記して感謝申し上げる。（敬称略）

伊藤成賢・大橋康二・菅原哲文・高桑　登・高橋　忍・星　　隆・八鍬大輔・山口博之・吉野一郎

7　委託業務は、下記のとおりである。

基準点測量業務	株式会社アサダ
地形・遺構測量（俯瞰撮影）業務	株式会社ワクニ
自然化学的分析業務	株式会社パレオ・ラボ

目　次

Ⅰ　調査の経緯
　1　調査に至る経過 …… 1
　2　調査の方法と経過 …… 1
Ⅱ　遺跡の立地と環境
　1　地理的環境 …… 4
　2　歴史的環境 …… 4
Ⅲ　遺跡の概要
　1　遺跡の層序 …… 9
　2　遺構と遺物の分布 …… 9
Ⅳ　縄文時代の遺構と遺物
　1　縄文時代の遺構 …… 19
　2　縄文時代の遺物 …… 21
Ⅴ　中世・近世の遺構と遺物
　1　中世・近世の遺構 …… 23
　2　中世・近世の遺物 …… 25
Ⅵ　その他の遺構と遺物
　1　弥生時代の遺構 …… 28
　2　古墳時代の遺構と遺物 …… 28
　3　奈良・平安時代の遺物 …… 28
　4　時期不明の遺構 …… 29
Ⅶ　自然科学的分析
　1　放射性炭素年代測定 …… 31
　2　上野遺跡(第２次)9区・7ａ区
　　出土木材・柱材および
　　炭化材の樹種固定 …… 36
Ⅷ　まとめと考察 …… 42

報告書抄録 …… 巻末

表

表１　発掘調査工程表 …… 3
表２　整理作業工程表 …… 3
表３　測定試料及び処理 …… 34
表４　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果 …… 35
表５　上野遺跡（第２次）９区及び７ａ区出土炭化材
　　樹種同定結果一覧 …… 38
表６　掘立柱建物跡観察表 …… 56
表７　縄文土器・土製品観察表 …… 64
表８　石器・石製品観察表 …… 64
表９　木製品観察表（古墳時代） …… 64
表10　須恵器観察表 …… 64
表11　陶磁器観察表 …… 66
表12　木製品観察表（中・近世） …… 66
表13　石製品観察表（中・近世） …… 67

図　版

第１図　調査区概要図 …… 2
第２図　地形分類図 …… 5
第３図　遺跡位置図 …… 6
第４図　７区遺構配置図 …… 11
第５図　７区西部遺構配置図 …… 13
第６図　７区東部遺構配置図 …… 15
第７図　８・９区遺構配置図 …… 17
第８図　基本層序（１） …… 44
第９図　基本層序（２） …… 45
第10図　縄文時代の遺構（土坑１） …… 46
第11図　縄文時代の遺構（土坑２） …… 47
第12図　縄文時代の遺構（性格不明遺構） …… 48
第13図　縄文時代の遺構（河跡１） …… 49
第14図　縄文時代の遺構（河跡２） …… 50
第15図　縄文時代の遺構（柱穴） …… 51
第16図　弥生時代の遺構（土杭・溝跡） …… 52
第17図　古墳時代の遺構（杭跡） …… 53
第18図　中・近世の遺構（掘立柱建物跡１） …… 54
第19図　中・近世の遺構（掘立柱建物跡２） …… 55
第20図　中・近世の遺構（掘立柱建物跡３） …… 56
第21図　中・近世の遺構（柱穴・土坑ほか） …… 57
第22図　中・近世の遺構（溝跡） …… 58
第23図　その他の遺構（土坑ほか） …… 59
第24図　その他の遺構（溝跡） …… 60
第25図　縄文時代の遺物（土器） …… 61
第26図　縄文時代の遺物（土器・土製品・石器） …… 62
第27図　縄文時代の遺物（石器・石製品） …… 63
第28図　古墳時代の遺物（木製品）、
　　奈良・平安時代の遺物（須恵器） …… 64
第29図　中・近世の遺物（陶磁器） …… 65
第30図　中・近世の遺物（陶磁器・木製品） …… 66
第31図　中・近世の遺物（石製品） …… 67

写真図版

写真図版１　遺跡遠景
写真図版２　８・９区全景、８・９区完掘
写真図版３　８区遺構完掘、８区遺構検出、
　　８区西壁基本層序
写真図版４　８区SK408・409・410完掘
　　８区SK420・421・422・423完掘
写真図版５　８区SK424・426完掘
　　８区SG425断面、完掘
写真図版６　８区SP402・403・404・405・411完掘
　　８区SP406断面
　　９区遺構完掘
写真図版７　９区北部遺構検出、９区東壁基本層序
　　９区北壁基本層序
写真図版８　９区SK427・432断面、完掘
　　９区SX428・435断面、完掘
写真図版９　９区SD433断面、完掘
　　９区SK439・SD440断面
　　９区SG436検出、断面、完掘
写真図版10　９区SP413杭材検出、断面、杭出土、完堀
　　９区SP414～418・429～430完堀
写真図版11　7a区近景、7a区全景
写真図版12　7a区完掘、7a区北壁基本層序
　　7c区東壁基本層序
　　7c区西部(SB680)完掘
写真図版13　7a区SB680構成柱穴断面、完堀
写真図版14　7a区中央(SB681・682)完掘
　　7a区SB681・682構成柱穴断面、完堀
写真図版15　7a区SB681構成柱穴断面、完堀
　　7a区SB682構成柱穴断面、完堀
写真図版16　7a区SB682構成柱穴断面、完堀
　　7a区東部(SB683)完掘
写真図版17　7a区SB683構成柱穴断面、完堀
　　7a区SK599・607断面
　　7a区SX548完掘、SX590縄文土器片検出
写真図版18　7a区SX630縄文土器片検出
　　7a区SD557断面、完堀
写真図版19　7a区SD567・587完堀
　　7a区SD587縄文土器片検出
　　7a区SP559根固め石検出
　　7a区SP616・665柱材検出
写真図版20　7b区遺構検出
　　7c区遺構完掘、7c区北側柱穴群
　　7c区SK510・511断面、完堀
　　7c区SP506断面・縄文土器片検出、完掘
写真図版21　縄文土器・土製品
写真図版22　石器(縄文時代)
写真図版23　石器・石製品(縄文時代)
写真図版24　須恵器(平安時代)・陶磁器(中世)
写真図版25　陶磁器(近世)
写真図版26　木製品(古墳時代・中世)・石製品(中・近世)

Ⅰ　調査の経緯

1　調査に至る経過

農地環境整備事業

上野遺跡の発掘調査は、山形県置賜総合支庁産業経済部の南陽市上野地区における農地環境整備事業に伴って実施された。平成14年１月に地元関係者等による上野フルーツランド推進協議会が設立されて以来、各関係機関との協議や事業着手に向けての作業が進められてきたが、本事業はこれを受けて平成16年度に県営土地改良事業として採択されたものである。この事業は、上野地区が南陽市中心部に位置する丘陵傾斜地帯であることから、恵まれた地理条件等を最大限に活かした観光果樹園の構築を目指し、約５億円の事業費を投じて27.3haの区画整理等を行うというものである。平成17年度においては、発掘調査に続き８haの整理工事および用排水路・道路工事が実施されている。平成18年度以降は、残り約19haの区画整理や水路及び農道の整備をはじめ、換地業務などを実施し、平成20年度に事業完了の予定である。

平成16年度新規登録

上野遺跡の存在は、平成16年12月に県教育委員会によって実施された事業計画区域を対象とする試掘調査の際に確認された。調査の結果、縄文時代および中世の遺構・遺物が検出され、集落跡として上野遺跡が新規登録された。その後、県教育委員会と山形県置賜総合支庁産業経済部との協議の結果、記録保存のための緊急発掘調査を行うことが決まり、山形県埋蔵文化財センターが調査を受託した。第１次調査は、平成17年度に約3,050㎡にわたって実施されており、今回が２回目の調査となる。

2　調査の方法と経過

平成18年度発掘調査

本年度の発掘調査は、昨年度調査区の北東端から東に伸びる果樹園（７区）600㎡と、同南端から南東に約50m離れた水田（８・９区）1,900㎡の２箇所、合計2,500㎡を対象とする。調査は水田地帯（８・９区）を５月８日から６月19日にかけて、その後中断期間を挟んで、果樹園地帯（７区）を９月４日から９月26日にかけてそれぞれ実施した。調査日数は、実働47日（延べ66日）である。

調査においては、第１次調査との連続性を配慮しながら、同時に混同を避けるための手立てを採った。まず、遺構番号については先行調査との重複を避けるため、400番台から600番台を使用した。ただし、遺物番号については、遺物出土数が少量だったため、独立した通し番号を付している。調査区については、第１次調査に続けて７～９区の区名を採用し、重複を避けた。今回の調査区のうち、果樹園地帯については７区、水田地帯については中央を通る農業用水路を境界にして西側を８区、東側を９区とそれぞれ呼称した。なお７区については、面積は少ないが細長くＴ字型の形状をしているため、東西方向に伸びる長軸部分を７ａ区、南北方向に伸びる短軸部分の北部を７ｂ区、同じく南部を７ｃ区と細分化して呼称している。調査区のグリッドについても、国土座標の平面直角座標Ｘ系：Ｘ＝-215115.000・Ｙ＝-59625.000を原点（Ａ０）とし、東西軸・南北軸を基準に10m方眼で設定して、第１次調査を踏襲した。グリッド番号は、

原点から北と東に向かってそれぞれ10m毎に、アルファベットでＡ・Ｂ・Ｃ…、アラビア数字で０・１・２…と順に番号を振って「Ａ１」のように表記し、グリッドの帰属は北西隅の杭を基準にした。なお、例えば「Ａ１」グリッドから南に５ｍ、東に５ｍ離れている小グリッドを表示する必要が生じた際には、「Ａ１―Ｓ５Ｅ５」という表記を用いている。

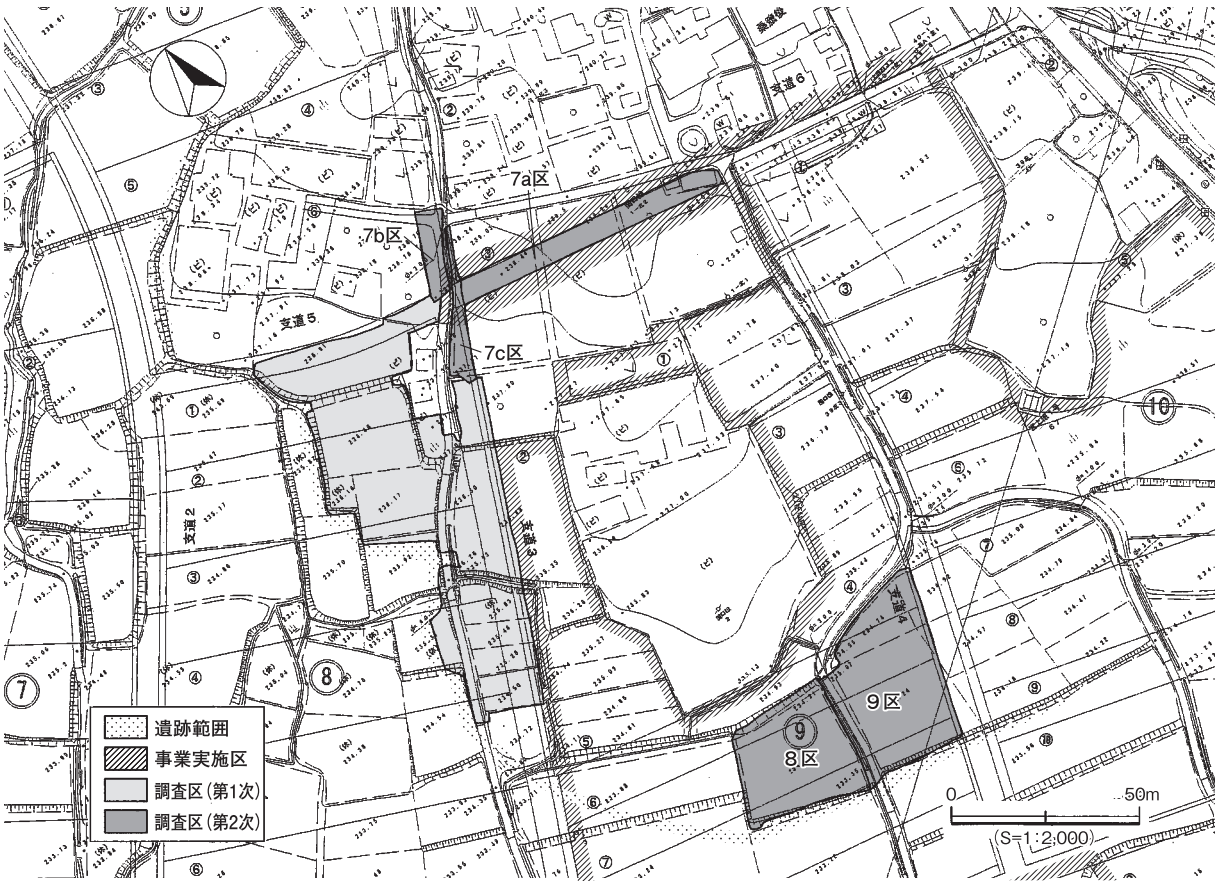
８・９区調査　調査の経過については以下の通りである。７区に先行して、まず水田地帯である８・９区の調査を実施する。５月８日に事務所を開設し、機材の搬入を行い、翌日９日に調査の成果と無事故を願って鍬入れ式を行う。５月９日から19日にかけて重機を用いて表土を除去した後、鋤簾等を使って面整理を行い、遺構を検出する。５月22日から遺構の精査を開始し、並行して写真撮影・測量・記録作業等を行う。圃場整備の際に、地山面が削平されたためか、検出遺構数・遺物数ともにわずかであったため、事業関係者を主とする現地調査説明会を６月15日午前中に開催する。同日午後に、空中写真撮影を実施。６月19日に機材を搬出し、事務所の撤去準備を整えて、調査を一旦中断する。

鍬入れ式

現地調査説明会

調査中断

７区調査　ブドウ園の収穫作業が終わるのを待って、果樹園地帯である７区の調査を開始する。９月４日に新事務所を開設し、機材の搬入を行う。翌日９月５日から８日にかけて重機を用いて表土を除去した後、鋤簾等を使って面整理を行い、遺構を検出する。５月11日から遺構の精査を開始し、並行して写真撮影・測量・記録作業等を行う。雨の日が続き、作業が思うように進められないことが多かったが、なんとか９月25日までに事務所の撤収を含めた調査終了の準備をすべて整える。ところが、同日午後に引渡しに備えて調査区域の最終確認をしていたところ、性格不明遺構内に埋まった縄文土器片を確認したため、急きょ翌日9月26日に調査員２名で掘り残



第１図　調査区概要図

し部分の精査を行い、縄文土器片を回収して調査の全工程を終了する。

発掘調査終了後は、センター内にて出土遺物・図面等の整理作業を行う。10月２日より遺物洗浄・遺物注記作業を行い、その後10月10日から約１ヶ月間、図面や写真の整理作業と並行して遺物実測および拓本制作作業を行う。11月から12月にかけては、遺構・遺物のトレース作業と遺物写真撮影等を並行して実施。その後、１月末まで図版の版組み作業および遺物収納・記録類の整理を完了させ、整理作業を終了する。

整　理　作　業

表１　発掘調査工程表

月・週 / 作業内容	5月						6月							9月						
	2週		3週		4週		1週		2週		3週		4週	2週		3週		4週		5週
表土除去																				
グリッド設定																				
面整理・遺構検出																				
遺構精査																				
記録(測量・写真)																				
調査説明会																				
空中写真撮影																				
その他(環境整備等)																				

表２　整理作業工程表

月・週 / 作業内容	10月				11月					12月				1月				
	1週	2週	3週	4週	1週	2週	3週	4週	5週	1週	2週	3週	4週	1週	2週	3週	4週	5週
遺物洗浄・注記・復元																		
遺物実測・拓本																		
遺構・遺物トレース																		
データ入力																		
遺物写真撮影																		
写真整理																		
図版作成																		
その他(図面整理等)																		

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　地理的環境

遺跡の所在する南陽市は山形県の南東部に位置し、北端の白鷹山（標高994m）から南端は吉野川・屋代川合流地点の大橋まで、東端は小岩沢、南西部は最上川に限られた範囲で、東南15km・南北24kmの三角状の市域をなす。置賜盆地の北東部を占め、北は山形市および山辺町、北東は上山市、南東は高畠町、南西は川西町、西は長井市、北西は白鷹町に接する。面積は約160平方kmで、このうち北部の山地が70%を占める。南部に広がる段丘部・平野部の割合はそれぞれ6%・24%である。三角形の頂点（北端）が白鷹山で、ここから発する吉野川が市域中央を南北に貫流し、南端部を北西に流れる最上川（松川）に合流している。西部の織機川も同じく南流して最上川に注ぐ。北部丘陵地帯では、吉野川に沿って集落が点在し、標高は最北の小滝集落で430m、最低は最上川に沿った南端の関根地区で209mとなっている。北部が山地で南に沃野が開けるこの地は、日照条件等に恵まれ気候も温暖なため、米・野菜・果樹などの栽培に適している。耕地面積が3,790ha、耕地率は24%である。気候は内陸性を呈し、年平均気温は10～11℃前後であるが、夏冬の温度差は大きい。

置賜盆地北東部

北部の白鷹山地地域の表層地質については、安山岩質火山凝灰岩・火山礫凝灰岩および凝灰質泥岩から構成されている。山地と低湿地の間に位置する吉野川沿岸段丘・内原段丘部については礫・砂・泥、南部の低湿地帯である宮内扇状地には砂・泥の層が広がっている。

上野遺跡は、南陽市南部のやや東寄りに位置し、鷹戸屋山地・大平山地間の谷間を南に向かって流れる吉野川左岸に広がる内原段丘に立地する。標高は、233～239mを測り、地形は北東から南西にかけて傾斜する。本遺跡周辺の吉野川沿岸段丘・内原段丘・宮内扇状地等は、山地と河川の接点が多いため、太古より狩猟採集等に適していた地域であると考えられる。現在、遺跡周辺は恵まれた自然環境を利用して水稲栽培のほか、ぶどう・ラフランス・かき等の果樹栽培地として利用されている。

内原段丘

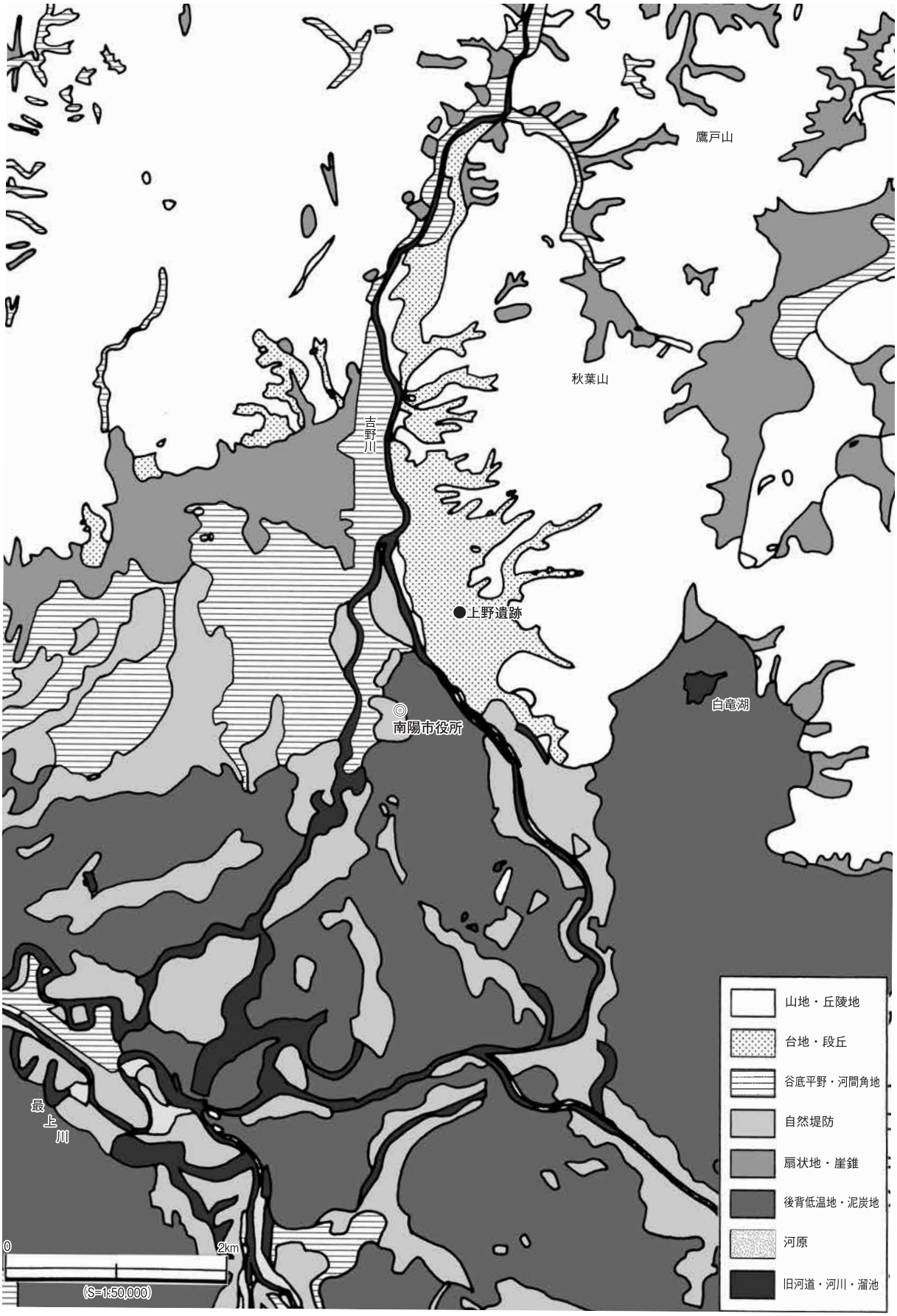
果樹栽培地

2　歴史的環境

南陽市では、旧石器時代の遺物については、１個の細石刀が長岡山遺跡から採取されているに過ぎないが、縄文時代の遺跡と古墳時代の遺跡は米沢盆地北東縁に集中的に発見されている。吉野川の下流東部一帯は、泥炭層が広がる低湿地で大谷地と呼ばれ、これを囲むように遺跡が分布している。南陽市域ではすでに消滅したものも含めて10箇所の古墳・古墳群が発見されている。５世紀のものとされる全長96mに及ぶ前方後円墳の稲荷森古墳（国史跡）をはじめ、５世紀末のものと推定され置賜地方では唯一の竪穴式石室を持つ赤石山古墳などがある。他の８箇所は古墳群で、うち７箇所が上野遺跡近辺（赤湯市街地の北方丘陵）に集中している。いずれも山腹・山麓の自然斜面を利用した同一形式の古墳で、形状および二色根２号墳から出土した和銅新銭から、８世紀のものと推定されている。蒲生田古墳群と狸沢古墳群・上野山古墳群から

大谷地周辺に縄文遺跡が分布

上野遺跡周辺に古墳群が集中


鷹戸山
秋葉山
吉野川
●上野遺跡
◎南陽市役所
白竜湖
最上川
0
2km
(S=1:50,000)
山地・丘陵地
台地・段丘
谷底平野・河間角地
自然堤防
扇状地・崖錐
後背低温地・泥炭地
河原
旧河道・河川・溜池

第２図　地形分類図

第３図　遺跡位置図（国土地理院発行２万５千分の１地形図「赤湯」を使用）

は蕨手刀３振が出土した。こうした古墳文化の盛行は、古代における当市域が置賜郡の政治・文化の中心地であったことを物語っており、特に終末期古墳群の集中的分布は奈良時代集落遺跡との関連性をうかがわせる。

置　賜　郷

律令制下の南陽市域は、「和名抄」に見える置賜郡７郷のうち置賜郷に属していたとする説が有力である。置賜郷は置賜郡の中心をなした地域と考えられ、南陽市域に郡山の地名が残ることから、この地を置賜郡衙跡に比定するのが通例となっている。また、先に述べた北部の山麓における８世紀頃のものとみられる墳墓の集中的分布も、古代郡衙の存在の証明と考えられる。一方、古社寺の創建伝承を見ると、二色根薬師寺・宮内熊野神社・別所皇太神社・三堀寺など、赤湯・宮内方面の古社寺がいずれも９世紀の創建と伝えられている。社寺に付加するかのごとく経塚や須恵器窯跡なども発見されている。

北　条　荘

中世の置賜郡には、屋代荘・成島荘・北条荘などの荘園があったことが知られる。南陽市域の大半は北条荘に属したが、屋代荘など近隣の荘園・公領に含まれる地域もあった。北条荘は、北条時政の庶子、北条相模坊臨空がこの地の霞を支配したことに始まると伝えられるが、詳細は不明である。

長　井　氏

大江広元の次男時広に始まる長井氏が、北条荘の地頭であったと推測される。長井氏は、代々将軍の要職に連なり、荘の経営はその被官の手に委ねられたらしい。鎌倉御家人の当地支配は鎌倉文化の地方流入を促し、室町期にかけて板碑を中心とする石造文化が開花した。南陽市域にも、県内最古の板碑である正元元年(1259)銘の大日板碑をはじめとする数多くの板碑・磨崖碑・六面幢などが残されている。

伊　達　氏

伊達氏が長井氏を攻めて置賜郡内を領有するのは、康暦２年(1380)であるが、北条荘にはそ

番号	遺跡名	種　別	時　代	番号	遺跡名	種　別	時　代
1	上野	集落跡	縄文・平安・中近世	36	間々の上	散布地	奈良
2	蒲生田古墳群	古墳群	古墳(終末期)	37	古屋敷	散布地	平安
3	山居沢山Ｂ	散布地	平安	38	六角壇	散布地	平安
4	山居沢山Ａ	散布地	平安	39	梅ノ木	散布地	奈良・平安
5	狸沢山古墳群	古墳群	古墳(終末期)	40	檜原	散布地	縄文
6	上野山古墳群	散布地・古墳群	弥生・古墳(終末期)	41	大清水	散布地	縄文・平安
7	二色根館	城	中世	42	宮内小学校敷地内	集落跡	縄文(中期)・平安
8	中野山館	館	中世	43	別所Ａ	散布地	平安
9	二色根古墳群	古墳群	古墳(終末期)	44	別所Ｂ	散布地	縄文
10	横沢	散布地	縄文・奈良	45	宮内南館	館	戦国期
11	夷平	散布地	縄文(晩期)・中世	46	宮内熊野大社敷地内	散布地	縄文(中・後期)・平安
12	北町	散布地	縄文(前期)	47	久保	集落跡	縄文(中期)
13	稲荷前	散布地	縄文(前期)	48	慶海山館	館	中世
14	上ノ山	散布地	縄文	49	双松公園内	散布地	縄文
15	烏帽子山経塚	経塚	平安	50	宮沢城	館・館城	戦国期
16	烏帽子山古墳	古墳	古墳(終末期)	51	北館	館	室町
17	上野山館	城砦・砦	中世	52	丸山館	館	中世
18	諏訪前	散布地・集落跡	縄文・古墳・平安	53	椚塚館	館	平安
19	観音堂	散布地	縄文・平安	54	李の木	包蔵地	縄文・平安
20	蒲生田館	館	中世	55	太子堂	散布地	平安
21	富貴田	集落跡	縄文・奈良	56	長岡館	館	中世
22	当時作	散布地	縄文・奈良・平安	57	長岡山東	散布地	縄文・平安
23	若狭郷屋敷	館	中世	58	長岡山	集落跡	旧～中石器・縄文(中期)・古墳
24	唐越	散布地・集落跡	縄文(中期)・奈良・平安	59	稲荷森古墳	散布地・古墳	旧石器・縄文(中期)・古墳(前期)
25	西田	散布地	平安	60	早稲田	散布地	奈良
26	荻生田	集落跡・散布地	弥生・奈良	61	長岡西田	散布地	縄文(中期)
27	中落合館	館	中世	62	長岡南森	散布地	縄文(中期)・古墳(前・中期)
28	中落合	集落跡	奈良・平安	63	内城館	館	中世
29	中屋敷	散布地	奈良・平安	64	中ノ目下	散布地	奈良・平安
30	東六角	集落跡	縄文(中期)・平安	65	百刈田	集落跡	縄文(中期)・古墳
31	矢野目館953他	館跡	平安・中世	66	前小屋	散布地	縄文
32	沢田	集落跡	弥生・古墳(中期)・奈良・平安	67	西中上	散布地	平安
33	島貫	集落跡	古墳～奈良・奈良・平安	68	将監屋敷	散布地	奈良・平安
34	郡山中堀	散布地	奈良・平安	69	蒲生田字南館館ノ内	散布地	縄文・奈良・平安
35	沢口	集落跡	奈良・平安	70	平館	館	中世

れ以前から伊達氏の息がかかっていたことが宮内熊野神社伝承記録等から読み取れる。伊達氏の置賜経営は、稙宗のとき(16世紀)になってほぼ形を整えた。北条荘内には、荘内に28郷を領していたといわれる懸田氏をはじめ、宮内郷を知行した大津氏、中山郷を知行した小国氏などの有力豪族がいたことが知られる。地頭と呼ばれる家臣は、村落の居屋敷に館を構え、在家・浮免の様態で所領を支配した。在家とは、家と田畑と百姓権の三つを揃えた百姓で、浮免は請作者不定の土地である。「采地下賜録」には北条荘におけるこうした在家の存在が証明されている。また、上野遺跡近辺(赤湯市街地の北方丘陵)に構えられた二色根館は、阿波野(粟野)氏の居城で、同氏は文明３年(1471)に伊達氏と確執の末に没落したと伝えられている。

地　頭
在家・浮免
二色根館

蒲生氏
上杉氏

置賜地域には、天正19年(1591)伊達氏にかわって蒲生氏が入部し、文禄３年(1594)に検地を実施したが、慶長３年(1598)には上杉氏の支配するところとなり、南陽市域は以降米沢藩領として幕末期を迎えることとなる。

参考・引用文献

佐藤鎮雄ほか	1987	『南陽市史考古資料編』南陽市史編さん委員会
佐藤鎮雄ほか	1990	『南陽市史 上巻』南陽市史編さん委員会
長井政太郎編	1990	『日本歴史地名大系６ 山形県の地名』平凡社
伊藤清郎ほか	1995	『山形県中世城館遺跡調査報告書 第一集(置賜地域)』山形県教育委員会
竹内理三編	1995	『角川日本地名大辞典６ 山形県』角川書店
小野榮監修	2001	『図説 置賜の歴史』郷土出版社

Ⅲ　遺跡の概要

1　遺跡の層序

遺跡の層序については、第８図から第９図にかけて７ａ区・７ｃ区・８区・９区の土層断面図をそれぞれ示した。これを基にして、各調査区における層序の特徴を簡潔に述べる。

７区（ぶどう園）

７区は、遺跡内でも最も標高が高く、ぶどう園および農道として利用されていた区域である。調査区はＴ字型になっており、約６ｍ幅で東西に80m程伸びる７ａ区と、その西端から北に25ｍ程伸びる７ｂ区、および南に20m程伸びる７ｃ区からなる。北東から南西方向へ緩やかに下降する地形のため、７区においては７ａ区東端の標高が約239.20mと最も高く、７ｃ区の南端が約237.70mと最も低い。

７区の層序

７ａ区の層序については７ａ区中央を南北に切るＳＤ567が調査区北壁と合流する部分を、また７ｃ区の層序については調査区東壁部分を、それぞれ記録した。いずれの層序もⅠ～Ⅳ層に分類している。７ａおよびｃ区におけるⅠおよびⅡ層は、暗褐色シルトを基調とする果樹園の耕作土である。Ⅲ層は耕作土の深土であり、地山層との漸移層的な様相を示す。基盤層由来の、にぶい黄褐色礫および砂を少量含む。Ⅳ層は、褐色礫混じりシルトを基調とする地山である。７ａ区中央から東にかけてはその下が砂層となり、７ｃ区においては礫層となる。縄文時代および中近世の遺構は、ともにⅣ層上面で検出される。遺構検出面までの深さは、0.6～１ｍ程である。

８・９区（水田）

８・９区は遺跡内で最も標高が低く、水田として利用されていた区域である。両調査区は、中央を農業用水路で東西に区切られており、標高約234.70mの９区北東端から標高約233.20mの８区南西端に向かって緩やかに下降する。

８・９区の層序

８区の層序については調査区西壁部分を、９区の層序については調査区東壁部分をそれぞれ記録した。いずれの層序もⅠ～Ⅳ層に分類している。ⅠおよびⅡ層は、灰黄褐色シルトを基調とする水田の耕作土である。Ⅲ層は、８区においては黒色粘土質シルト、９区においてはにぶい黄褐色シルトとなるが、表土と地山層の緩衝層である。８区の黒褐色粘土質シルト層は、河川氾濫時の堆積物に由来すると思われる。このⅢ層上面が遺構検出面である。遺構検出面までの深さは、傾斜地ゆえに0.1～0.5mと差がある。また、層序の様相から、８区北半および９区南東部等は、圃場整備の際に削平された可能性がかなり高いと思われる。Ⅳ層はにぶい黄褐色粗砂または砂質シルトを基調とする地山である。

2　遺構と遺物の分布

当遺跡では、主として縄文時代中期と中近世の遺構が検出されている。その他にも、自然化学的分析の結果、弥生時代や古墳時代の遺構であると推定された遺構も存在する。これら多様な時代の遺構は、どれも同一面で確認されている。

縄文時代の遺構

縄文時代の遺構については、７区と８・９区の全域において検出されている。このうち、８・

9区から検出されているのは、主に河川の氾濫跡と推測されるような自然遺構に近いものであり、遺物を伴うものがほとんどない。これに対し、第1次調査で縄文時代の土坑が検出された3区の北東域にあたる7ｃ区および7ａ区西部において検出されている柱穴や性格不明遺構からは、土器・土製品・石器等がまとまって出土している。また、7ａ区中央の遺構からも紛れ込みと思われる遺物が数点検出されていることから、調査区外の7区よりさらに東北の方向にまで縄文時代中期の遺構の分布が拡大するものと推測される。

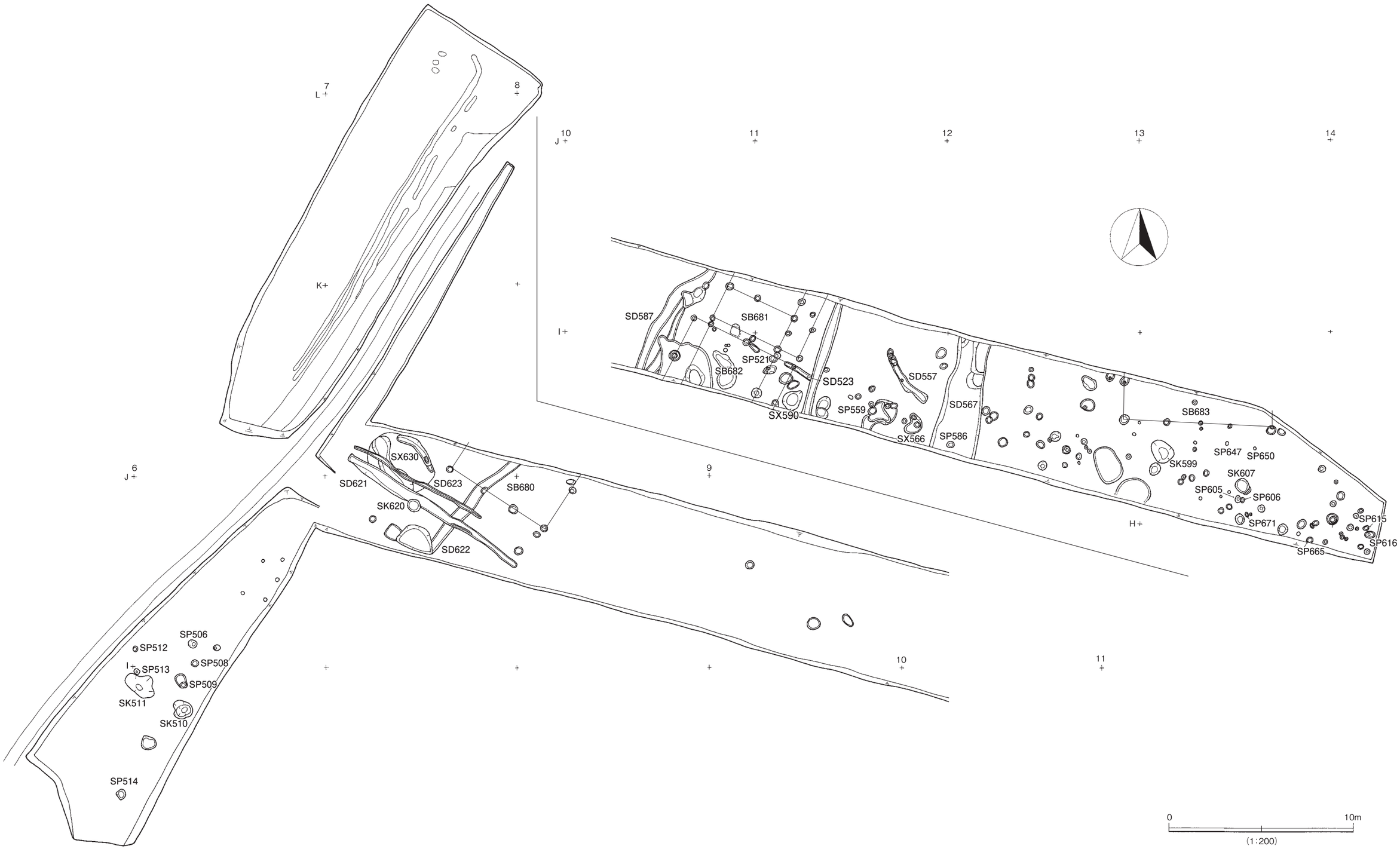
弥生・古墳時代の遺構

弥生時代および古墳時代の遺構は、8区と9区の中央にまとまって検出されている。弥生時代の遺構としては土坑・溝跡が、古墳時代の遺構としては杭跡がそれぞれ検出されているが、遺物としては古墳時代の杭材が一点出土しているのみで、その他は検出されない。これらの遺構が検出された地山面は、褐灰色と黄褐色シルトが混じり合った特徴的な面になっている。

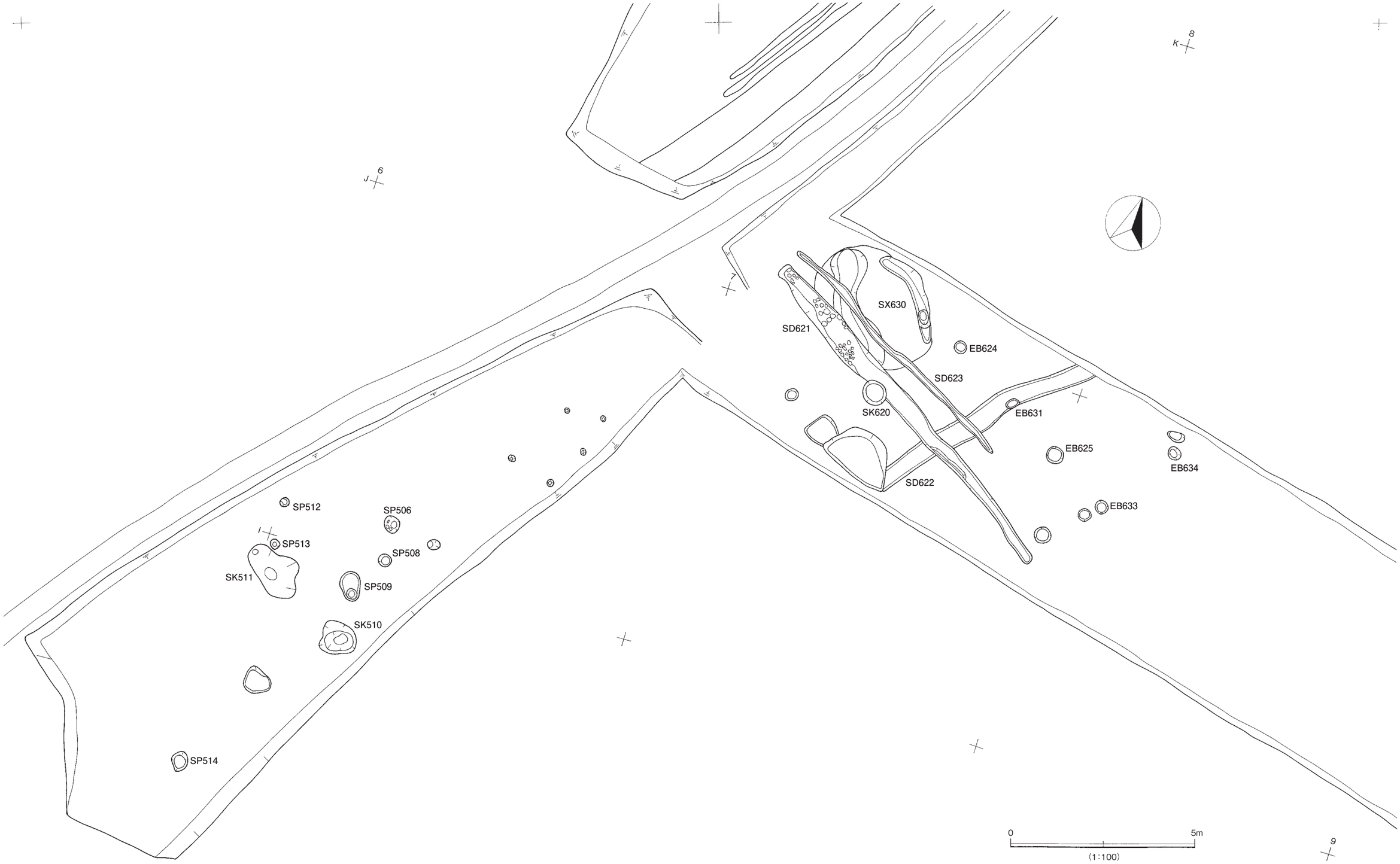
中世・近世の遺構

中世・近世の遺構は、そのほとんどが7ａ区から検出されており、柱穴の数は150基程になる。調査区の幅が約6ｍと狭く、建物を構成する組み合わせを確認するのが困難であったが、掘立柱建物跡を4棟と、溝跡、土坑等を検出している。中世・近世の遺構から出土した遺物は根固め石1点と柱材6点に過ぎず、調査区の狭さも相俟って建物の立て替え等の類推は極めて困難である。8・9区からは、9区北部に性格不明遺構が1基検出されただけである。しかし、8・9区間を南に流れる農業用水路下層の覆土より、奈良・平安時代の須恵器片を含む中世・近世の陶磁器片がある程度まとまって出土したことから、元々8・9区にも中世・近世の遺構が存在していたが、圃場整備の際に削平を受けて検出されなかったのではないかということが推測できる。いずれにしても、第1次調査と今回の第2次調査の結果から、上野遺跡における中世・近世の集落は、第1次調査時の1区および6区を中心にして、主に北東方向に開けていたということが言えそうである。

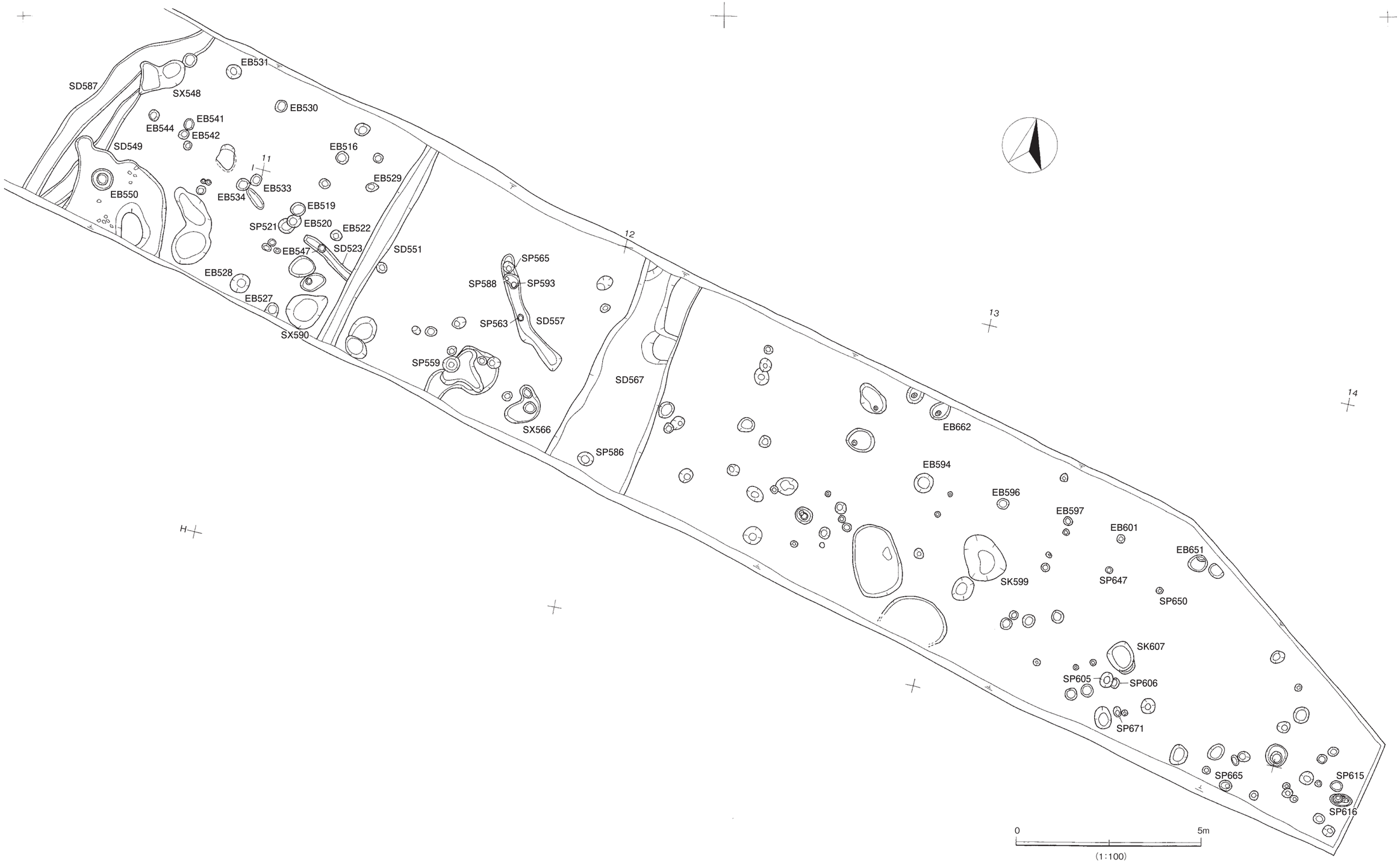
圃場整備による削平


7
8
L
10
11
12
13
14
J
K
I
H
SD587
SB681
SP521
SB682
SD523
SD557
SD567
SP559
SX590
SX566
SP586
SB683
SP647
SP650
SK599
SK607
SP605
SP606
SP671
SP615
SP616
SP665
SX630
SD621
SD623
SB680
SK620
SD622
6
9
SP506
SP512
SP508
SP513
SP509
SK511
SK510
SP514
0
10m
(1:200)

第４図　7区遺構配置図



第 5 図　7区西部遺構配置図



第 6 図　7区東部遺構配置図

第 7 図　8･9区遺構配置図

Ⅳ　縄文時代の遺構と遺物

1　縄文時代の遺構

縄文時代の遺構としては、土坑が10基、遺物を包含する性格不明遺構が１基、河跡が２基、その他柱穴が数基検出されている。このうち、７区から検出された遺構については、覆土が灰褐色または暗褐色を呈するシルトを基調とし、固くしまることで共通している。また、８・９区から検出された遺構については、黒褐色または黒色シルトを基調とし、同じく固くしまることで共通する。なお、遺物が伴わない遺構でも、覆土が類似するものは当期に含めた。以下、土坑・性格不明遺構・河跡・柱穴の順に簡潔に説明する。

A　土坑

ＳＫ４０８（第10図）　８区ＺＶ６グリッド南側中央に位置する。平面形および底面は不正円形で、大きさは直径1m35㎝、深さは13㎝である。覆土は白色風化礫と酸化鉄を含む黒色シルトを基調とする。堆積の様相から、圃場整備時の影響を受けていると考えられる。重複関係・出土遺物はない。

ＳＫ４０９（第10図）　８区ＺＵ６グリッド北東側に位置する。平面形は不正楕円形で、大きさは長軸2m15㎝・短軸1m70㎝、深さは23㎝である。底面に起伏および円形のくぼみがある。覆土は白色風化礫と酸化鉄を含む黒色シルトおよび灰褐色シルトを基調とする自然堆積である。重複関係・出土遺物はない。

ＳＫ４１０（第10図）　８区ＺＶ６グリッド南東隅に位置する。長軸1m50㎝・短軸80㎝の不正楕円形を呈し、深さは22㎝である。底面は不正楕円形で、側壁に段が付く。覆土は白色風化礫と炭化物を含む黒色シルトを基調とする自然堆積である。重複関係・出土遺物はない。

ＳＫ４１９（第10図）　８区と９区にまたがるＺＵ７グリッド北側中央に位置する。平面形は、中央を農業用水路によって切られているため不明確であるが、不正楕円形を呈すると思われる。大きさは長軸75㎝・短軸45㎝で、深さは25㎝である。底面は、水路に切られ判然としないが、起伏は少なく側壁も緩やかに立ち上がる。覆土は酸化鉄と風化礫粒を含む灰黄褐色シルトと黒褐色シルトを基調とする自然堆積である。重複関係・出土遺物はない。

ＳＫ４２０（第10図）　８区ＺＶ６グリッド東側中央に位置する。平面形は楕円形で、大きさは長軸1m・短軸75㎝で、深さは23㎝である。底面は不正楕円形で側壁に段がついている。覆土は灰黄褐色シルトの上に黒褐色砂混じりシルトが自然に堆積する。重複関係・出土遺物はない。

ＳＫ４２２（第10図）　８区ＺＶ５グリッド西側中央に位置する。平面形は不正角丸方形を呈し、大きさは長軸1m40㎝・短軸90㎝、深さは21㎝である。底面はほぼ平坦であるが、一部窪む部分がある。覆土は黒色粘質シルトの上に褐灰色シルトが自然に堆積する。検出面でＳＧ425を切るが、覆土がＳＧ425と酷似していることから、時期区分は異なるかもしれないが、ＳＧ425と同じ縄文時代の遺構と判断した。出土遺物はない。

ＳＫ４２６（第10図）　８区ＺＵ７グリッド北西側に位置する。平面形は楕円形を呈し、大きさは長軸75㎝・短軸45㎝で、深さは18㎝である。底面はほぼ平坦で、側壁は緩やかに立ち上がる。覆土は、にぶい黄褐色砂混じりシルトが自然に堆積する。重複関係・出土遺物はない。

ＳＫ４３２（第10図）　９区ＺＷ８グリッド中央に位置する。平面形は不正楕円形を呈し、北西隅を調査区の周囲壁によって切られる。大きさは検出長で、長軸1ｍ20㎝・短軸80㎝で、深さは52㎝である。底面は擂鉢状で、側壁は底面から三段階の傾斜を伴いながら緩やかに立ち上がり、縁の部分の傾斜はほとんど垂直になる。覆土は灰黄褐色シルト、酸化鉄と風化礫を含む褐灰色シルト、黒褐色シルトが順に自然堆積する様相を示す。但し、上から二層におよぶ黒褐色シルト層は、一旦掘り返した後に埋め直した形跡を示す。重複関係・出土遺物はない。最下層から出土した炭化物の年代測定結果より縄文時代早期末の遺構と判断した。

早　期　末

ＳＫ５１０（第11図）　７区Ｉ６グリッド北西部に位置する。平面形は不正楕円形を呈し、大きさは長軸1ｍ4㎝・短軸90㎝で、深さは12㎝である。底面は中央が擂鉢状になっており、側壁は緩やかに立ち上がる。覆土はにぶい褐色砂質シルトの上に灰褐色砂質シルトが自然に堆積する。重複関係・出土遺物はない。

ＳＫ５１１（第11図）　７区Ｉ６グリッド北西隅に位置する。平面形は不正楕円形を呈し、大きさは長軸1ｍ68㎝・短軸1ｍで、深さは24㎝である。底面はおおよそ平坦で、側壁は緩やかに立ち上がる。覆土は暗褐色シルトに黒褐色シルトが挟まれるようにして自然に堆積したものである。底部からやや大きめの凝灰岩質礫が検出された。重複関係はない。

Ｂ　性格不明遺構

ＳＸ６３０（第12図）　７区Ｋ７およびＪ７グリッドに位置する。当初は検出面の様相から、風倒木跡の上に溝跡ＳＤ627・柱穴ＳＰ628・土坑ＳＫ629がそれぞれ配置するものと考えて掘り進めたが、その後土坑に加えてその周辺からも縄文土器片が一括して検出されたため、全体をＳＸ630として登録し直した。覆土は均一ではなく、特に中央部分は比較的大きな礫が密に堆積するため、掘り進めることが困難であった。そこで、土器を包含する層を少しずつ広げるように可能な限り掘り進めると、図版に示したような遺構の形状となった。平面形は楕円形を呈し、大きさは長軸3ｍ60㎝・短軸約3ｍ、深さは最深部で24㎝である。覆土は黒褐色および暗褐色シルトを基調とし、黄褐色風化礫や炭化物を含む。出土遺物は縄文土器片59点（うち報告書掲載数７点）、土偶脚部１点（同１点）、石器４点（同１点）である。重複関係については、現代の溝跡と思われるＳＤ621およびＳＤ623から切られる。ＳＸ630→ＳＤ623、ＳＸ630→ＳＤ621→ＳＫ620の新旧関係になる。

土器片一括検出

Ｃ　河跡

ＳＤ４２５（第13図）　８区全域に及ぶ。８区北東隅から南西に向かって伸びる。その後８区中央で南西に真直ぐに伸びる流路と、西方に伸びる流路に分岐する。検出長は約30ｍで、幅は１～７ｍと部分的にバラつきがある。深さは、北東部が最も深く約50㎝、中央から下流については約５㎝である。底面は北東隅で擂鉢状に落ち込む部分があるが、その他はわずかに凸凹を持つものの、おおよそ平坦である。覆土は黒褐色または黒色シルトを基調にする自然堆積であ

るが、最上層の褐灰色砂層が各層を貫通するように底部までツララ状に垂れ下がっている。堆積の様相から、泥湿地のような地形に比重の重い砂が浸み込んでできた層のようである。ＳＫ422→ＳＤ425、ＳＤ433→ＳＤ425の重複関係がある。出土遺物はない。最下層から検出された炭化物の年代測定結果から、縄文時代早期末の遺構と判断した。

泥湿地

早期末

ＳＤ４３６（第14図）　９区ＺＷ10およびＺＶ10グリッドに位置する。検出長は約７ｍで、幅は約２ｍである。北部は削平を受けたためか、三又に分岐する。深さは、約４㎝と浅い。底面はゴツゴツした様相で、覆土は灰黄褐色粘質シルトが自然に堆積する。北東隅と南端部で、現代のものと思われる円形の撹乱によって切られる他に重複関係はなく、出土遺物もない。底面から検出された炭化物の年代測定結果から縄文時代早期初頭の遺構と判断した。

早期初頭

D　柱穴

ＳＰ５０６（第15図）　７区Ｊ６グリッド南西側に位置する。平面形は円形を呈し、直径40㎝、深さ10㎝である。底面は擂鉢上で、覆土はにぶい黄褐色シルトと暗褐色シルトの自然堆積である。側壁から縄文土器底部４分の１ほどの破片が出土している。重複関係はない。その他、図版にはＳＰ５０６の周辺で検出された類似する柱穴ＳＰ５０８・ＳＰ５０９・ＳＰ５１２・ＳＰ５１３・ＳＰ５１４を掲載した。遺物は検出されていないが、覆土が同様の性質であるため、縄文時代の遺構と思われる。

縄文土器底部片

2　縄文時代の遺物

縄文時代の遺物は、縄文土器片が71片、土偶片が１片、石器・石製品が15点出土している。このうち、縄文土器12点、土偶片１点、石器・石製品９点を図示した。時期が判別できる遺物から、縄文時代中期中葉のものが中心であると考えられる。

中期中葉

A　縄文土器・土製品（第25図・第26図10～13、写真図版21）

出土した縄文時代中期の土器は、大木８ａ式および８ｂ式土器が中心である。特徴として、口縁部にＳ字状や橋状の立体的な突起が付され、文様として口縁部に縦位の縄の側面圧痕、小波状の隆帯、刻み目等がしばしば用いられ、体部には沈線や無調整の隆帯・隆沈線により、曲折文や渦巻文などが施される。器種は、深鉢と浅鉢がある。

〔１〕～〔３〕は大木８ａ式土器に位置づけられるものである。〔１〕は浅鉢の口縁部破片で、やや内湾する器形である。全体に器面が摩滅しており、文様の有無が判然としない部分もあるが、口縁部上端に連続する縦位短沈線文を施し、部分的に波状の隆帯文で装飾する。〔２〕は深鉢の口縁部破片で、口縁部が外反する器形である。〔１〕と同様に、器面の摩滅が進み、文様の有無が判然としない部分があるが、ＬＲ縄文が施されていることがかすかに看取される。口縁上端には連続する縦位短沈線文が施されている。〔３〕は胴部と口縁部の間に、上下に平行する二条の隆帯を貼り付ける深鉢の口縁部と推測される。外面の摩滅がやや激しく、貼り付けられた隆帯も一部剥れている。〔４〕・〔５〕は大木８ｂ式土器に位置づけられるものである。いずれも深鉢の口縁部破片で、口縁部がやや内湾する器形であると思われる。共に縦のＳ字状文が施されていたと推測される。

大木8ａ式土器

大木8ｂ式土器

〔８〕～〔12〕はいずれも底部の破片である。器形は判然としないが、深鉢が主であろうと推測される。最も残存率の高い〔８〕は、磨耗が進んでいるものの底部に網代痕を残す。

西ノ前タイプ土偶

〔13〕の土偶片は、右脚部前方を残すのみであるが、その文様（横方向集合沈線文）から、縄文時代中期中葉の西ノ前タイプ土偶であると考えられる。胴部および頭部が検出されなかったためそれ以上の詳細は不明である。

なお、これらの出土遺物の出土地点や法量等の詳細については、表７に記載している。

B　石器・石製品（第26図14～17・第27図、写真図版22・23）

トゥール

出土した石器の中で、トゥールとして実際に使用されたと思われるものは〔14〕～〔16〕の３点である。〔14〕は頁岩製の掻器で、右側縁に両面加工が施されている。〔15〕は玉髄製の石錐で、左右の縁に両面加工が施されている。かなり使い込んだと思われ、両側縁の鋭利さはほとんど失われている。〔16〕は頁岩製の二次加工が認められる剥片である。基部は製作時に剥離したか失われたようである。残存した部分の右側縁を両面加工して使用したと思われる。

石核

〔17〕と〔18〕はいずれも石核である。〔17〕は頁岩製、〔18〕は泥岩製である。〔17〕が石質も良好で多様な方向から剥片を採取した形跡がある一方、〔18〕は石質が不良で、上方向からの打撃面が大半を占め、剥離面自体も比較的少ない。

剥片

〔19〕・〔20〕は頁岩製、〔21〕は安山岩製の剥片である。〔21〕には右側縁の片面に若干の二次加工が看取される。

擂り石

〔22〕は流紋岩製の擂り石である。元々扁平だった石を擂り石として利用した形跡が看取される。なお、これら出土遺物の出土地点や法量等の詳細については、表８に記載している。

参考・引用文献

柏倉亮吉・赤塚長一郎ほか	1975	『上山市牧野遺跡』上山市教育委員会
佐々木洋治・名和達朗ほか	1978	『水木田遺跡発掘調査報告書』山形県教育委員会
阿部実・月山隆弘ほか	1988	『原の内Ａ遺跡第３次発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財調査報告書第132集）財団法人山形県埋蔵文化財センター
黒坂雅人	1994	『西ノ前遺跡発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財センター調査報告書第１集）財団法人山形県埋蔵文化財センター
阿部明彦	1997	「中期大木式期の様相－西ノ前タイプ土偶の出現と展開－」『土偶研究の地平』（「土偶とその情報」研究論集（２））勉誠社
佐竹桂一	2002	『中川原Ｃ遺跡・立泉川遺跡発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財センター調査報告書第98集）財団法人山形県埋蔵文化財センター
菊地政信	2006	『台の上遺跡発掘調査報告書』（米沢市埋蔵文化財調査報告書第88集）米沢市教育委員会

Ⅴ　中世・近世の遺構と遺物

1　中世・近世の遺構

中世・近世の遺構については、掘立柱建物跡、土坑、性格不明遺構、溝跡が検出されている。これらの遺構の主なものについて、以下に掘立柱建物跡、柱穴、土坑、性格不明遺構の順に簡潔に説明する。

A　掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は７ａ区において４棟検出されている。但し、調査区の制約から完全な形で検出されたものは無い。これ以外にも、特に７ａ区中央から東側において多くの柱穴跡を検出したが、調査区の制約もあってこの中から掘立柱建物跡と認知できる組み合わせは見出せなかった。ここでは、検出を見た４棟について、その位置や規模について簡潔に説明する。なお、掘立柱建物跡の計測値は表６にまとめてある。また、１尺を0.303mとして計算している。

ＳＢ６８０（第18図）　７ａ区Ｊ７・Ｊ８・Ｋ７・Ｋ８グリッドにわたって検出されている。但し、北西部が調査区外に伸びるため、全体の詳細は不明である。検出された範囲の構造は、身舎の桁行３間、梁行１間以上であり、規模は桁行5.9m（19.4尺）、梁行2.44m（８尺）以上である。柱心心間の距離は、桁で西から７尺・６尺・6.6尺、梁で８尺となっている。主軸方向はＮ―57°―Ｗである。身舎の柱穴は直径30～45cmの円形または楕円形である。断面で検出された柱痕の直径は、柱穴ｃで14cmである。掘り方覆土は、炭化物を微量含む黒褐色シルトである。重複はＳＢ680→ＳＤ622の関係がある。遺構から出土した遺物はない。

ＳＢ６８１（第19図）　７ａ区Ｉ10・Ｉ11・Ｊ10・Ｊ11グリッドにわたって検出された。但し、北部が調査区外に伸びるため、全体の詳細は不明である。検出された範囲での構造は、身舎の桁行１間以上、梁行２間であり、南側から１間目に間仕切りの柱があると考えられる。また、東側に庇が１面付く。規模は桁行1.9m（6.3尺）以上、梁行3.78m（12.5尺）である。柱心心間の距離は、桁で6.3尺、梁で西から7.7尺・4.8尺、身舎と庇との距離は3.8尺となっている。主軸方向はＮ―25.2°―Ｅである。身舎の柱穴は直径30～40cmの円形または楕円形である。断面で検出された柱痕の直径は、柱穴ｂで14cmである。掘り方覆土は、黄褐色砂を微量含む黒褐色シルトを基調とする。新旧関係は不明であるが、ＳＢ682・ＳＫ532と重複の関係にある。柱穴ｆ（EB530）から流れ込みと思われる縄文時代の薄片石器が検出されている以外に遺構から出土した遺物は無いが、柱穴の形状・深さ・覆土の様相、さらに構造・規模・主軸の傾き等、ＳＢ682との類似点が多数看取されることから、ＳＢ682と同一時代の建物であろうと推測される。

SB 682 と同一時代

ＳＢ６８２（第19図）　７ａ区Ｉ10・Ｉ11・Ｊ10グリッドにわたって検出されている。但し、南部が調査区外に伸びるため、全体の詳細は不明である。検出された範囲での構造は、身舎の桁行１間以上、梁行２間である。また、東と西の２面に庇が付く。規模は桁行2.2m（7.3尺）以上、梁行3.78m（12.5尺）である。柱心心間の距離は、桁で7.3尺、梁で西から6.9尺・5.5尺、身

舎と庇との距離は西側が3.1尺、東側が3.5尺となっている。主軸方向はN―26.0°―Eである。身舎の柱穴は直径25～40cmの円形または楕円形である。断面で検出された柱痕の直径は、柱穴bで15cmである。掘り方覆土は、にぶい黄褐色砂を微量含む暗褐色砂質シルトを基調とする。SP521→SB682→SD523の新旧関係が明らかになっている。また、新旧関係は判然としないものの、SB681をはじめとする柱穴および性格不明遺構等と重複関係にある。遺構から出土した遺物は無いが、柱穴dから検出された炭化物の年代測定結果より、SB682は13世紀末から14世紀末にかけて建築されたものと考えられる。

13世紀末から14世紀末

SB683（第20図）　7a区Ⅰ12・Ⅰ13グリッドで検出された。但し、北部が調査区外に伸びるため、全体の詳細は不明である。検出された範囲での構造は、身舎の桁行4間、梁行1間以上である。規模は桁行7.8m（25.7尺）、梁行1.8m（6尺）以上である。柱心心間の距離は、桁で西から7.5尺・6尺・5尺・7.5尺、梁で6尺となっている。主軸方向はN―86.1°―Wである。身舎の柱穴は直径20～50cmの円形または楕円形である。柱痕の直径は、柱穴fで12cm程度である。掘り方覆土は、記録できたのが柱穴fについてのみであるが、風化礫粒をやや多く含む黒色または褐灰色シルトを基調とする。新旧関係は判然としないものの、SP663と重複関係にある。遺構から出土した遺物は無い。なお、ここでは東西に主軸を持つ掘立柱建物を想定して説明を行ったが、EB601・EB651の配置や柱穴の深さ等を考慮し、これらを除外して南北に主軸を持つ桁行1間以上、梁行2間の掘立柱建物を想定することも可能であろう。参考までに、この場合の主軸はN－3.9°－Eとなる。

B　遺物の出土した柱穴

SP559（第21図）　7a区I11グリッド中央に位置する。平面形は円形、大きさは直径42cm、深さは54cmである。柱穴底部から根固め石を検出した。本遺跡で最も深い柱穴であることから、高さ調節のために据えられたものであろうと思われる。

根固め石

SP606（第21図）　7a区I13グリッド南側に位置する。平面形は楕円形、大きさは長軸22cm・短軸18cm、深さは20cmである。SP605と重複し、SP606→SP605の新旧関係がある。覆土底部より柱材と思われる小片が検出されたが、腐食が激しかったため、報告書には図示していない。

SP616（第21図）　7a区H14グリッド北西隅に位置する。検出面の平面形は楕円形で、大きさは長軸54cm・短軸32cmである。柱穴はやや西側に寄っており、直径20cm、深さは16cmである。柱材の底部が検出されており、この柱材の年代測定結果から、この柱穴は、15世紀半ばから17世紀前半にかけて構築されたものと推定される。

15世紀半ばから17世紀前半

SP650（第21図）　7a区Ⅰ13グリッド中央に位置する。平面形は、直径16cm程の円形、深さは10cmである。覆土より、柱材の樹皮部分と見られる小片を検出しているが、腐食が激しいため、報告書には図示していない。

SP665（第21図）　7a区H13グリッド北東隅に位置する。平面形は長軸34cm、短軸30cmの楕円形で、深さは10cmである。やや腐食の進んだ柱材底部が検出されており、この柱材の年代測定結果から、この柱穴は、13世紀末から15世紀初頭にかけて構築されたものと推定される。

13世紀末から15世紀初頭

SP671（第21図）　7a区I13グリッド南側に位置する。平面形は、長軸28cm、短軸22cmの

楕円形で、深さは18㎝である。覆土中から、柱材と思われる小片が検出された。腐食が激しいため、報告書には図示していない。

C　土坑

ＳＫ５９９（第21図）　７ａ区Ⅰ13グリッド西側に位置する。平面形は長軸１ｍ28㎝、短軸１ｍの不正楕円形で、深さは18㎝である。黒褐色砂の上に、黒色または黒褐色の砂混じりシルトが自然堆積する。重複関係・出土遺物はない。

ＳＫ６０７（第21図）　７ａ区Ⅰ13グリッド南側に位置する。平面形は長軸88㎝、短軸52㎝の不正楕円形で、深さは22㎝である。褐灰色砂が自然堆積する。重複関係・出土遺物はない。

D　性格不明遺構

ＳＸ４２８（第21図）　９区ＺＷ８グリッド南東部に位置する。平面形は一辺２ｍ程の角丸方形で、深さは17㎝である。底面はおおよそ平坦で、側壁は緩やかに立ち上がる。覆土は、酸化鉄および炭化物を含むブロック状に堆積した褐灰色シルトが下層に、その上にブロック状の黒褐色シルトがそれぞれ堆積する。明らかな人為堆積である。重複関係・出土遺物ともにないが、覆土底部から検出した炭化物の年代測定結果より、12世紀末から13世紀後半にかけて構築された遺構と判断した。

人為堆積

12世紀末から13世紀後半

ＳＤ５６７（第22図）　７ａ区Ⅰ11およびⅠ12グリッドの境界を北から南に向けて流れる溝跡である。幅は１ｍ50㎝～２ｍ50㎝で、深さはおよそ30㎝である。覆土中から流れ込みと思われる縄文土器片が１片出土しているが、その他に出土遺物はない。この溝跡は、７ａ区の柱穴が集中する区域を二分する。この溝跡から西部は小高い丘状になっており、地盤はしまりの強い黒褐色シルトである。一方の東部は、灰黄褐色砂層で東部ほど地盤がゆるくなり、水が染み出してくる。中世・近世においても、屋敷や建物を構築する際に何らかの境界となっていた遺構ではないかと推測される。柱穴ＳＰ586と重複し、検出時の様相から、ＳＤ567→ＳＰ586の新旧関係が認められる。

柱穴集中区域を二分

2　中世・近世の遺物

A　中世陶磁器（第29図26～28、写真図版24）

中世陶磁器については、国産陶器２点と中国産青磁１点が出土している。遺構から検出されたものはなく、すべて表土除去の際に検出されたものである。〔26〕は７ｂ区から、〔27〕は８区から、また〔28〕は８・９区の境界を北から南に流れる農業用水路の堆積土下層からそれぞれ検出されている。

〔26〕は甕の体部破片である。胎土色調は褐灰色である。外面にヘラケズリ調整がなされ、内面に指頭痕が残されている。また、底部から右側面にかけて、漆接ぎがなされた痕跡を残す。〔27〕は極小片であるため、器種の断定が困難であるが、甕と推定した。外面にヘラケズリ、内面にナデ調整がなされている。胎土色調は灰黄色である。〔28〕は中国龍泉窯産青磁碗である。釉の色調は灰オリーブ色である。外面と底部にケズリ調整、内面にロクロナデ調整が施されている。

漆接ぎ

龍泉窯産青磁碗

内面には劃花文、見込みに圏線がそれぞれ彫り込まれている。12～13世紀代の所産と思われる。なお、これら出土遺物の出土地点および計測値等の詳細については、表11に記載している。

B　近世陶磁器（第29図29～37、第30図38～40・写真図版25）

近世陶磁器については、肥前の磁器（染付・色絵）、産地不明の陶器などが出土している。器種は碗が主体であるが、他に皿・小杯・瓶・段重がある。17世紀前半から19世紀代までの、幅広い年代のものが検出されているが、表土除去の際に出土したものがほとんどで、遺構から検出されたものはない。なお、これら出土遺物の出土地点および計測値等の詳細については、表11に記載している。

肥前磁器

〔29〕～〔38〕および〔40〕が肥前の磁器である。以下、簡潔に特徴を記す。

染付碗　〔30〕～〔35〕は染付碗である。内外面の文様として、草花不明文〔30・31〕、網目文〔32・33・34〕、矢羽根文〔35〕がある。小片が多いが、形状は丸碗が主体であると思われる。すべて18世紀代のもので、〔32・33〕が肥前Ⅳ期の初期、〔30・31・34・35〕が肥前Ⅳ期末の所産と推定する（大橋ほか2000）。

染付皿　〔29〕は染付皿である。内面の文様は、小片のため確認するのが困難であるが、見込み部分と内側面を仕切る二重圏線が描かれ、見込みと内側面の両方に花弁のような文様を描いているようである。高台部分が破損しており畳付け等の様相は不明であるが、高台の径が比較的小さいことが特徴として挙げられる。17世紀前半（肥前Ⅱ-２期）の所産と推定する（大橋ほか2000）。

小杯　〔36・40〕は小杯である。〔36〕は内外面に透明釉を施した後、口縁部のみに明オリーブ灰色釉を重ねている。〔40〕は白磁染付と思われるが、残存部は底部のみであり、文様は不明である。

白磁染付

兜巾高台　兜巾高台で、畳付けのみ無釉になっている。内外面に若干貫入が入っており、胎土質から焼成はやや不良であることが分かる。それぞれ〔40〕が17世紀前半（肥前Ⅱ-２期）、〔36〕が18世紀後半から19世紀前半にかけて（肥前Ⅴ期）の所産と推定する（大橋ほか2000）。

瓶　〔37〕は瓶類の頚部破片である。外面には植物文と思われる文様が描かれ、内面にはロクロ調整が施されている。頚部の径から推測すると、極小型の瓶のようである。17世紀半ばから末にかけて（肥前Ⅲ期）の所産と推定する（大橋ほか2000）。

色絵段重　〔38〕は色絵段重の口縁部破片である。内外面に透明釉が施されているが、口縁部のみ無釉にしているようである。被熱しているために本来の色は不明であるが、外面に黒色の不明文、外面口縁部に青色の圏線が施されている。19世紀（肥前Ⅴ期）の所産と推定する（大橋ほか2000）。

産地不明近世陶器

大堀相馬　〔39〕は産地不明の陶器碗である。大堀相馬等が産地の候補として挙げられる。内外面ともに灰釉が施され灰オリーブ色を呈する。但し、畳付けと高台内面の一部は無釉になる。内面の見込み部分に、重ね焼きの際に付いたと思われるハマ痕が付く。19世紀の所産と推定する。

C　木製品（第30図41～42・写真図版26-41～42）

木製品については、柱材が2点ほど出土している。

クリ丸太材

〔41〕は7 a区東側のＳＰ616から出土した柱材である。クリの丸太材で、外皮は除去されているが、側面に加工痕は確認されない。柱の根元部分だけが残り、腐食が進んで柱芯部が若干空洞化している。底面は工具により切断されたと推定されるが、腐食により加工状況は不明である。

マツ丸太材

〔42〕は7 a区東側のＳＰ665から出土した柱材である。マツの丸太材で、外皮は除去されているが、側面に加工痕は確認されない。〔41〕と同様に、腐食が進んでおり柱の根元部分の一部分が残るのみである。底面は工具により切断されたと推定されるが、腐食により加工状況は不明である。

D　石製品（第31図・写真図版26-43）

根固め石

〔43〕は、7 a区ＳＰ559から検出された根固め石である。ＳＰ559は今次調査で検出された柱穴中、最も深い柱穴である。そのため、高さ調整のために柱底部に据えられたものと思われる。花崗岩で、片方に大きな割れ面がある。石の周りに炭化物が付着しているため被熱したと思われるが、割れ面に炭が付着していないことに加え、柱が据えられた上面よりもむしろ、底面のほうが炭の付着が顕著である。このことから、異なる場所で被熱した後に根固め石として転用されたものと推測される。

参考・引用文献

大橋康二　1989　『肥前陶磁』ニュー・サイエンス社
大橋康二ほか　2000　『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会
宮本長二郎ほか　2001　『掘立と竪穴』東北中世考古学会
押切智紀ほか　2003　『東畑Ａ遺跡発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財センター調査報告書第116集）財団法人山形県埋蔵文化財センター
大橋康二　2004　『世界をリードした磁器窯・肥前窯』新泉社

Ⅵ　その他の遺構と遺物

1　弥生時代の遺構

ＳＫ４２７（第16図）　９区ＺＷ８グリッドの南西隅に位置する。平面形は不正楕円形を呈する。大きさは長軸1m45cm・短軸1m15cm、深さ47cmである。底面および側壁は擂鉢状になっており、緩やかに立ち上がる。覆土は褐灰色シルトと黒褐色シルトを基調とするが、黄砂が堆積したと思われる特徴的な約３㎜の水平な層が一段入っている。自然堆積と思われる。また、覆土１層目に直径15cm大の炭化物が、最下層からも炭化物の小片が検出されている。重複関係・出土遺物はないが、これら炭化物の年代測定結果から、弥生時代の遺構であると判断した。

黄　砂　層

ＳＤ４３３（第16図）　９区ＺＶ８およびＺＵ８グリッドに位置する。検出長は約10m、深さは最深部で40cm、幅は１m30cmから３m20cmである。北から南東方向へ、カーブしながら流れる形状を呈す。底面は平坦であり、側壁は緩やかに傾斜しながら立ち上がる。覆土は明黄褐色シルトの上に、にぶい黄褐色シルトが自然に堆積する。ＳＸ435と重複し、ＳＤ433→ＳＸ435の新旧関係がある。出土遺物はないが、覆土最下層から検出された炭化物の年代測定結果から、弥生時代の遺構であると判断した。

2　古墳時代の遺構と遺物

ＳＰ４１３（第17図）　９区ＺＵ７グリッド北東隅に位置する。平面形は直径35cmの円形で、深さは40cmである。覆土は褐色または黒褐色の粘質シルトである。覆土中から杭材が検出された。杭は、垂直ではなく、30°程傾いて打ち込まれている。この柱穴の周辺にも、形状や覆土の性質が似通った柱穴が多数存在するが、杭材等の遺物は検出されていない。また、他の柱穴にも杭痕が傾くものが多いが、傾きの方向に規則性は認められなかった。

クヌギの杭材

〔23〕はＳＰ413から出土したクヌギの杭材である（第28図23、写真図版26-23）。腐食が進み、杭材の先端部分の極一部が残るのみである。杭材の中央が腐食のために窪んだ形状になっている。長さは19.5cm、直径は2.5cmである。明瞭ではないが、杭側面に部分的に工具による加工痕が残されているように思われる。自然化学的分析の結果、6 世紀末～ 7 世紀中頃（古墳時代後期）の年代範囲に入ることがわかっている。なお、計測値等の詳細は、表 9 に記載している。

3　奈良・平安時代の遺物（第28図24・25、写真図版24-24・25）

奈良・平安時代の遺物としては、〔24〕と〔25〕の２点が出土している。いずれも遺構からではなく、８・９区の境界を流れる農業用水路の覆土下層から検出されたもので、開田の際の流れ込みと思われる。産地は不明である。

須　恵　器

〔24〕は胎土色調が灰白色の須恵器壺で、胎土に黒色粒が少量混入する。内外面ともにロクロナデ調整が施されるのに加え、内面には緑色の自然釉が認められる。焼成時に壺の内側に灰が混入したものと思われる。〔25〕は胎土色調が褐灰色の須恵器坏の蓋で、胎土に黒色粒が少量混

入する。内外面ともにロクロナデ調整が施されている。また、蓋の内側には焼成時に重ね焼きした際に、焼成が不良になったと思われる跡が帯状に残されている。なお、計測値等の詳細は、表10に記載している。

重ね焼き痕

4　時期不明の遺構

ここでは、時代の特定が困難な遺構を提示する。

ＳＫ４２１（第23図）　８区ＺＶ５グリッド北東部に位置する。平面形は不正楕円形で、大きさは長軸1150㎜・短軸550㎜、深さは150㎜である。底面は礫層になっており、覆土は白色風化礫を含む黒褐色砂質シルトを基調とする自然堆積である。重複関係・出土遺物はない。

ＳＫ４２３（第23図）　８区ＺＵ４グリッド南西側に位置する。平面形は楕円形を呈し、大きさは長軸750㎜・短軸330㎜で、深さは70㎜である。底面は検出面同様楕円形で、褐灰色砂質シルトを基調とする覆土が自然堆積する。下層には、ＳＧ425の覆土と同様な黒色粘土質シルトが堆積していることから、撹乱の可能性もある。重複関係・出土遺物はない。

ＳＫ４２４（第23図）　８区ＺＵ６グリッド中央に位置する。平面形は楕円形を呈し、大きさは長軸900㎜・短軸450㎜で、深さは170㎜である。底面も検出面同様の楕円形で、黒褐色シルトの上に白色風化礫を含む褐灰色砂が自然に堆積する。ＳＫ423と同様に、下層には、ＳＧ425の覆土と同様な黒色粘土質シルトが堆積していることから、撹乱の可能性もある。重複関係・出土遺物はない。

ＳＸ４３５（第23図）　９区ＺＶ８グリッド中央に位置する。平面形は、長軸3ｍ50㎝・短軸80㎝の長方形の隅を丸めたような形状である。中央が浅く、東西の両端が若干深くなっている。西側の落ち込み部分から炭化した木材の塊を検出した。覆土は風化礫・炭化物・酸化鉄を少量ずつ含む灰黄褐色シルトで、自然堆積である。ＳＤ433と重複し、ＳＤ433→ＳＸ435の新旧関係にある。出土遺物はないが、覆土の様相から、ＳＤ433と程近い時代の遺構ではないかと推測する。

ＳＸ４３９（第23図）　９区ＺＷ９グリッド北側に位置する。平面形は調査区の境界に切られるため明らかでないが、検出された部分は不正半楕円形を呈す。大きさは、長軸1ｍ20㎝・短軸80㎝、深さは9㎝である。底面から縁まで、緩やかに立ち上がる。覆土は、黒褐色シルトの上に灰黄褐色砂質シルトが自然に堆積した様相である。ＳＤ440と重複し、ＳＸ439→ＳＤ440の新旧関係がある。出土遺物はない。

ＳＤ４４０（第23図）　９区ＺＷ９グリッド北側に位置する。調査区の外周に切られる。平面形は、検出長で８ｍ20㎝、幅約40㎝、深さ２㎝程である。底面は平坦で、覆土は黒褐色シルトである。覆土の様相から、比較的新しい遺構ではないかと思われるが、出土遺物が無いため時期は不明である。ＳＸ439と重複し、ＳＸ439→ＳＤ440の新旧関係がある。

ＳＤ５５７（第24図）　７区Ｉ１１グリッド北東部に位置する。検出長は３ｍ30㎝、幅は40㎝、深さは北西部が浅く、南東部がやや深くなっており、深いところで20㎝程である。覆土は黒色シルトを基調とする自然堆積の様相を示す。ブドウの根の成長による撹乱を受ける。円を描くような形状をしており、溝を切る柱穴が４基存在することから、掘立柱建物跡等の周溝の可能性も考えられるが、出土遺物がないため詳細は不明である。

周溝の可能性

ＳＤ６２１（第24図）　７区Ｋ７・Ｊ７グリッドに位置する。検出長は10ｍ50㎝、幅は24～68㎝、

深さは４㎝である。底面はほぼ平坦であるが、西側は底部が礫層になるため凸凹がある。覆土は植物根が混入する暗褐色シルトである。ＳＤ622と重複し、ＳＤ622→ＳＤ621の新旧関係がある。出土遺物がないため詳細は不明であるが、覆土の様相から、現代に近い遺構でＳＤ623とほぼ同時期のものと思われる。

ＳＤ６２２（第24図）　７区Ｋ７・Ｊ７グリッドに位置する。調査区外周により、南北端を切られる。検出長は10m、幅は70㎝、深さは10㎝である。底面はほぼ平坦で、覆土は黄褐色風化礫をやや多く含む黒褐色シルトである。ＳＤ621・ＳＤ623・ＥＢ631と重複し、ＥＢ631→ＳＤ622→ＳＤ621・ＳＤ623の新旧関係がある。出土遺物がないため詳細は不明である。

ＳＤ６２３（第24図）　７区Ｋ７・Ｊ７グリッドに位置する。検出長は7m60㎝、幅は10㎝、深さは３㎝である。底面はほぼ平坦で、覆土は植物根を混入する黒褐色シルトである。ＳＤ622と重複し、ＳＤ622→ＳＤ623の新旧関係がある。出土遺物がないため詳細は不明であるが、覆土の様相から、現代に近い遺構でＳＤ621とほぼ同時期のものと思われる。

参考・引用文献

中村　浩　　1993　　『須恵器』ニュー・サイエンス社

Ⅶ　自然科学的分析

1　放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ
小林紘一・丹生越子・伊藤茂・山形秀樹・瀬谷薫
Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani・中村賢太郎

A　はじめに

加速器質量分析法（ＡＭＳ法）

上野遺跡（第２次）より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。試料の調整は山形、瀬谷、Lomtatidze、Jorjolianiが、測定は小林、丹生、伊藤が行い、報告文は伊藤、中村が作成した。

B　試料と方法

測定試料の情報、調整データは表３のとおりである。試料は８区から検出された炭化材１点、９区から検出された生材１点と炭化材５点、７ａ区から検出された生材３点と炭化材３点、合計13点である。

試料は調整後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製1.5SDH）を用いて測定した。得られた14C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、14C年代、暦年代を算出した。

C　結果

表４に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ13C）、同位体分別効果の補正を行った14C年代、14C年代を暦年代に較正した年代範囲、暦年較正に用いた年代値をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

14C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。14C年代（yrBP）の算出には、14Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した14C年代誤差（±１σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の14C年代がその14C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。

Libbyの半減期5568年

なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正

暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5568年として算出された14C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、及び半減期の違い（14Cの半減期5730±40年）を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

暦年較正

14C年代の暦年較正にはOxCal3.10（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、１σ暦年

代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された14C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表4中に下線で示してある。

D　考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

8区SG425　PLD-6167の8区SG425-F（底部）から検出された炭化材は、暦年較正を行った結果、1σ暦年代範囲において5410-5380calBC（29.0%）、5480-5465calBC（22.6%）、5445-5420calBC（16.6%）、2σ暦年代範囲において5490-5370calBC（95.4%）であり、縄文時代早期末の年代範囲である。

9区SP413　PLD-6168の9区SP413から検出された生材（樹種：クヌギ節）は、暦年較正を行った結果、1σ暦年代範囲において600-640calAD（68.2%）、2σ暦年代範囲において575-650calAD（95.4%）であり、6世紀末～7世紀中頃（古墳時代後期）の年代範囲である。

9区SK427　PLD-6169の9区SK427-F1から検出された炭化材（樹種：クヌギ節）は、同様に1σ暦年代範囲において210-160calBC（54.1%）、350-320calBC（9.1%）、130-120calBC（5.0%）、2σ暦年代範囲において210-100calBC（77.4%）、350-300calBC（18.0%）であり、弥生時代の年代範囲である。

9区SX428　PLD-6170の9区SX428-F（底部）から検出された炭化材は、同様に1σ暦年代範囲において1215-1255calAD（68.2%）、2σ暦年代範囲において1205-1270calAD（92.3%）、1185-1200calAD（3.1%）であり、12世紀末から13世紀後半（中世）の年代範囲である。

9区SK432　PLD-6171の9区SK432-F（底部）から検出された炭化材は、同様に1σ暦年代範囲において5710-5640calBC（68.2%）、2σ暦年代範囲において5725-5630calBC（95.4%）であり、縄文時代早期末の年代範囲である。

9区SD433　PLD-6172の9区SD433-F（底部）から検出された炭化材（樹種：クヌギ節）は、同様に1σ暦年代範囲において300-200calBC（60.0%）、370-350calBC（8.2%）、2σ暦年代範囲において330-200calBC（78.1%）、380-340calBC（17.3%）であり、弥生時代の年代範囲である。

9区SG436　PLD-6173の9区SG436-F（底部）から検出された炭化材は、同様に1σ暦年代範囲において9120-9000calBC（43.0%）、8860-8800calBC（17.9%）、8920-8890calBC（7.3%）、2σ暦年代範囲において9140-8970calBC（50.7%）、8940-8760calBC（44.7%）であり、縄文時代早期初頭の年代範囲である。

7区SP521　PLD-6720の7 a区SP521から検出された炭化材（樹種：カエデ属）は、同様に1σ暦年代範囲において1360-1385calAD（37.6%）、1285-1305calAD（30.6%）、2σ暦年代範囲において1350-1390calAD（50.4%）であり、1280-1320calAD（45.0%）、13世紀末から14世紀末（中世）の年代範囲である。

7区EB534　PLD-6721の7 a区EB534から検出された炭化材（サクラ属）は、同様に1σ暦年代範囲において1360-1385calAD（40.0%）、1285-1310calAD（28.2%）、2σ暦年代範囲において1340-1400calAD（52.0%）、1280-1320calAD（43.4%）であり、13世紀末から14世紀末（中世）の年代範囲である。

7区SP606　PLD-6722の7 a区SP606から検出された生材（マツ属）は、同様に1σ暦年代範囲において1450-

1500calAD(54.4%)、1600-1620calAD(13.8%)、2σ暦年代範囲において1440-1530calAD(72.9%)、1570-1630calAD(22.5%)であり、15世紀半ばから17世紀前半(中世～近世)の年代範囲である。

PLD-6723の7 a区SP616から検出された生材(クリ)は、同様に1σ暦年代範囲において1440-1475calAD(68.2%)、2σ暦年代範囲において1430-1510calAD(90.8%)、1600-1620calAD(4.6%)であり、15世紀前半から17世紀初頭(中世～近世)の年代範囲である。

7区SP616

PLD-6724の7 a区SP647から検出された炭化材(マツ属複維管束亜属)は、同様に1σ暦年代範囲において1275-1300calAD(61.8%)、1370-1380calAD(6.4%)、2σ暦年代範囲において1270-1310calAD(72.5%)、1360-1390calAD(22.9%)であり、13世紀後半から14世紀末(中世)の年代範囲である。

7区SP647

PLD-6725の7 a区SP665から検出された生材(マツ属複維管束亜属)は、同様に1σ暦年代範囲において1335-1365calAD(28.0%)、1305-1330calAD(27.7%)、1385-1400calAD(12.5%)、2σ暦年代範囲において1290-1410calAD(95.4%)であり、13世紀末から15世紀初頭(中世)の年代範囲である。

7区SP665

なお、木材は部位によって形成された時期が異なり、古い時期に形成された組織はその分古い年代を示す。たとえば年輪は、最外年輪の年代が枯死・伐採年を示し、内側の年輪であるほど古い年代を示す。PLD-6167、6168、6169、6171、6172、6173、6720、6721、6723、6724、6725の試料は最外年輪以外であり、かつ部位が不明な部分を測定しているため、これらの年代は枯死・伐採年よりも古く出ていると考えられる。PLD-6170の試料は枝であり部位が不明であるため、年代は枯死・伐採年よりも古く出ている可能性があるが、枝であるので枯死・伐採年との時間差の程度は小さいと考えられる。PLD-6722の試料は最外年輪であることから、PLD-6722の年代は枯死・伐採年を示すと考えられる。

最外年輪

参考文献

Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program, Radiocarbon, 37, 425-430.
Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43, 355-363.
中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の14C年代,3-20.
Reimer PJ, MGL Baillie, E Bard, A Bayliss, JW Beck, C Bertrand, PG Blackwell, CE Buck, G Burr, KB Cutler, PE Damon, RL Edwards, RG Fairbanks, M Friedrich, TP Guilderson, KA Hughen, B Kromer, FG McCormac, S Manning, C Bronk Ramsey, RW Reimer, S Remmele, JR Southon, M Stuiver, S Talamo, FW Taylor, J van der Plicht, and CE Weyhenmeyer. (2004) IntCal04 Terrestrial Radiocarbon Age Calibration,0 26 cal kyr BP, Radiocarbon,46,1

表３　測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理	測定
PLD-6167	位置：8区 遺構：SG425-F(底部) 遺物No：2炭化物 層位：ベルト①(最下層) その他：河川跡または溝跡	試料の種類：炭化物・材 試料の性状：最外以外部位不明 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N，水酸化ナトリウム0.1N，塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-6168	位置：9区 遺構：SP413 遺物No：3木材 その他：杭跡	試料の種類：生試料・材(クヌギ節) 試料の性状：最外以外部位不明 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N，水酸化ナトリウム1N，塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-6169	位置：9区 遺構：SK427-F1 遺物No：4炭化物 層位：(1層目) その他：土坑跡	試料の種類：炭化物・材(クヌギ節) 試料の性状：最外以外部位不明 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N，水酸化ナトリウム0.1N，塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-6170	位置：9区 遺構：SX428-F(底部) 遺物No：6炭化物 その他：土坑跡	試料の種類：炭化物・材(枝) 試料の性状：不明 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N，水酸化ナトリウム1N，塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-6171	位置：9区 遺構：SK432-F(底部) 遺物No：7炭化物 その他：土坑跡	試料の種類：炭化物・材 試料の性状：最外以外部位不明 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N，水酸化ナトリウム0.1N，塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-6172	位置：9区 遺構：SD433-F(底部) 遺物No：10炭化物 層位：(底部) その他：河川跡または溝跡	試料の種類：炭化物・材(クヌギ節) 試料の性状：最外以外部位不明 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N，水酸化ナトリウム0.1N，塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-6173	位置：9区 遺構：SG436-F(底部) 遺物No：11炭化物 その他：河川跡または溝跡	試料の種類：炭化物・材 試料の性状：最外以外部位不明 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N，水酸化ナトリウム0.1N，塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-6720	位置：7a区 遺構：SP521 遺物No：1 その他：柱穴	試料の種類：炭化物・材(カエデ属) 試料の性状：最外以外部位不明 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N，水酸化ナトリウム1N，塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-6721	位置：7a区 遺構：EB534 遺物No：2-1 その他：柱穴	試料の種類：炭化物・材(サクラ属) 試料の性状：最外以外部位不明 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N，水酸化ナトリウム1N，塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-6722	位置：7a区 遺構：SP606 遺物No：3 その他：柱穴	試料の種類：生試料・材(マツ属、樹皮あり) 試料の性状：最外年輪 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N，水酸化ナトリウム1N，塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-6723	位置：7a区 遺構：SP616 遺物No：4 その他：柱穴	試料の種類：生試料・材(クリ) 試料の性状：最外以外部位不明 状態：wet カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N，水酸化ナトリウム1N，塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-6724	位置：7a区 遺構：SP647 遺物No：5 その他：柱穴	試料の種類：炭化物・材 (マツ属複維管束亜属、やや生焼け)試料の性状：最外以外部位不明 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N，水酸化ナトリウム1N，塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-6725	位置：7a区 遺構：SP665 遺物No：7 その他：柱穴	試料の種類：生試料・材(マツ属複維管束亜属) 試料の性状：最外以外部位不明 状態：wet カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N，水酸化ナトリウム1N，塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC製コンパクトAMS・1.5SDH

表４　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}C$ (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲		暦年較正用年代 (yrBP±1σ)
			1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲	
PLD-6167	−26.84±0.11	6475±25	5480BC(22.6%)5465BC 5445BC(16.6%)5420BC 5410BC(29.0%)5380BC	5490BC(95.4%)5370BC	6475±25
PLD-6168	−29.45±0.11	1445±20	600AD(68.2%)640AD	575AD(95.4%)650AD	1443±20
PLD-6169	−26.50±0.12	2145±20	350BC(9.1%)320BC 210BC(54.1%)160BC 130BC(5.0%)120BC	350BC(18.0%)300BC 210BC(77.4%)100BC	2143±20
PLD-6170	−29.03±0.13	810±20	1215AD(68.2%)1255AD	1185AD(3.1%)1200AD 1205AD(92.3%)1270AD	812±19
PLD-6171	−27.46±0.11	6775±30	5710BC(68.2%)5640BC	5725BC(95.4%)5630BC	6776±30
PLD-6172	−29.28±0.11	2220±20	370BC(8.2%)350BC 300BC(60.0%)200BC	380BC(17.3%)340BC 330BC(78.1%)200BC	2222±20
PLD-6173	−25.95±0.27	9555±35	9120BC(43.0%)9000BC 8920BC(7.3%)8890BC 8860BC(17.9%)8800BC	9140BC(50.7%)8970BC 8940BC(44.7%)8760BC	9553±33
PLD-6720	−23.33±0.12	655±20	1285AD(30.6%)1305AD 1360AD(37.6%)1385AD	1280AD(45.0%)1320AD 1350AD(50.4%)1390AD	656±22
PLD-6721	−24.57±0.16	650±25	1285AD(28.2%)1310AD 1360AD(40.0%)1385AD	1280AD(43.4%)1320AD 1340AD(52.0%)1400AD	652±23
PLD-6722	−27.27±0.12	380±20	1450AD(54.4%)1500AD 1600AD(13.8%)1620AD	1440AD(72.9%)1530AD 1570AD(22.5%)1630AD	382±21
PLD-6723	−26.59±0.12	415±20	1440AD(68.2%)1475AD	1430AD(90.8%)1510AD 1600AD(4.6%)1620AD	413±22
PLD-6724	−26.56±0.17	685±20	1275AD(61.8%)1300AD 1370AD(6.4%)1380AD	1270AD(72.5%)1310AD 1360AD(22.9%)1390AD	687±22
PLD-6725	−28.43±0.17	605±20	1305AD(27.7%)1330AD 1335AD(28.0%)1365AD 1385AD(12.5%)1400AD	1290AD(95.4%)1410AD	604±21

2　上野遺跡（第２次）9区・7a区出土木材・柱材および炭化材の樹種同定

植田弥生（パレオ・ラボ）

A　はじめに

ここでは、９区および７ａ区から出土した炭化材および木材、合計11試料の樹種同定結果を報告する。一部の試料以外は、加速器質量分析法による放射性炭素年代測定が実施されている（別報参照）。樹種同定も実施することにより、年代値を示した測定試料の実体を明らかにしておく事に加え、各時期の樹種利用や器種による樹種選択性の情報を得ることができ、地域の資料蓄積にもなる。

B　樹種同定の方法

生木　生木の木材は、材の３方向（横断面・接線断面・放射断面）を見定めて、剃刀を用い各方向の薄い切片を剥ぎ取り、スライドガラスに並べ、ガムクロラールで封入し、永久プレパラート（材組織標本）を作成した。この材組織標本を、光学顕微鏡で40～400倍に拡大し観察した。材組織標本は、パレオ・ラボに保管されている。

炭化材　炭化材は、横断面（木口）は手で割り、接線断面と放射断面は実体顕微鏡下で各方向を見定めてそれぞれの方向に沿って片刃の剃刀を当て、軽く弾くように割り各断面を作成した。次にこの３断面（横断面・接線断面・放射断面）を、直径１㎝の真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡（日本電子㈱製　JSM-T100型とJSM-5900LV型を使用）で観察と写真撮影を行った。９区番号４と10は、一塊の炭化材であることを確認し、保存の良好な一部を取り出した。７ａ区番号２には、異なる種類の破片が含まれていたので、各破片に枝番号を当て同定した。残りの炭化材は、山形県埋蔵文化財センターに保管されている。

C　結果

9区出土材　９区から出土した杭跡の木材1試料、土坑跡の炭化材1試料、河川跡または溝跡の1試料は、すべてブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節であった。杭跡の木材は、杭材の形状はほとんど認められないほどにやせ細った棒状材であった（図版１の４）。土坑跡と河川跡または溝跡から出土した炭化材は、シルトの上面に残存していた炭化材で、厚みはほとんどないが11㎝×13～16㎝の広がりがあり、いずれも比較的大きな材の一部と思われるものであった（図版１の５・６）。

7a区出土材　７ａ区は柱穴から出土した炭化材３試料と柱材５試料である。炭化材からは、マツ属複維管束亜属・クリ・サクラ属・カエデ属が検出された。炭化材はいずれも１㎝角弱の小破片であった。７ａ区番号２からは、マツ属複維管束亜属・クリ・サクラ属・カエデ属のすべてが検出され、特にサクラ属の破片が目立った。７ａ区番号５のマツ属複維管束亜属の炭化材は、直径1.7㎝の小枝で分枝部も見られ、一部側面は未炭化であった。柱材５試料は、マツ属（１試料）・マツ属複維管束亜属（２試料）・クリ（１試料）・樹皮（１試料）であった。

7 a 区番号 3 のマツ属は、材組織の保存が悪いため、単維管束亜属と複維管束亜属の識別ができなかった。7 a 区番号 6 は、樹皮部分であるため種類は特定できないが、広葉樹の樹皮と思われた。

以下に同定根拠とした材組織の特徴を記載し、材組織写真を提示した。

（1）マツ属複維管束亜属　Pinus subgen.Diploxylon マツ科　図版 2　1a-1c（7 a 区番号 8）　図版 3　1b・1c（7 a 区番号 2－4）

垂直と水平の樹脂道がある針葉樹材。早材から晩材への移行はゆるやかで、年輪幅は広い。分野壁孔は窓状で、放射組織の上下端に放射仮道管がありその内壁には鋸歯状肥厚があることから、マツ属複維管束亜属のアカマツまたはクロマツである。

（2）コナラ属コナラ亜属クヌギ節　Quercus subgen.Quercus sect.Cerris　ブナ科　図版 1　1a-1c（9 区番号 3）2a-2c（9 区番号 4）3a（9 区番号10）

年輪の始めに大型の管孔が 1 ～ 3 層配列し、その後は孔口が円形で厚壁の小型管孔が単独で放射方向に配列している環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔である。放射組織はほぼ同性、単列のものと大型の複合放射組織があり、道管との壁孔は柵状である。

クヌギ節には、クヌギとアベマキが属する。

（3）クリ　Castanea crenata Sieb.et Zucc.ブナ科　図版 2　2a-2c（7 a 区番号 8）図版 3　2a（7 a 区番号 2－2）

年輪の始めに中型～大型の管孔が配列し除々に径を減じてゆき、晩材では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単穿孔、内腔にはチロ―スがある。放射組織は単列同性、道管との壁孔は孔口が大きく交互状である。

（4）サクラ属 Prunus バラ科　図版 3　2a-2c（7 a 区番号 2－1）

小型の管孔が年輪の始めにやや密に分布し、その後は放射状・接線状・斜状に複合し分布している散孔材。道管の穿孔は単穿孔、内腔にらせん肥厚がうねるように走行している。放射組織は同性に近い異性、主に 5 細胞幅、道管との壁孔は小型で密在する。

サクラ属は暖帯から温帯の山地に生育する落葉広葉樹林の代表的な属で、多くの種を含む。

（5）カエデ属 Acer カエデ科 図版 3　4a-4c（7 a 区番号 2－4）

小型の管孔が単独または 2 ～数個が放射方向に複合し均一に分布している散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、内腔に細いらせん肥厚がある。放射組織は同性、1 ～ 2 細胞幅である。

カエデ属は日本全土の暖帯から温帯の山地や谷間に生育し、落葉広葉樹林の主要構成樹で、約26種と多くの変種が知られている。

D　考察

9 区および 7 a 区から出土した炭化材および木材合計11試料の樹種同定を行った結果、9 区の 3 試料と 7 a 区の 8 試料では、検出樹種に違いがあり、年代値からも時期が異なることが判った。9 区の 3 試料はすべて落葉広葉樹のクヌギ節であり、杭跡の木材は古墳後期の年代値で、土坑跡と河川跡または溝跡の炭化材は弥生時代であった。一方、発掘状況や年代測定値からも中・近世と考えられる 7 a 区の11試料は、柱材や柱穴出土炭化材で、針葉樹のマツ属複維管束

9 区出土材

7 a 区出土材

亜属が多く、そのほかにサクラ属・カエデ属・クリの落葉広葉樹が検出された。

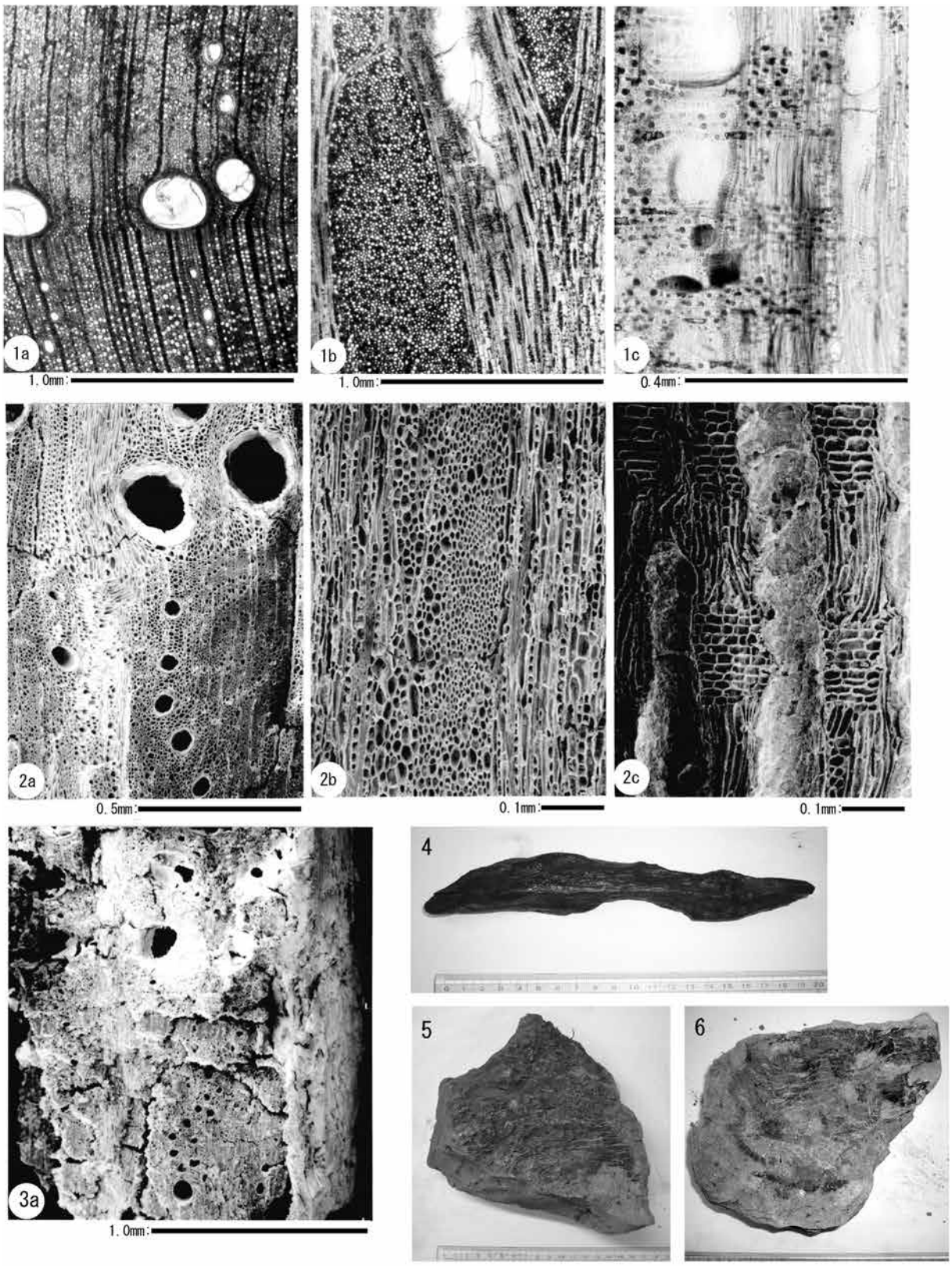
9区と7a区では、遺構の性格が異なり出土木材や炭化材の用途も異なるので、一概には比較できないが、古墳時代後期以前と中・近世では利用していた森林の樹種組成が違っていた可能性が推測される。古墳時代後期以前は、山形県・岩手県以南の暖帯の山林に普通の高木で、二次林にも多く生育するクヌギ節の利用が多いことから、クヌギ節が多く生育していたものと思われる。しかし、中・近世になると同じ二次林要素でもマツ属複維管束亜属の利用が多くなり、マツ林の拡大や利用度が増したと思われる。

クヌギ節

マツ林

表5　上野遺跡(第2次)9区および7a区出土炭化材樹種同定結果一覧

地区	分析試料番号	出土地点	試料内容		樹種	年代測定№
9区	3	SP413	木材	杭跡	クヌギ節	PLD-6168
9区	4	SK427-F1 1層目	炭化材	土坑跡	クヌギ節	PLD-6169
9区	10	SD433-F(底部)	炭化材	河川跡または溝跡	クヌギ節	PLD-6172
7a区	1	SP521	炭化材	柱穴(I10)	カエデ属	PLD-6720
7a区	2-1	EB534	炭化材	柱穴(I11)	サクラ属	PLD-6721
	2-2				クリ	—
	2-3				カエデ属	—
	2-4				マツ属複維管束亜属	—
7a区	3	SP606	柱材	柱穴(I13)	マツ属	PLD-6722
7a区	4	SP616	柱材	柱穴(H14)	クリ	PLD-6723
7a区	5	SP647	炭化材(一部未炭化)	柱穴(I13)	マツ属複維管束亜属	PLD-6724
7a区	6	SP650	柱材	柱穴(I13)	樹皮(広葉樹？)	—
7a区	7	SP665	柱材	柱穴(I13)	マツ属複維管束亜属	PLD-6725
7a区	8	SP671	柱材	柱穴(I13)	マツ属複維管束亜属	—

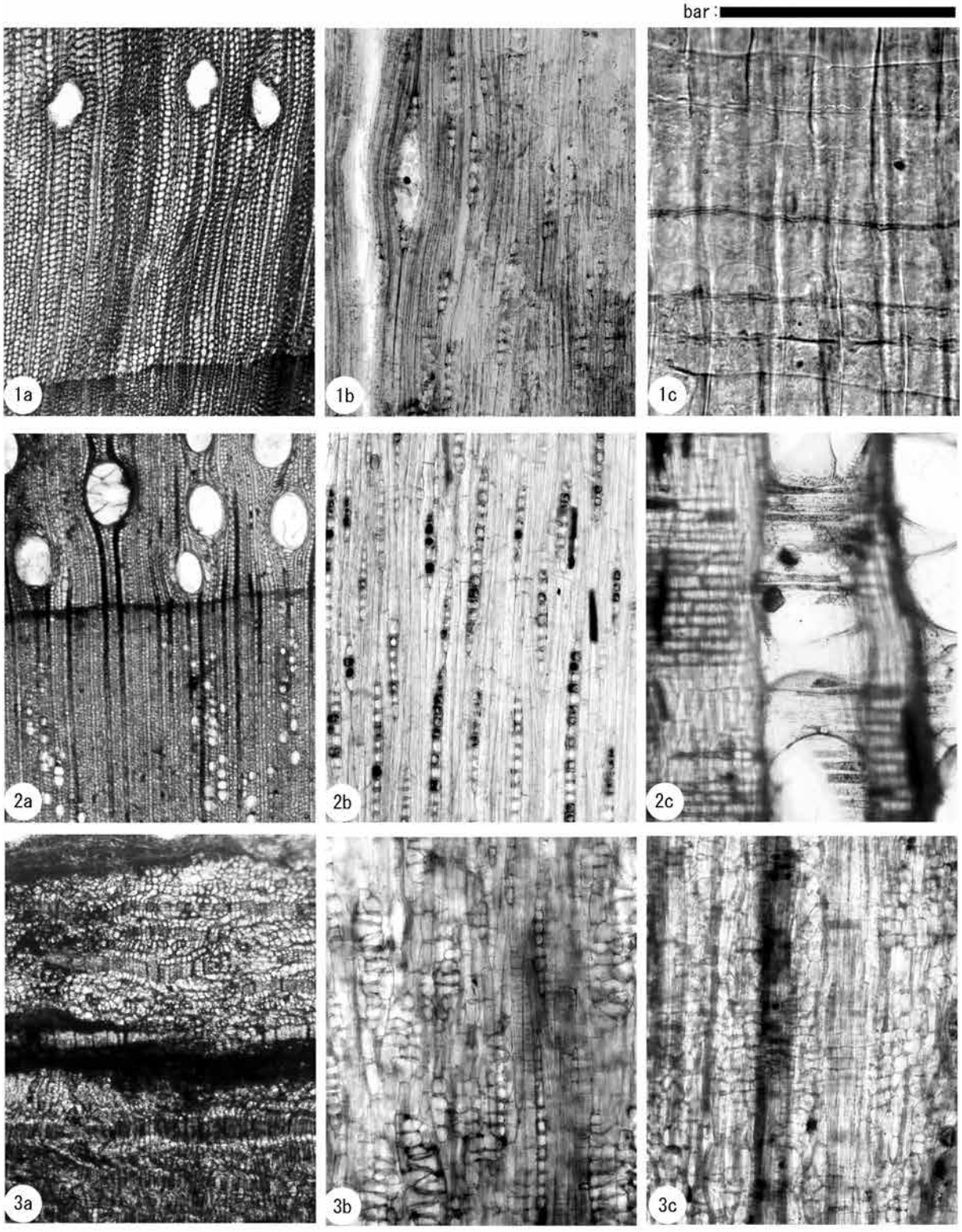


図版１　上野遺跡（第２次）9 区出土木材および炭化材の材組織写真

1a-1c：クヌギ節（9 区番号 3）　2a-2c：クヌギ節（9 区番号 4）　3a：クヌギ節（9 区番号 10）

4:9 区番号 3 試料　　5:9 区番号 4 試料　6:9 区番号 10 試料

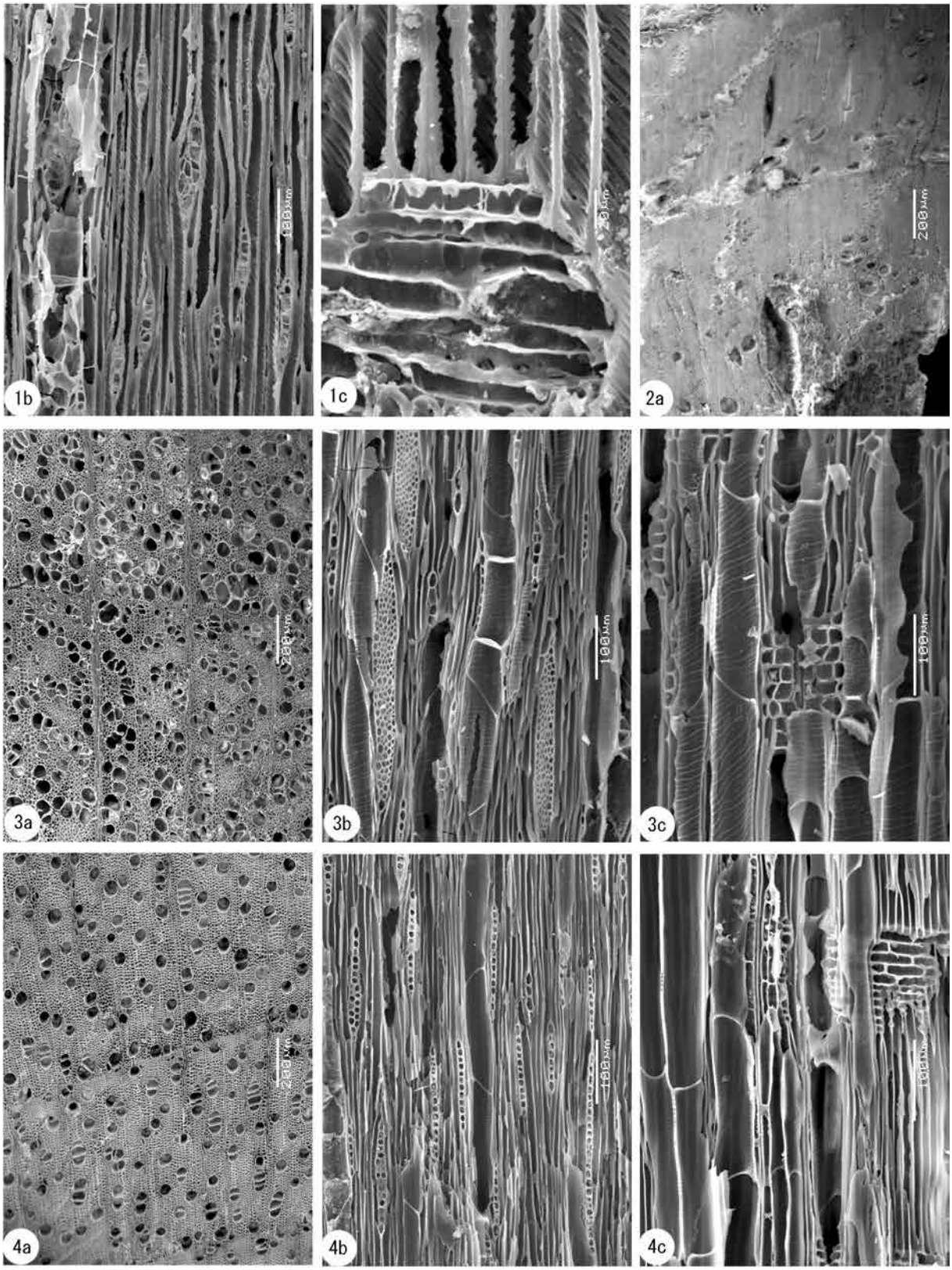
a：横断面　b：接線断面　c：放射断面



図版２　上野遺跡（第２次）7a 区出土柱材の材組織写真

1a-1c：マツ属複維管束亜属（7a 区番号 8）　2a-2c：クリ（7a 区番号 4）　3a-3c：樹皮（7a 区番号 6）

a：横断面　b：接線断面　c：放射断面　　bar：a=1.0mm，b=0.4mm，1c=0.1mm，2c・3c=0.2mm.



図版３　上野遺跡（第２次）7a 区出土炭化材の材組織写真

1b･1c：マツ属複維管束亜属（7a 区番号 2-4）　2a：クリ（7a 区番号 2-2）

3a-3c：サクラ属（7a 区番号 2-1）　4a-4c：カエデ属（7a 区番号 2-4）

a：横断面　b：接線断面　c：放射断面

Ⅶ　まとめと考察

今回の発掘調査は、山形県の農地環境整備事業（上野地区）に伴う、緊急発掘調査である。発掘調査は、農道造成地600㎡（７区）と観光果樹園造成地1,900㎡（８・９区）の２区画、合せて2,500㎡を対象として実施された。調査に当たっては、７区が幅約６ｍ・長さ約80ｍという細長い形状をしていることや、８・９区が圃場整備の際に削平されている可能性が高いこと等、調査を難しくする要因が多かった。しかしながら、大局的には遺構の分布に粗密が認められ、地区毎に検出遺構および出土遺物の性格の違いがあることを看取することができた。これらのことをつなぎ合わせることによって、わずかではあるが上野遺跡の様相について考えていきたいと思う。

地区毎に検出遺構の性格に違い

今回の調査で検出された遺構は、掘立柱建物跡・河跡・溝跡・土坑・柱穴等である。前述の通り、地区毎に検出遺構の性格に違いがあり、７区では中・近世の掘立柱建物跡等が中心であるのに対し、８・９区では縄文時代から弥生・古墳時代にかけての河跡・溝跡等の自然遺構が中心である。調査区境界壁の土層断面から、８・９区が圃場整備の際に削平を受けたことが看取されるが、このことが影響している可能性がある。８区の北西部と９区の南東部は、ほとんど遺構が検出されておらず、削平の影響が最も大きい区域だった可能性がある。なお、７ｂ区からは畝状の撹乱以外は何も検出されていない。

中・近世の遺構

今回の調査区において最も遺構の検出密度が高いのは、７ａ区（特に中央から東部にかけて）であり、合計約150基の柱穴を検出している。これらは、すべて中・近世の遺構と考えられる。掘立柱建物跡と思われる組み合わせは４棟確認され、調査区の西側・中央・東側にそれぞれ分布するが、いずれも調査区の境界壁によって切られるため、規模は明確にならない。いずれの掘り方内からも遺物は出土していないが、遺存していた柱材や炭化物の年代測定結果から、７ａ区中央のＳＢ682が13世紀末から14世紀末にかけて構築されたものであることが明らかになっている。また、７ａ区中央のＳＢ681は、主軸を含めた構造・柱穴の深さ・覆土の様相すべてにおいて隣接するＳＢ682と酷似していることから、同時代に構築されたものであると推測できる。７ａ区西部のＳＢ680については、資料に恵まれないため、構築年代を推定することが困難である。しかし７ａ区東部のＳＢ683については、隣接する柱穴から検出された柱材・炭化物を年代測定した結果、13世紀後半から14世紀末に構築されたと推定されるもの（ＳＰ647・665）と、15世紀半ばから17世紀前半にかけて構築されたと推定されるもの（ＳＰ606・616）の２組に分類できることから、上記のいずれかの時期に該当する可能性が高いと思われる。

13世紀末から14世紀末

第１次調査

昨年度実施された第１次調査では、検出された掘立柱建物跡群を検出地点毎にＡ～Ｄの４群に分類し、それらの建物跡群の構築年代を、出土遺物や検出資料の年代測定結果を基に推定している。それによれば、第１次調査区の最南端に位置するＡ群の構築年代がⅠ期〔12世紀中頃から14世紀初頭〕、それより北のＢ・Ｃ・Ｄ群の構築年代がⅡ期〔15世紀代〕～Ⅲ期〔16世紀から17世紀初頭〕と推定され、集落が時間を経る毎に少しずつ標高の高い北方向に広がってきたことを示唆している（菅原ほか2006）。今回の調査では、第１次調査におけるＤ建物跡群とおおよそ同じ標高の地点から、掘立柱建物跡が検出されたことになる。新たな検出例を得たことにより、

上野集落の時間的・空間的な広がりが、より鮮明になったと言える。

縄文時代の遺構

中・近世に続いて注目されるのは、縄文時代の遺構である。７区西部では、縄文時代中期中葉の土器片・土製品・石器等を伴う性格不明遺構や土坑・柱穴が検出されている。特に、ＳＸ630からは、大木８ａおよび８ｂ式土器片や西ノ前タイプ土偶の右脚部がまとまって出土している。第１次調査の際にも隣接する区域から縄文時代中期の土器片を伴う土坑が検出されていることから、この区域が当時キャンプサイト等として利用されていたと考えられる。縄文土器片は、７ａ区のＳＤ567以西の全域において散見されるため、縄文時代の集落またはキャンプサイト等が第２次調査区からはみ出し、さらに北北東方向に広がっていくことが予想される。なお、８・９区からも縄文時代の土坑・河跡等の自然遺構が検出されているが、覆土底部から検出された炭化物の年代測定結果から縄文時代早期に該当することが明らかとなっており、７区における縄文時代の遺構とは直接的な関連は見出せなかった。

縄文時代中期中葉

西ノ前タイプ土偶

ここで、今回出土した西ノ前タイプ土偶について若干触れておきたい。これまで山形県における西ノ前タイプ土偶の分布の中心は、内陸地方の最上川中流域北部とその支流域とされ、中期大木式土器文化圏との関係が強調されてきた。一方、北陸系土器群の流入が目立つ庄内地方と置賜地方南西部は、いわゆるバンザイ土偶が一定程度混在する在り方が特徴となるという（阿部1998）。今回の調査では、西ノ前タイプ土偶が中期大木式土器と共伴して出土しているものの、右脚部一片のみの出土であり、出土個体数が少なすぎるために有効な資料とはなりえない。だが、置賜地方において北陸系土器の影響を強く受ける領域とそうでない領域の境界は、どこかといった問題を考察する際の参考にはなるであろう。

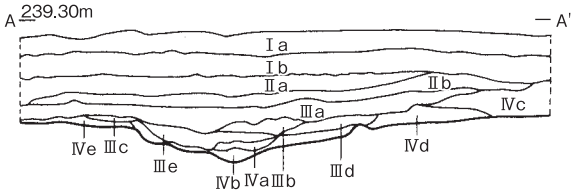
中期大木式土器文化圏

今回の調査では以上の他に、９区で弥生時代の土坑・溝跡、古墳時代の杭跡等が検出されている。また、出土遺物のうち遺構から出土したものは極わずかで、先に触れた７ａ区ＳＸ630出土の縄文土器片・土製品・石器の他、縄文土器片数点、古墳時代の杭材１点、中・近世の柱材数点および根固め石１点に限られる。前にも述べたが、特に８・９区の表土除去の際に、農業用水路の堆積土中から古代から近世にかけての須恵器および陶磁器の破片が多く検出されていることから、圃場整備の際に地山面が削平されたことが推測される。遺構から出土していないため、遺構の時代特定の際の有効な資料とはなりえないが、８・９区にも元々各時代の生活の痕跡が残されていたことを暗示していると思われる。今回の調査の結果として、８・９区においては圃場整備等の削平により、有効な資料が得られなかったが、７区における遺構・遺物の検出状況から、上野集落が鎌倉時代から江戸時代初期に至るまで継続的に営まれ、今日の集落につながっていく様相をわずかながら明らかにすることができた。残された不明点の解明は、今後の発掘調査に託す。

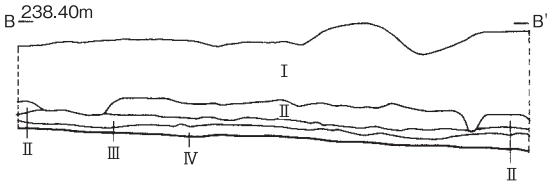
参考・引用文献

阿部明彦　1998　「中期大木式期の様相－西ノ前タイプ土偶の出現と展開－」『土偶研究の地平』（「土偶とその情報」研究論集（２））勉誠社

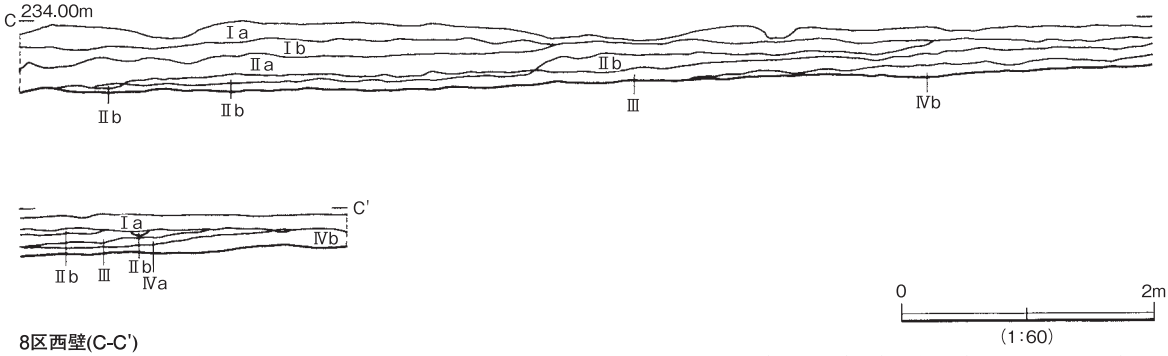
菅原哲文ほか　2006　『上野遺跡発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財センター調査報告書第152集）財団法人山形県埋蔵文化財センター



7a区北壁(A-A')
Ⅰa 10YR3/3 暗褐色シルト　しまり中程度、粘性やや弱い、炭化物(径5㎜)を少量含む（表土）
Ⅰb 10YR3/3 暗褐色シルト　しまり中程度、粘性やや弱い、にぶい黄褐色礫(径5㎜)を微量含む（表土）
Ⅱa 10YR3/2 黒褐色砂質シルト　しまり強い、にぶい黄褐色礫(径5～10㎜)を少量含む
Ⅱb 10YR3/2 黒褐色シルト混じり砂　黒色シルトブロックを微量、にぶい黄褐色礫(径5～10㎜)を少量含む
Ⅲa 10YR2/3 黒褐色砂混じりシルト　しまり強い、黒色シルトブロック・にぶい黄橙色礫(径5～10㎜)を含む
Ⅲb 10YR4/2 灰黄褐色砂　しまり弱い、黒褐色シルトブロック(径5～10㎜)・にぶい黄橙色風化礫(径5㎜)を少量含む
Ⅲc 10YR2/2 黒褐色シルト　しまり強い、にぶい黄橙色礫(径5㎜)・にぶい黄褐色砂ブロックを微量含む
Ⅲd 10YR4/3 にぶい黄褐色砂　しまり弱い
Ⅲe 10YR2/2 黒褐色シルト　しまり強い、黒色シルトブロックを含む、にぶい黄橙色礫(径5～10㎜)を少量含む
Ⅳa 10YR5/3 にぶい黄褐色砂　しまり弱い、炭化物を微量含む
Ⅳb 10YR2/3 黒褐色砂まじりシルト　しまり非常に強い、にぶい黄橙色礫(径5㎜)を含む、炭化物を少量含む
Ⅳc 10YR5/4 にぶい黄褐色砂　しまり弱い、下層は粗砂になる（地山）
Ⅳd 10YR4/3 にぶい黄褐色砂混じり礫　しまり強い、径10～40㎜の礫層（地山）
Ⅳe 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂　しまり強い、黒褐色シルトを少量含む（地山）

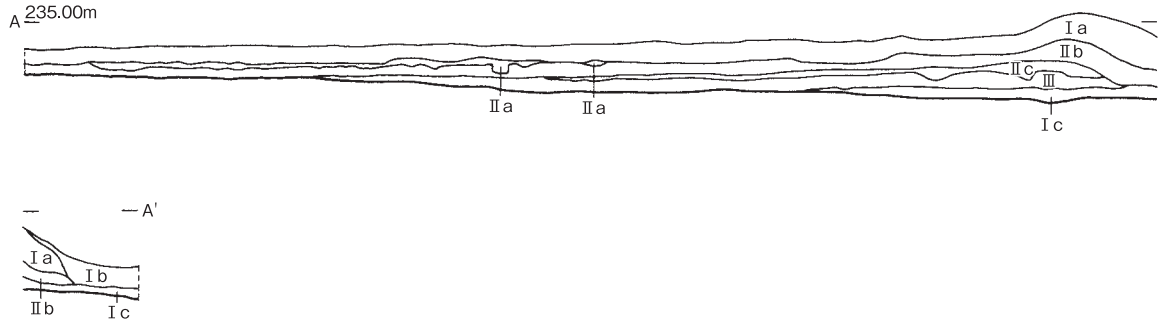


7c区東壁(B-B')
Ⅰ 10YR3/3 暗褐色シルト　しまりやや弱い、植物根による撹乱（果樹園耕作土）
Ⅱ 7.5YR3/3 黒褐色シルト　しまり強い、炭化物・褐色礫(径10㎜)を微量に含む
Ⅲ 7.5YR3/4 明褐色砂混じりシルト　しまり強い、地山層由来の黄褐色礫を含む（遺構検出面）
Ⅳ 7.5YR4/4 褐色礫混じりシルト　しまり強い、酸化鉄を含む、下層は礫片となる



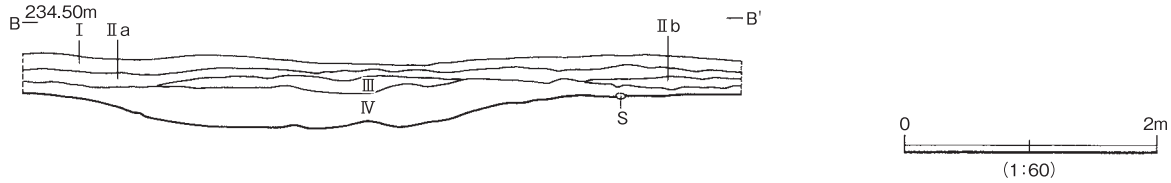
8区西壁(C-C')
Ⅰa 10YR4/2 灰黄褐色砂混じりシルト　しまり強い、植物根・酸化鉄を少量、風化礫粒(径1～5㎜)を多く含む（水田耕作土・表土）
Ⅰb 10YR4/2 灰黄褐色砂混じりシルト　しまり強い、植物根・酸化鉄を少量、風化礫粒(径1～100㎜)を多く含む
Ⅱa 10YR4/2 灰黄褐色砂混じりシルト　しまり強い、酸化鉄・黒色シルトブロックを少量、風化礫・風化礫粒を多く含む
Ⅱb 10YR4/2 灰黄褐色砂　しまり強い、粘性弱い、酸化鉄を少量含む
Ⅲ　10YR2/1 黒色粘土質シルト　しまり強い、粘性強い、酸化鉄を少量含む（遺構検出面）
Ⅳa 10YR4/2 灰黄褐色粗砂　しまり強い、粘性弱い、黒色粘土質シルトを微量、風化礫を多く含む
Ⅳb 10YR5/4 にぶい黄褐砂　しまり弱い、風化礫(径10～100㎜)を多量に含む

第８図　基本層序（１）



9区東壁北側(A-A')

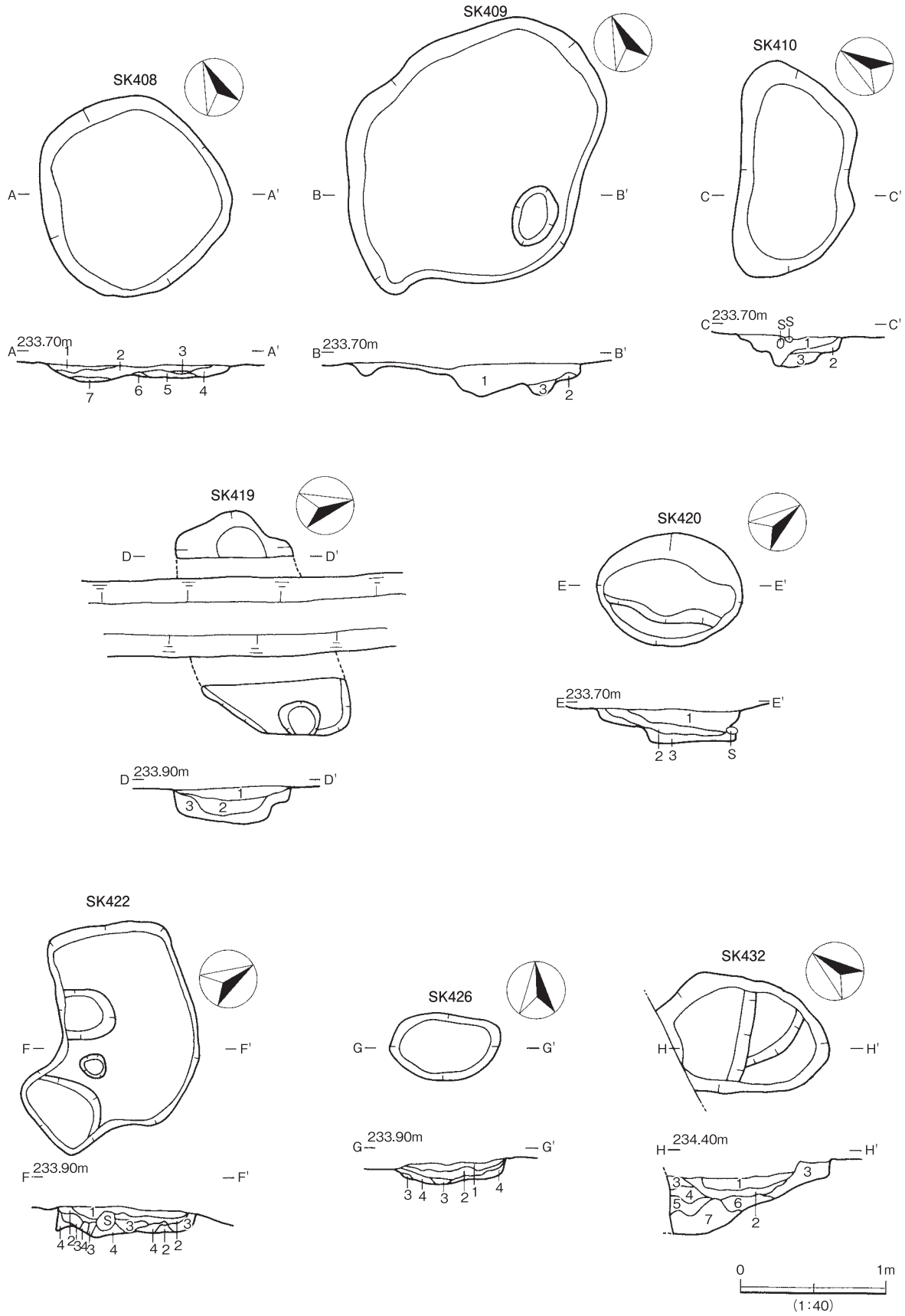
Ⅰa 10YR4/2 灰黄褐色シルト　しまり強い、植物根を多く含む、酸化鉄を微量含む（表土）
Ⅰb 10YR3/2 黒褐色シルト　しまり強い、粘性の強い灰黄褐色シルトブロックをまばらに含む、風化礫(径2㎜)・植物根を少量含む
Ⅱa 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト　しまりやや強い、風化礫粒(径3㎜)をやや多く含む
Ⅱb 10YR4/3 にぶい黄褐色砂混じりシルト　しまり強い、粘性強い、風化礫粒(径2㎜)・酸化鉄を多く含む、風化礫(径10㎜)・炭化物を少量含む
Ⅱc 10YR3/2 黒褐色砂混じりシルト　しまり強い、粘性強い、風化礫粒(径3㎜)を多く含む、風化礫(径30～100㎜)・炭化物を少量含む
Ⅲ　10YR4/3 にぶい黄褐色砂混じりシルト　しまり強い、粘性強い、酸化鉄を多く含む、風化礫(径30㎜)を少量含む
Ⅰc 10YR4/2 灰黄褐色シルト　しまり強い、植物根を多く含む、酸化鉄を微量含む（表土２）



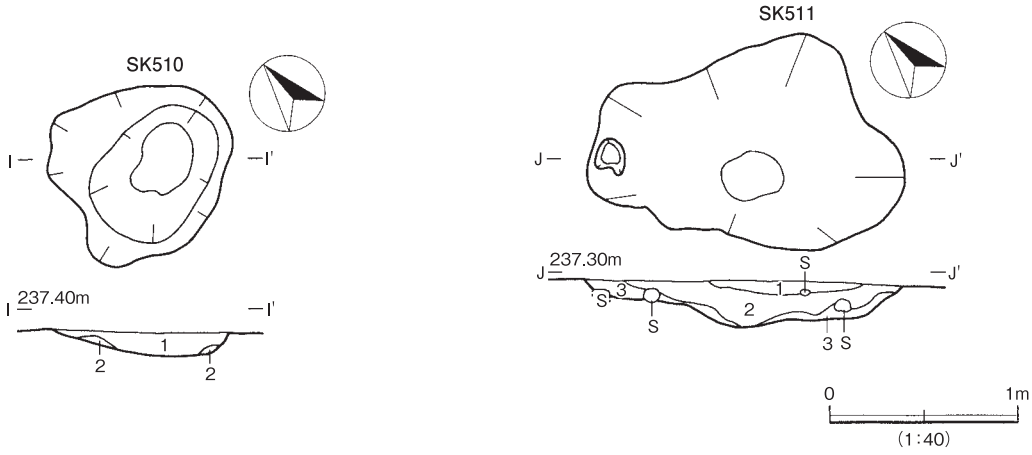
9区東壁南側(B-B')

Ⅰ　10YR4/2 灰黄褐色シルト　しまり強い、植物根・酸化鉄・風化礫粒(径1～3㎜)を含む（表土）
Ⅱa 10YR4/2 灰黄褐色シルト　しまり強い、植物根・酸化鉄・風化礫粒(径1～3㎜)を含む、風化礫(径30～50㎜)を微量含む（表土）
Ⅱb 10YR4/2 灰黄褐色シルト　しまり強い、植物根・酸化鉄・風化礫粒(径1～3㎜)を含む（表土）
Ⅲ　10YR5/4 にぶい黄褐色シルト　しまり強い、粘性やや強い、酸化鉄を多く含む、風化礫(径10～50㎜)を少量含む(表土と岩盤の緩衝層)
Ⅳ　10YR6/4 にぶい黄褐色砂質シルト　しまり強い、粘性弱い、風化礫(径5～150㎜)を多量に含む、酸化鉄を微量含む（岩盤）

第９図　基本層序（２）



第10図　縄文時代の遺構（土杭１）



SK408(A-A')
1 10YR3/1 黒褐色シルト　しまり強い、酸化鉄を含む、白色風化礫を少量含む
2 10YR1.7/1 黒色シルト　しまり強い、酸化鉄を含む、白色風化礫を少量
3 10YR3/1 黒褐色砂質シルト　しまり強い、粘性弱い、白色風化礫・酸化鉄を含む
4 10YR2/1 黒色シルト　しまり強い、白色風化礫を多く含む、酸化鉄を含む
5 10YR2/1 黒色シルト　しまり強い、白色風化礫・酸化鉄を含む
6 10YR2/1 黒色シルト　しまり強い、粘性弱い、白色風化礫・酸化鉄を含む
7 10YR3/1 黒褐色シルト　しまり強い、白色風化礫の細粒を微量含む

SK409(B-B')
1 10YR2/1 黒色シルト　しまり強い、白色風化礫を多く含む、酸化鉄を含む
2 10YR4/1 褐灰色シルト　しまり強い、粘性弱い、酸化鉄を含む
3 10YR3/1 黒褐色シルト　しまり強い（地山）

SK410(C-C')
1 10YR2/1 黒色シルト　しまり強い、白色風化礫を多く含む、酸化鉄を含む
2 10YR2/1 黒色シルト　しまり強い、白色風化礫・炭化物を少量含む
3 10YR2/1 黒色シルト　しまり強い、白色風化礫・炭化物を微量含む

SK419(D-D')
1 10YR3/2 黒褐色シルト　しまり非常に強い、酸化鉄・風化礫粒(径1㎜)を少量含む、植物根の撹乱が少し入る
2 10YR3/2 黒褐色シルト　しまり非常に強い、風化礫粒(径1～10㎜)をやや多く含む、酸化鉄を少量含む
3 10YR4/2 灰黄褐色シルト　しまり強い、風化礫粒(径10㎜)・酸化鉄を少量含む

SK420(E-E')
1 10YR1.7/1 黒色砂混じりシルト　しまり強い、風化礫(径20～50㎜)を多量に含む、褐灰色シルトブロックを少量含む
2 10YR3/1 黒褐色砂混じりシルト　しまり強い、風化礫粒(径1～3㎜)を多く含む
3 10YR5/2 灰黄褐色シルト　しまり強い、粘性やや強い

SK422(F-F')
1 10YR4/1 褐灰色シルト　しまり非常に強い、風化礫粒(径1～30㎜)を多く含む、黒色シルトが少量混じる
2 10YR4/1 褐灰色シルト　しまり非常に強い、風化礫粒(径1～100㎜)を多く含む
3 10YR4/1 褐灰色シルト　しまり強い、黒色粘質シルトが少量混じる
4 10YR1.7/1 黒色粘質シルト　しまり、粘性やや強い

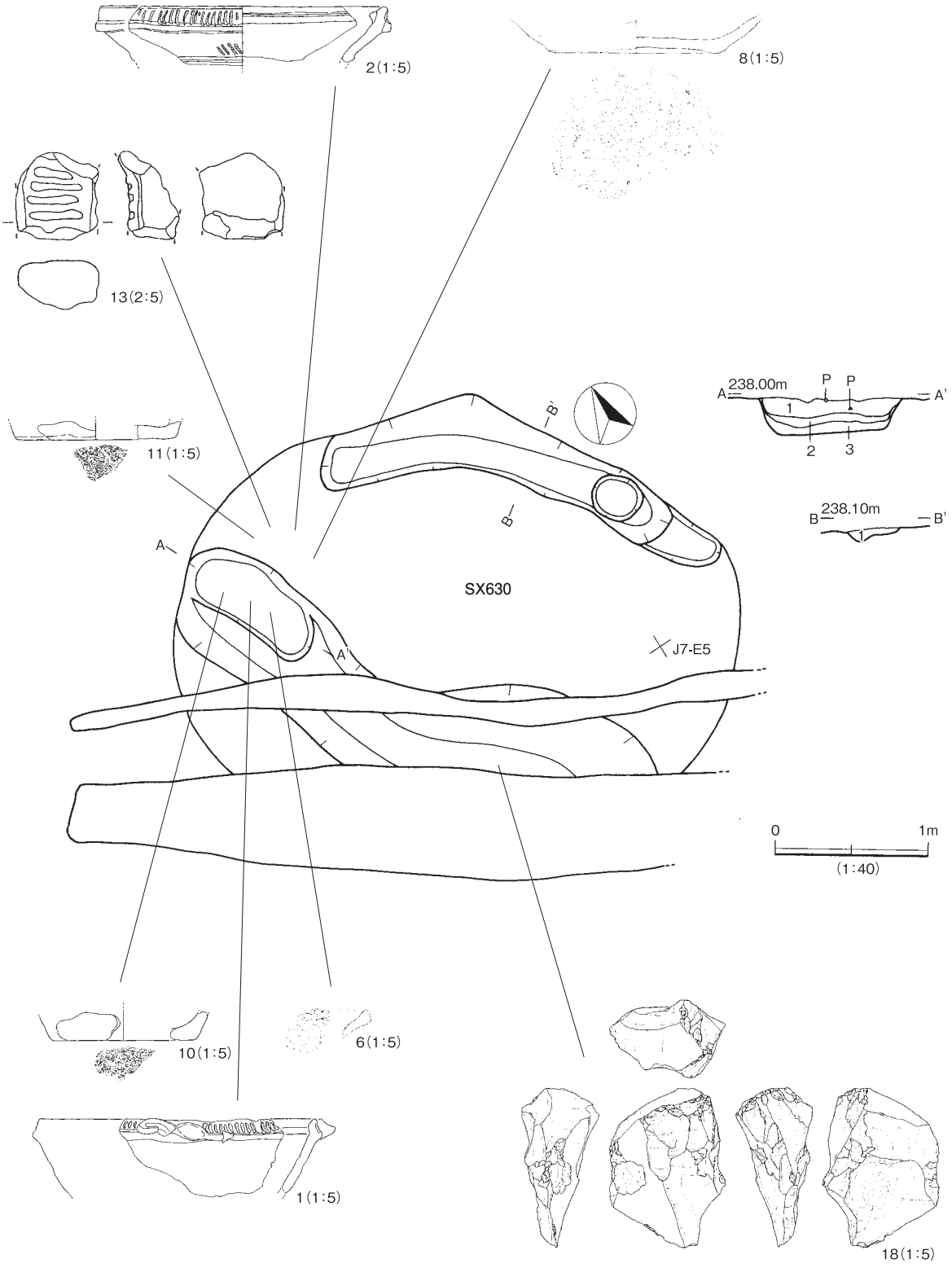
SK426(G-G')
1 10YR4/3 にぶい黄褐色砂混じりシルト　しまり強い、風化礫(径5～10㎜)をやや多く含む、酸化鉄を微量含む
2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂混じりシルト　しまり強い、風化礫(径5～10㎜)をやや多く、酸化鉄を微量含む
3 10YR4/2 灰黄褐色砂混じりシルト　しまり強い、粘性やや弱い、風化礫粒(径1～5㎜)を少量含む
4 10YR5/6 黄褐色砂混じりシルト　しまり強い、粘性やや弱い、風化礫粒(径1㎜)を少量含む

SK432(H-H')
1 10YR3/1 黒褐色シルト　しまり強い、風化礫(径3～70㎜)をやや多く含む、酸化鉄を含む
2 10YR3/1 黒褐色シルト　しまり強い、風化礫(径1～30㎜)をやや多く含む、酸化鉄を少量含む
3 10YR3/1 黒褐色シルト　しまり強い、酸化鉄を含む、風化礫(径1～3㎜)を微量含む
4 10YR4/1 褐灰色シルト　しまり強い、粘性強い、上層に風化礫(径1～10㎜)を含む、酸化鉄を少量含む
5 10YR4/1 褐灰色シルト　しまり強い、粘性強い
6 10YR4/2 灰黄褐色シルト　しまり強い、粘性強い、地山層に似る
7 10YR4/2 灰黄褐色シルト　しまり強い、粘性やや強い

SK510(I-I')
1 7.5YR4/2 灰褐色砂質シルト　しまり強い、粘性やや弱い、炭化物(径5～10㎜)・礫(径10～30㎜)を少量含む
2 7.5YR5/4 にぶい褐色砂質シルト　しまり強い、粘性やや弱い、礫粒(径10～30㎜)を含む

SK511(J-J')
1 7.5YR3/3 暗褐色シルト　礫(径10～40㎜)を含む
2 7.5YR2/2 黒褐色シルト　しまり強い、炭化物(径5～10㎜)・風化礫粒(径10～30㎜)を微量含む
3 7.5YR3/3 暗褐色シルト　しまり強い、礫(径10～30㎜)を微量含む

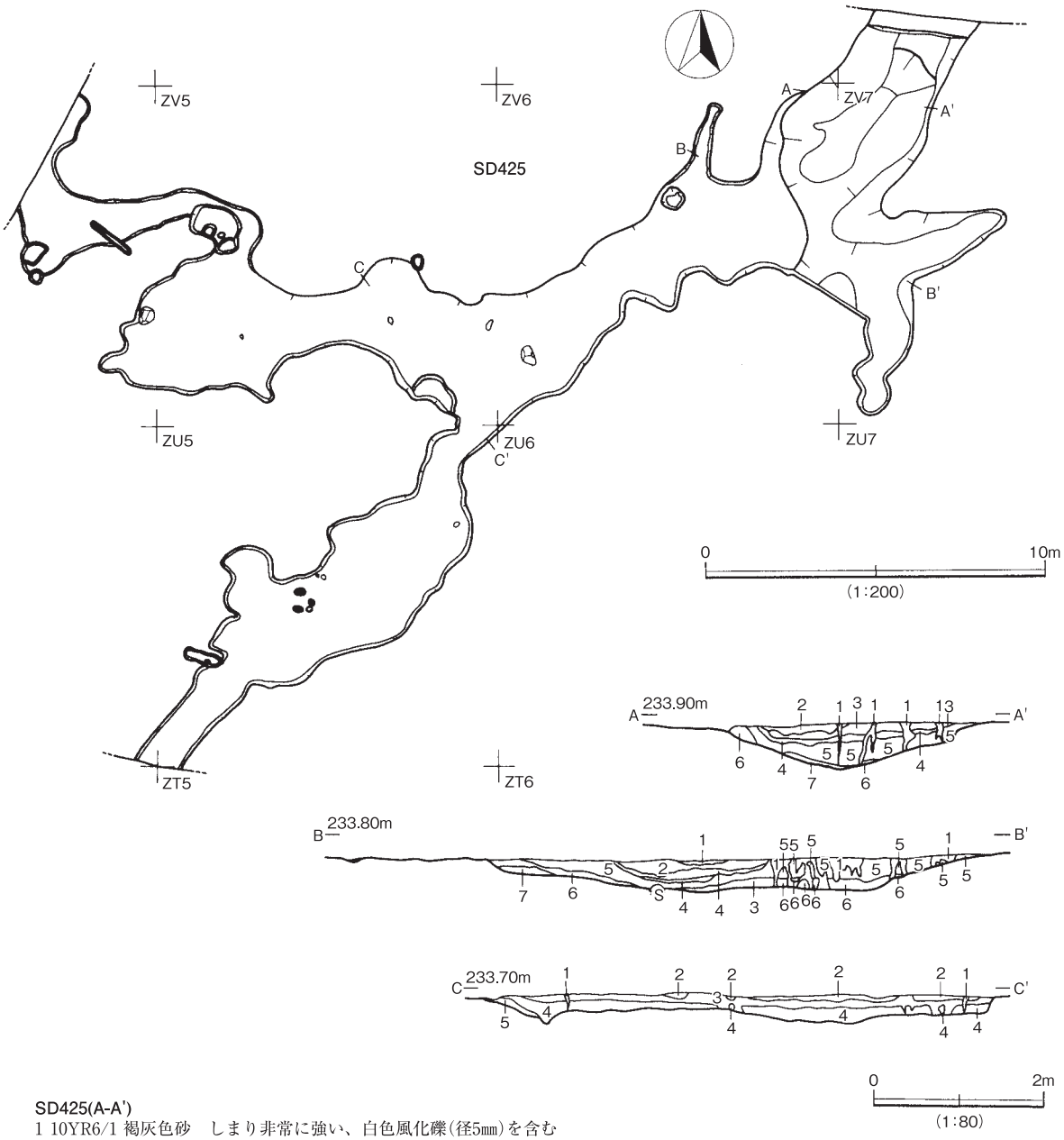
第11図　縄文時代の遺構（土杭２）



SX630(A-A')
1 10YR2/3 黒褐色シルト　しまり強い、黄褐色風化礫(径5～10㎜)を少量含む、炭化物を微量含む
2 10YR3/3 暗褐色シルト　しまり強い、にぶい黄橙色礫(径10～20㎜)・炭化物を微量含む
3 7.5YR3/4 暗褐色シルト　しまり強い、粘性やや強い

SX630(B-B')
1 7.5YR2/2 黒褐色シルト　しまり強い、褐色シルトブロック・にぶい黄橙色礫(径10～20㎜)を少量、炭化物を微量含む

第12図　縄文時代の遺構(性格不明遺構)

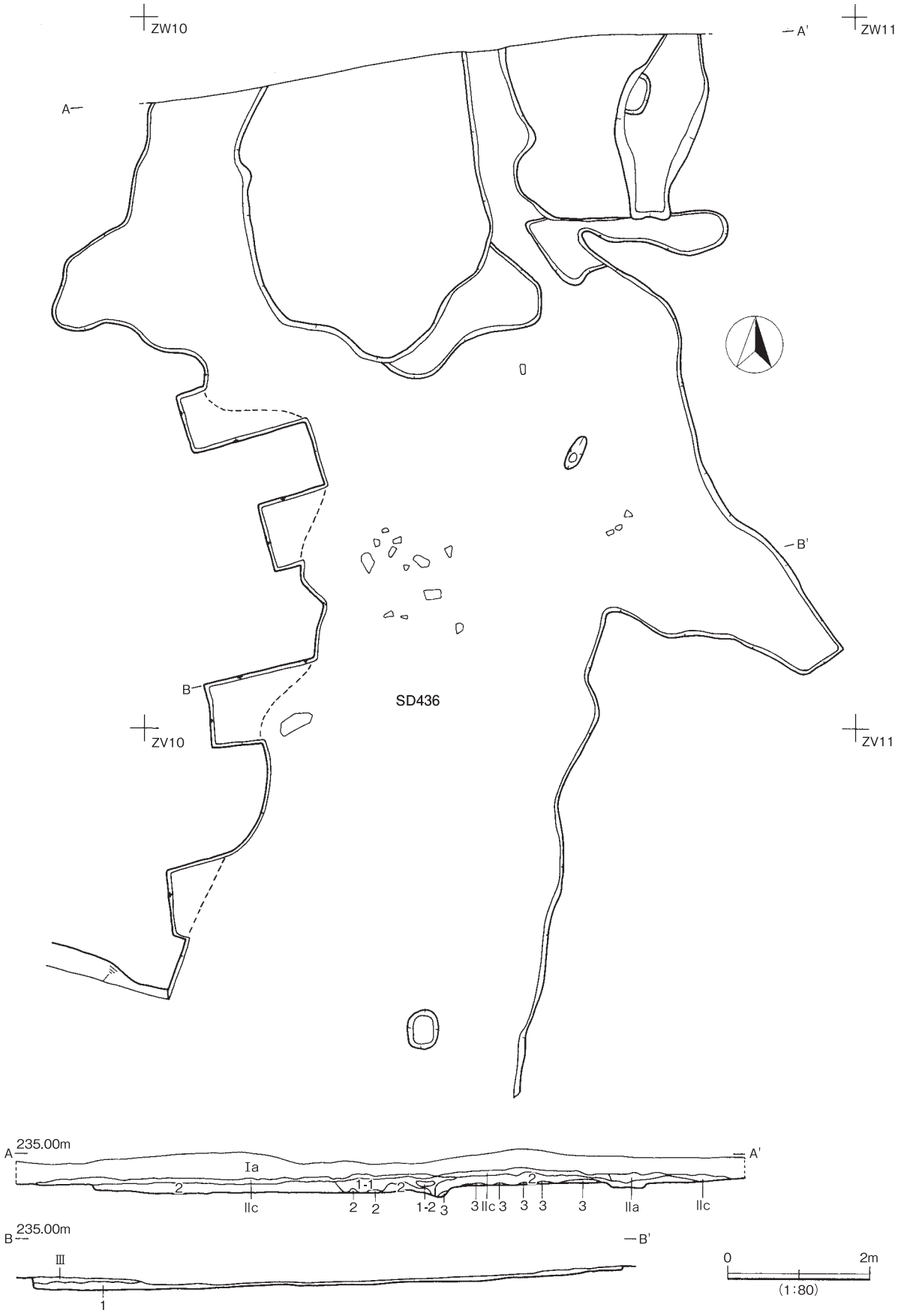


SD425(A-A')
1 10YR6/1 褐灰色砂　しまり非常に強い、白色風化礫(径5㎜)を含む
2 10YR5/1 褐灰色砂　しまり非常に強い、白色風化礫(径5～50㎜)を含む（開田の際の錯乱か）
3 10YR2/1 黒色シルト　しまり非常に強い、酸化鉄を含む、褐灰色シルトを少量含む
4 10YR3/1 黒褐色シルト　しまり非常に強い、粘性弱い、砂を多く含む、白色風化礫(径5～50㎜)を少量含む
5 10YR2/1 黒色シルト　しまり強い、酸化鉄・炭化物（下層に）を少量含む
6 10YR3/1 黒褐色シルト　しまり非常に強い、粘性やや弱い、白色風化礫を少量含む
7 10YR3/2 黒褐色シルト混じり砂　しまり強い、粘性弱い、黒色シルトブロック・酸化鉄を含む

SD425(B-B')
1 10YR4/1 褐灰色砂混じりシルト　しまり強い、粘性やや強い、風化礫粒(径1～3㎜)・酸化鉄を多く含む
2 10YR2/1 黒色粘質シルト　しまり強い、粘性やや強い、酸化鉄をやや多く含む、風化礫粒(径1㎜)を少量含む
3 10YR4/1 褐灰色粗砂　しまり強い風化礫(径30～150㎜)・風化礫粒(径1～3㎜)を多く含む
4 10YR4/1 褐灰色砂　しまり強い、粘性やや弱い、風化礫粒(径1～3㎜)を多く含む
5 10YR2/1 黒色粘質シルト　しまり強い、粘性やや強い、風化礫粒(径1㎜)・酸化鉄を少量含む
6 10YR4/1 褐灰色砂混じりシルト　しまり強い、粘性やや強い
7 10YR5/1 褐灰色砂混じりシルト　しまり強い、風化礫(径10～30㎜)を多く含む（岩盤）

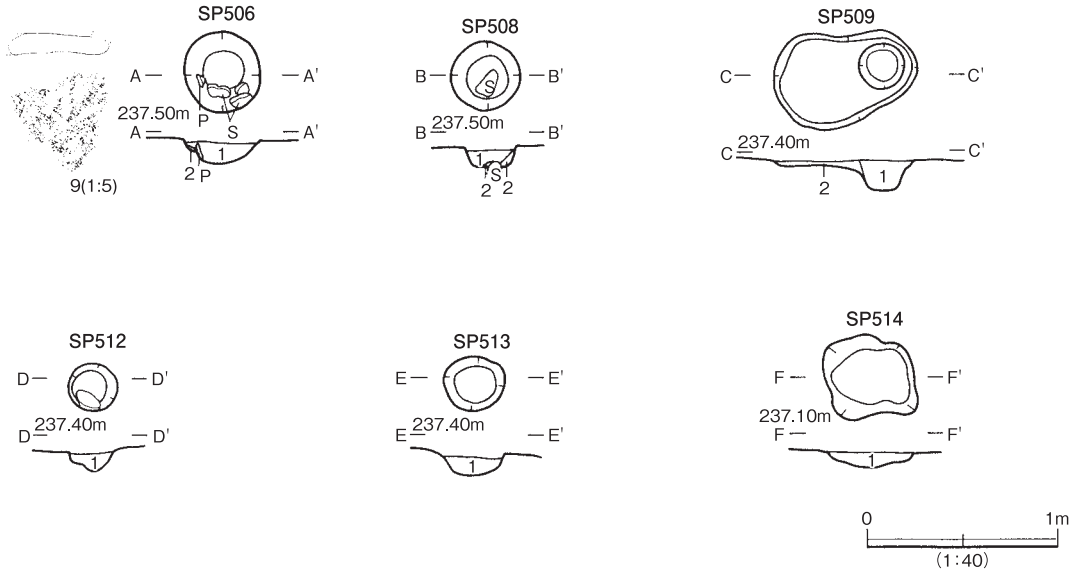
SD425(C-C')
1 10YR4/1 褐灰色シルト　しまり強い、風化礫粒(径1㎜)を含む、酸化鉄を少量含む
2 10YR3/1 黒褐色シルト　しまり強い、粘性やや強い、風化礫粒(径1㎜)を含む、酸化鉄を少量含む
3 10YR4/1 褐灰色シルト　しまり強い、風化礫粒(径1㎜)を含む、酸化鉄を少量含む
4 10YR2/1 黒色シルト　しまり強い、粘性やや強い、酸化鉄を少量含む
5 10YR3/1 黒褐色シルト　しまり強い、粘性やや強い、風化礫粒(径1～5㎜)を少量、酸化鉄を微量含む

第13図　縄文時代の遺構(河跡１)



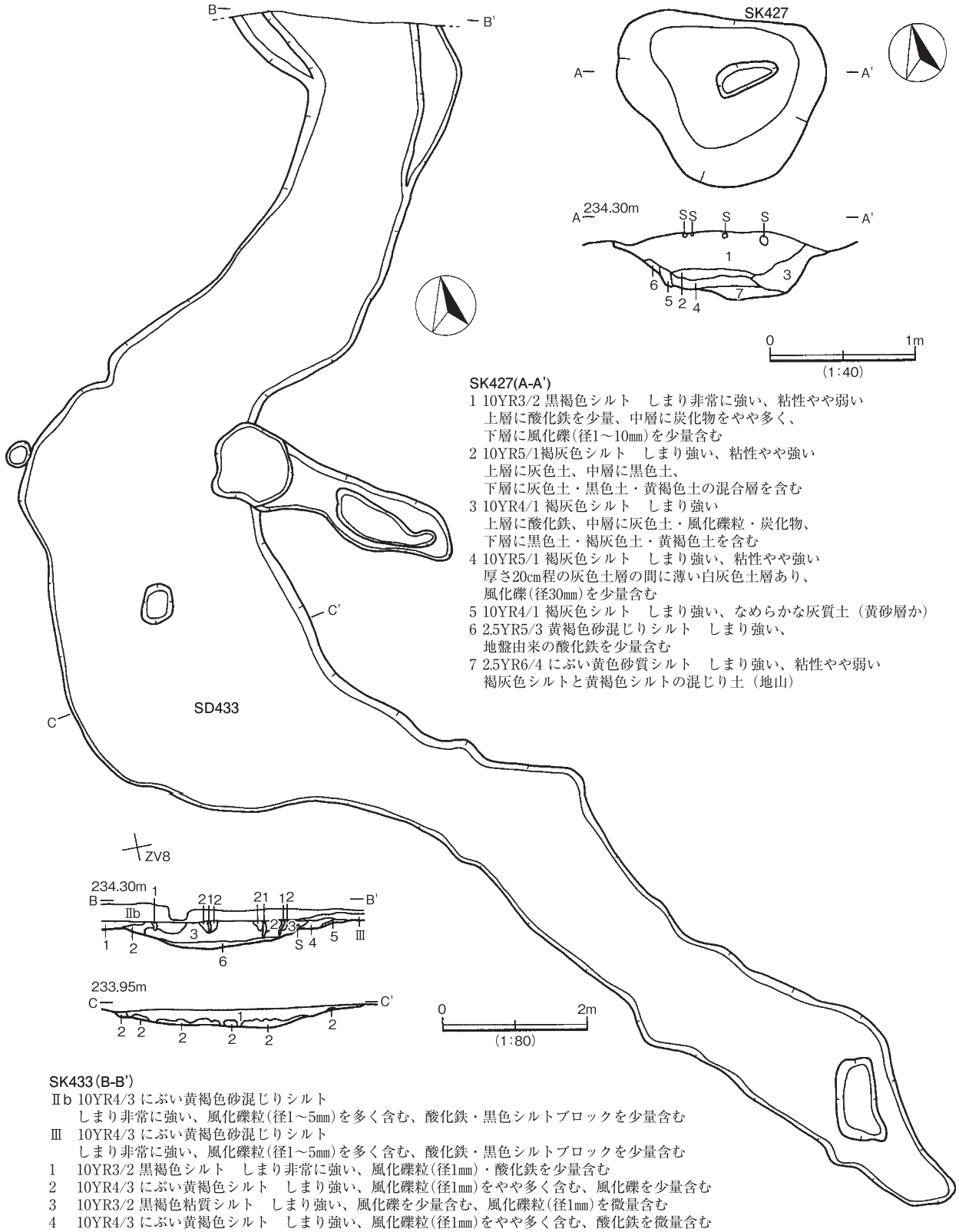
第14図　縄文時代の遺構（河跡 2）

SD436(A-A')
Ⅰa 10YR4/2 灰黄褐色砂混じりシルト　しまりやや強い、風化礫粒(径3～5㎜)をやや多く含む、植物根・酸化鉄を少量含む（畦畔盛土）
Ⅱa 10YR4/2 灰黄褐色砂混じりシルト　しまり弱い（取水口盛土）
Ⅱc 10YR3/2 黒褐色砂混じりシルト　しまり強い、風化礫粒(径1～3㎜)をやや多く含む、酸化鉄を含む
1-1 10YR4/2 灰黄褐色砂混じりシルト　しまり非常に強い、粘性やや強い
1-2 10YR5/2 灰黄褐色粗砂　しまり非常に強い、粘性弱い
2　10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト　しまり強い、粘性やや強い、酸化鉄を上層に多く含む、風化礫粒(径1～3㎜)を少量含む（河跡盤層）
3　10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト　しまり非常に強い、粘性やや強い、酸化鉄を微量含む
SD436(B-B')
Ⅲ 10YR6/4 にぶい黄橙色砂質シルト　しまり強い、粘性やや弱い
1　10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト　しまり弱い、粘性やや強い、酸化鉄を上層に多く含む、風化礫粒(径1～3㎜)を少量含む



SD506(A-A')
1 10YR3/3 暗褐色シルト　しまり強い、粘性やや強い、黄褐色風化礫を含む（縄文土器片検出）
2 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト　しまり強い、粘性やや強い、黄褐色風化礫を少量含む
SD508(B-B')
1 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト　しまり強い、黄褐色風化礫を極少量含む
2 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト　しまり強い、粘性やや強い、黄褐色風化礫を少量含む
SD509(C-C')
1 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト　しまり強い、黄褐色風化礫を少量含む
2 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト　しまり強い
SD512(D-D')
1 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト　しまり強い下層に黄褐色風化礫粒(径30～50㎜)を多く含む
SD513(E-E')
1 10YR2/2 黒褐色シルト　炭水物を含む、礫(径5～20㎜)を少量含む
SD514(F-F')
1 10YR4/2 灰黄褐砂質シルト　しまり強い、粘性やや弱い、炭化物を少量含む

第15図　縄文時代の遺構(柱穴)

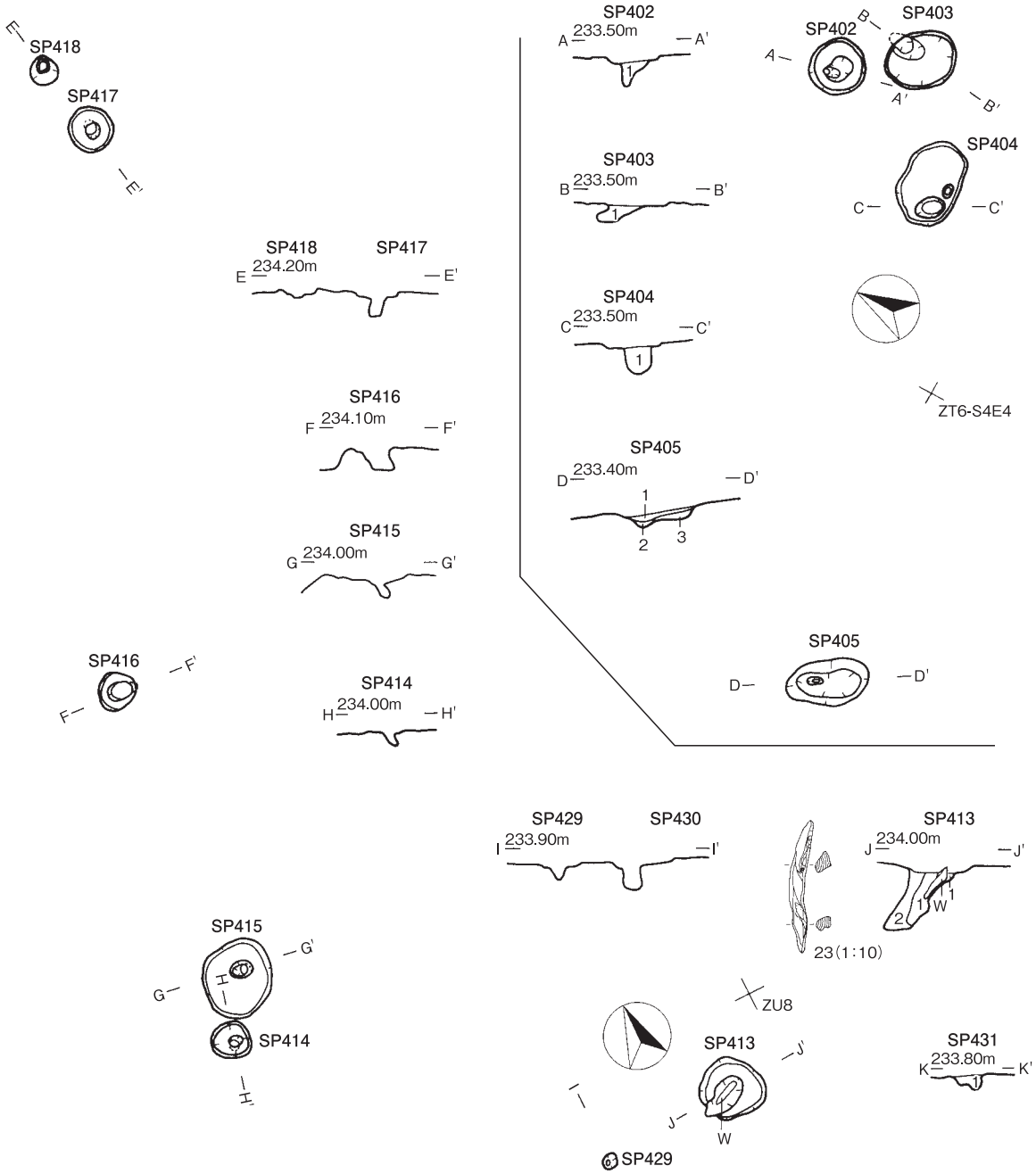


SK427(A-A')
1 10YR3/2 黒褐色シルト　しまり非常に強い、粘性やや弱い
　上層に酸化鉄を少量、中層に炭化物をやや多く、
　下層に風化礫(径1～10㎜)を少量含む
2 10YR5/1褐灰色シルト　しまり強い、粘性やや強い
　上層に灰色土、中層に黒色土、
　下層に灰色土・黒色土・黄褐色土の混合層を含む
3 10YR4/1 褐灰色シルト　しまり強い
　上層に酸化鉄、中層に灰色土・風化礫粒・炭化物、
　下層に黒色土・褐灰色土・黄褐色土を含む
4 10YR5/1 褐灰色シルト　しまり強い、粘性やや強い
　厚さ20㎝程の灰色土層の間に薄い白灰色土層あり、
　風化礫(径30㎜)を少量含む
5 10YR4/1 褐灰色シルト　しまり強い、なめらかな灰質土（黄砂層か）
6 2.5YR5/3 黄褐色砂混じりシルト　しまり強い、
　地盤由来の酸化鉄を少量含む
7 2.5YR6/4 にぶい黄色砂質シルト　しまり強い、粘性やや弱い
　褐灰色シルトと黄褐色シルトの混じり土（地山）

SK433(B-B')
IIb 10YR4/3 にぶい黄褐色砂混じりシルト
　しまり非常に強い、風化礫粒(径1～5㎜)を多く含む、酸化鉄・黒色シルトブロックを少量含む
III　10YR4/3 にぶい黄褐色砂混じりシルト
　しまり非常に強い、風化礫粒(径1～5㎜)を多く含む、酸化鉄・黒色シルトブロックを少量含む
1　10YR3/2 黒褐色シルト　しまり非常に強い、風化礫粒(径1㎜)・酸化鉄を少量含む
2　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト　しまり強い、風化礫粒(径1㎜)をやや多く含む、風化礫を少量含む
3　10YR3/2 黒褐色粘質シルト　しまり強い、風化礫を少量含む、風化礫粒(径1㎜)を微量含む
4　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト　しまり強い、風化礫粒(径1㎜)をやや多く含む、酸化鉄を微量含む
5　10YR4/4 褐色シルト　しまり強い、酸化鉄をやや多く含む、風化礫粒(径1㎜)を微量含む
6　10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂　しまり強い、粘性弱い、酸化鉄を少量含む

SK433(C-C')
1 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト　しまり強い、酸化鉄・風化礫粒(径1㎜)を少量含む
2 10YR6/6 明黄褐色シルト　しまり強い、酸化鉄を多く含む

第16図　弥生時代の遺構(土坑・溝跡)



SP402(A-A')
1 10YR4/2 灰黄褐色シルト　しまり強い、酸化鉄・風化礫粒(径1～30㎜)を含む

SP403(B-B')
1 10YR4/2 灰黄褐色シルト　しまり強い、酸化鉄・風化礫粒(径1～30㎜)を含む

SP404(C-C')
1 10YR4/2 灰黄褐色シルト　しまり強い、酸化鉄・風化礫粒(径1～30㎜)を含む

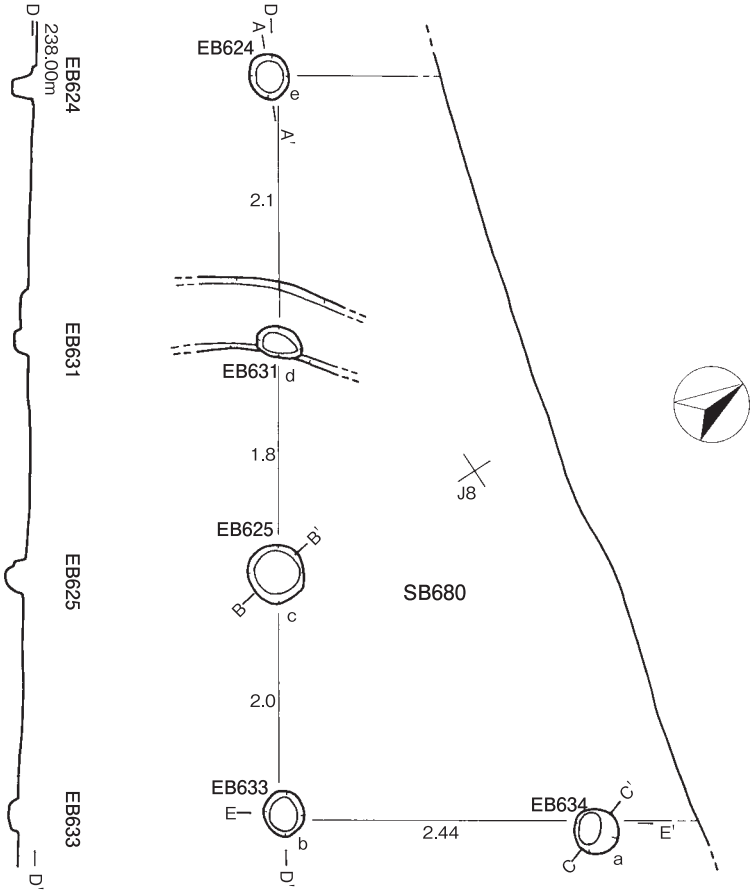
SP405(D-D')
1 10YR2/1 黒色シルト　しまり強い、酸化鉄・炭化物を含む
2 10YR5/2 褐灰色シルト
3 10YR5/2 灰黄褐色シルト　しまり強い

SP413(J-J')
1 10YR2/2 黒褐色粘質シルト　しまり強い、粘性やや強い、酸化鉄を含む
2 10YR4/6 褐色粘質シルト　しまり強い、粘性やや強い、褐灰色シルトを斑点状に含む

SP431(K-K')
1 10YR2/2 黒褐色粘質シルト　しまり強い、粘性やや強い、酸化鉄を含む

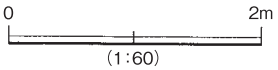
0　1m
(1:40)

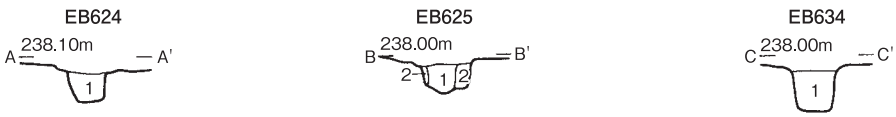
第17図　古墳時代の遺構(杭跡)

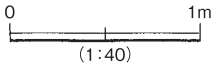


SB680

番号	深さ
a	25
b	9
c	17
d	11
e	18





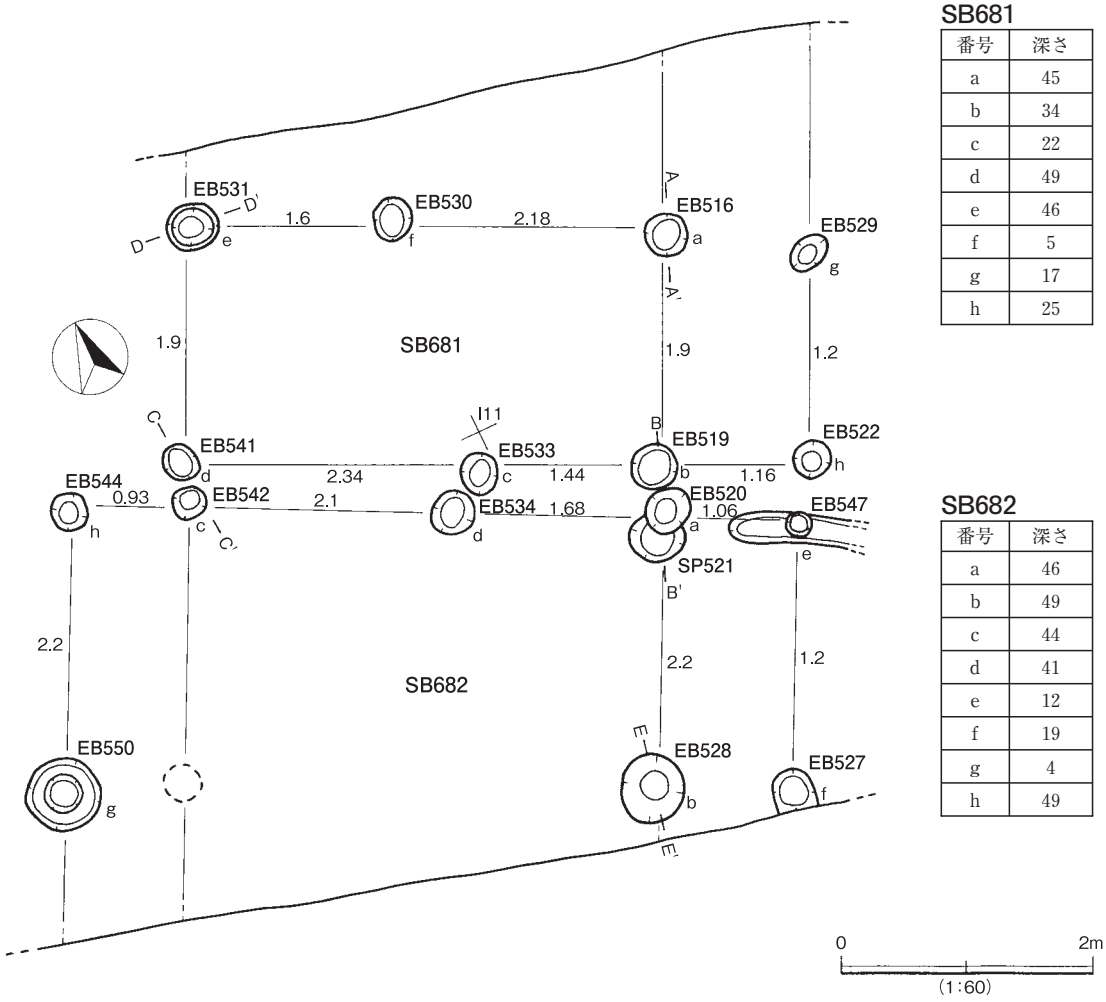


EB624(A-A')
1 10YR2/3 黒褐色シルト　しまり強い、にぶい黄橙色礫(径5㎜)を少量含む、炭化物を微量含む

EB625(B-B')
1 10YR3/2 黒褐色シルト　しまり強い、炭化物・風化礫粒(径1㎜)を少量含む
2 10YR3/2 黒褐色シルト　しまり強い、風化礫粒(径1㎜)を少量含む

EB634(C-C')
1 10YR2/3 黒褐色シルト　しまりやや強い

第18図　中･近世の遺構(掘立柱建物跡１)

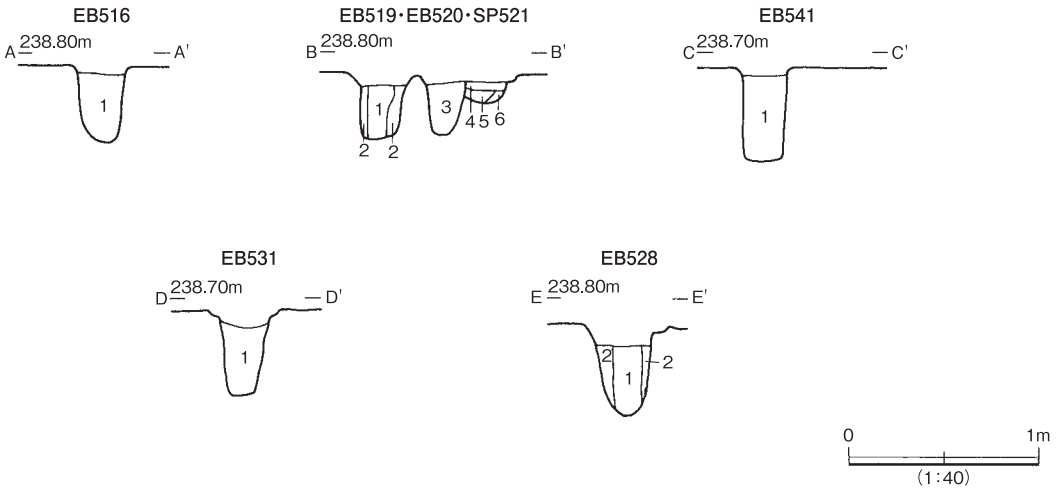


SB681

番号	深さ
a	45
b	34
c	22
d	49
e	46
f	5
g	17
h	25

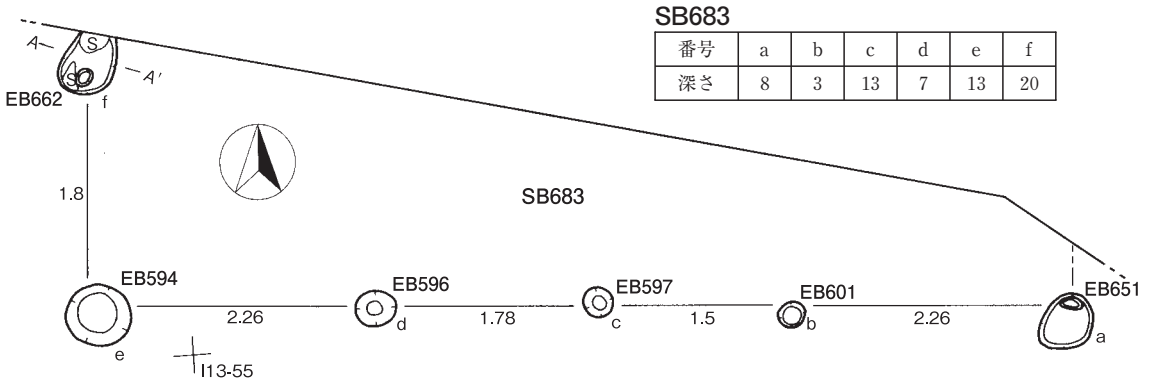
SB682

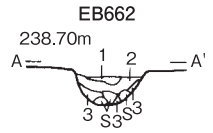
番号	深さ
a	46
b	49
c	44
d	41
e	12
f	19
g	4
h	49



第19図　中・近世の遺構（掘立柱建物跡２）

EB516(A-A')
1 10YR2/3 黒褐砂質シルト　しまり強い、炭化物(径5㎜)・にぶい黄橙色砂質シルトブロック(径10～20㎜)を少量含む
EB519・520、SP521(B-B')
1 10YR2/2 黒褐色シルト　しまり強い、粘性やや弱い、黄褐色風化礫少量含む
2 10YR3/2 黒褐色シルト　しまりやや強い、粘性やや弱い、10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト（地盤層土）を少量含む
3 10YR2/2 黒褐色シルト　しまり強い、粘性やや弱い、黄褐色風化礫・炭化物を少量含む
4 10YR2/2 黒褐色シルト　しまり強い、粘性やや弱い、黄褐色風化礫・炭化物を少量含む
5 10YR2/2 黒褐色シルト　しまり強い、粘性やや弱い、10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト（地盤層）が混じる
6 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト10YR2/2黒褐色シルトを少量含む（地山層に同じ）
EB541(C-C')
1 10YR3/2 黒褐色砂混じりシルト　しまり強い、黄褐色風化礫(径3㎜)を少量含む
EB531(D-D')
1 10YR3/2 黒褐色砂混じりシルト　しまりやや強い、黄褐色風化礫(径3㎜)を少量含む
EB528(E-E')
1 10YR3/3 暗褐色砂質シルト　粘性やや弱い、10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト多く含む、黄褐色風化礫を少量含む
2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト　しまりやや強い、10YR3/3暗褐色砂質シルトをやや多く含む





EB662(A-A')
1 10YR4/1 褐灰色シルト　しまり強い、風化礫粒(径1～5㎜)をやや多く含む、酸化鉄を少量含む
2 10YR2/1 黒色シルト　しまり強い、風化礫粒(径1～5㎜)をやや多く含む、酸化鉄を少量含む
3 10YR3/2 黒褐色砂　しまり強い、風化礫(径150㎜)をやや多く含む

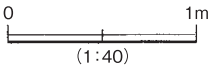
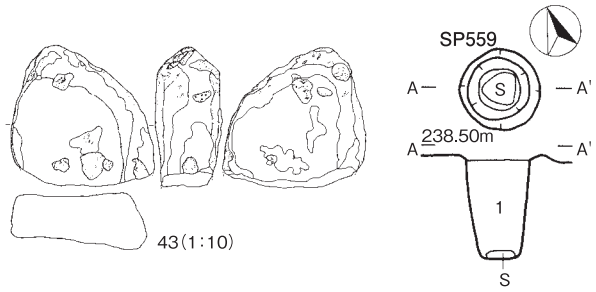
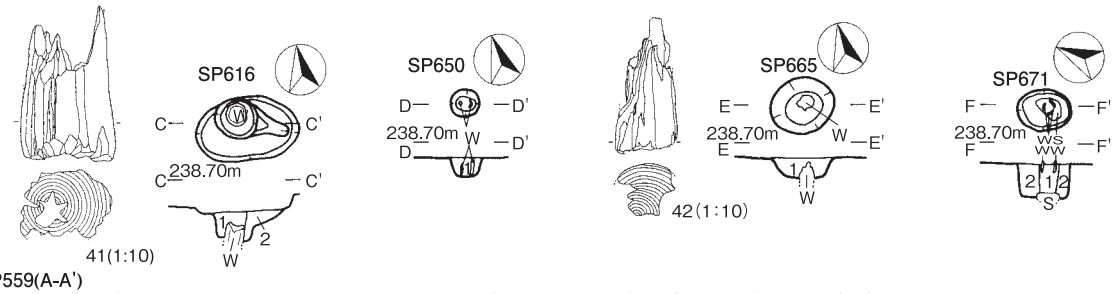


表６　掘立柱建物跡計測表

番号	図版	遺構番号	地区	グリッド	構造 桁行		梁行	庇	規模(m) 桁行	×	梁行	主軸	新旧関係・(　)内は重複するが新旧不明のもの
1	18	ＳＢ680	7 a	J7･J 8 ･K7･K8	3 間	×	1 間以上	不明	5.9	×	2.44以上	N-57.0°-W	SB680→SD622→SD621・SD623→SK620
2	19	ＳＢ681	7 a	I10･I11･J10･J11	1 間以上	×	2 間	1 面？	1.9以上	×	3.78	N-25.2°-E	(SB682･SK532)
3	19	ＳＢ682	7 a	I10･I11･J10	1 間以上	×	2 間	2 面？	2.2以上	×	3.78	N-26.0°-E	SP521→SB682→SD523
4	20	ＳＢ683	7 a	I12･I13	4 間？	×	1 間以上	不明	7.8	×	1.8以上	N-86.1°-W	(SP663)

第20図　中･近世の遺構(掘立柱建物跡３)





SP559(A-A')
1 10YR3/2 黒褐色シルト　しまりやや強い、10YR5/2灰黄褐色砂をまばらに含む（底部より根固め石検出）

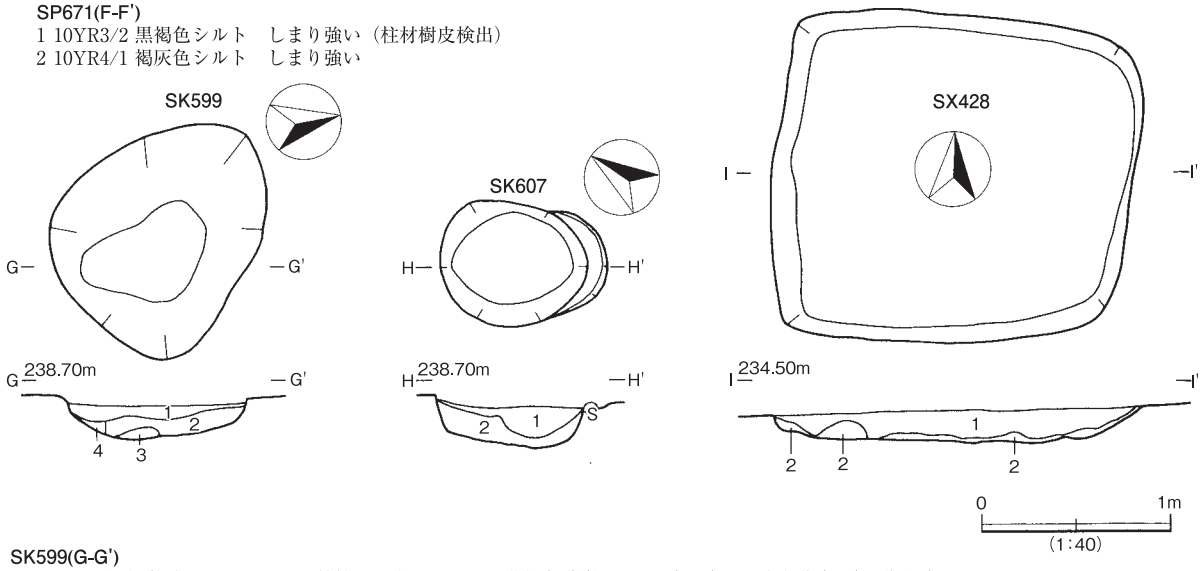
SP605・SP606(B-B')
1 10YR4/1 褐灰色シルト
2 10YR4/1 褐灰色シルト　しまりやや弱い（柱材検出）

SP616(C-C')
1 10YR1.7/1 黒色粘質シルト　しまりやや弱い、粘性やや強い（柱材検出）
2 10YR2/1 黒色シルト　しまりやや弱い、粘性やや弱い、炭化物・にぶい黄橙砂ブロックを微量含む

SP650(D-D')
1 10YR3/1 黒褐色砂混じりシルト　しまりやや弱い（柱材検出）

SP665(E-E')
1 10YR1.7/1 黒色粘質シルト　粘性強い（柱材検出）

SP671(F-F')
1 10YR3/2 黒褐色シルト　しまり強い（柱材樹皮検出）
2 10YR4/1 褐灰色シルト　しまり強い

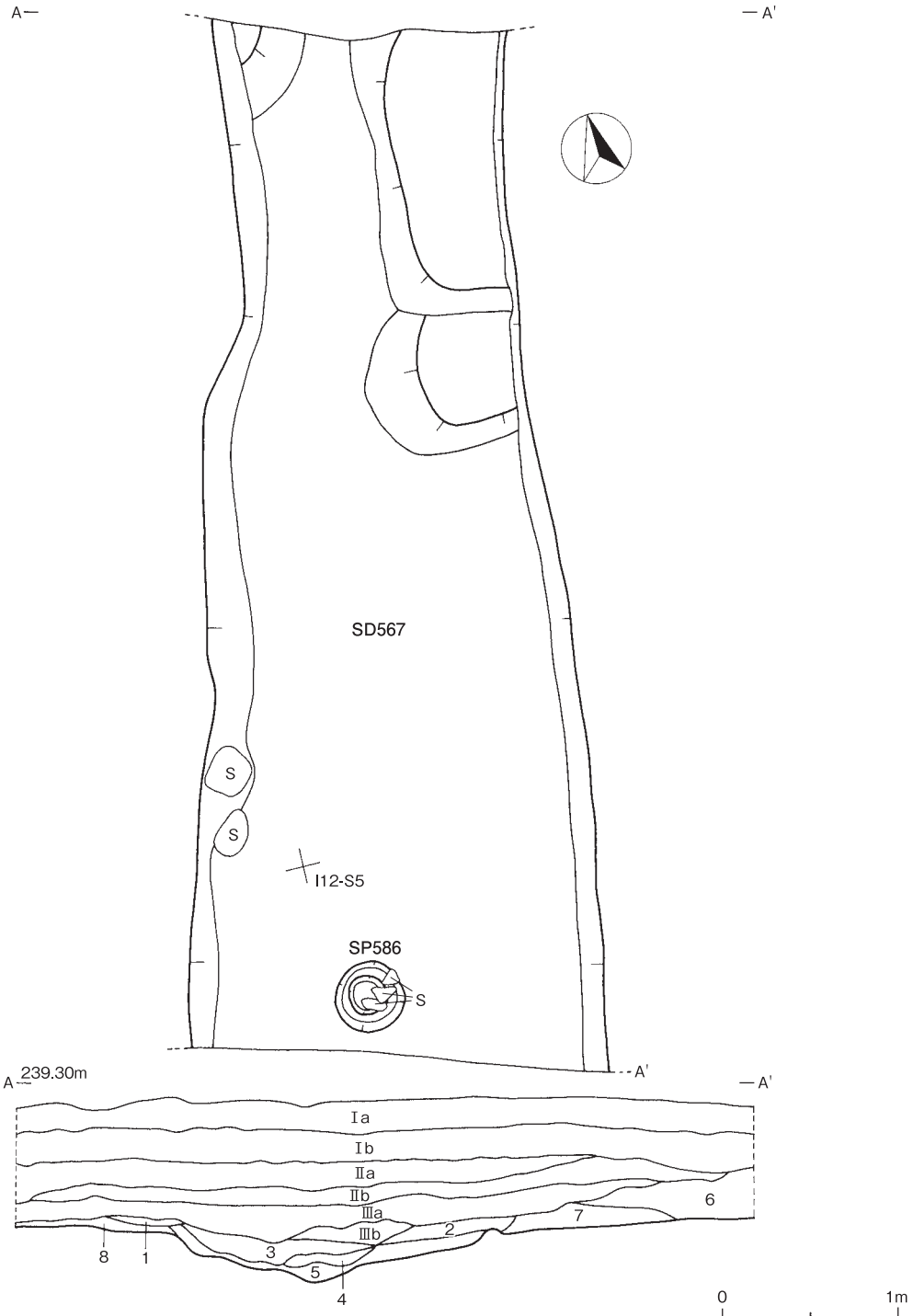


SK599(G-G')
1 10YR3/1 黒褐色砂混じりシルト　粘性やや弱い、にぶい黄橙色礫(径5～20㎜)を含む、炭化物(5㎜)を微量含む
2 10YR2/1 黒色シルト混じり砂　しまりやや弱い、にぶい黄橙色礫(径5～10㎜)を少量含む
3 10YR3/2 黒褐色砂　しまり弱い、黒色シルトブロックを含む
4 10YR3/2 黒褐色砂質シルト　しまり強い、粘性やや弱い、にぶい黄橙色礫(径5～10㎜)を少量含む

SK607(H-H')
1 10YR4/1 褐灰色シルト混じり砂　しまり強い、粘性やや弱い、黒褐シルトブロック(径5㎜)を少量含む、にぶい黄橙色礫(径5～10㎜)を含む
2 10YR4/1 褐灰色砂　しまり弱い、褐灰色シルトブロックを少量含む

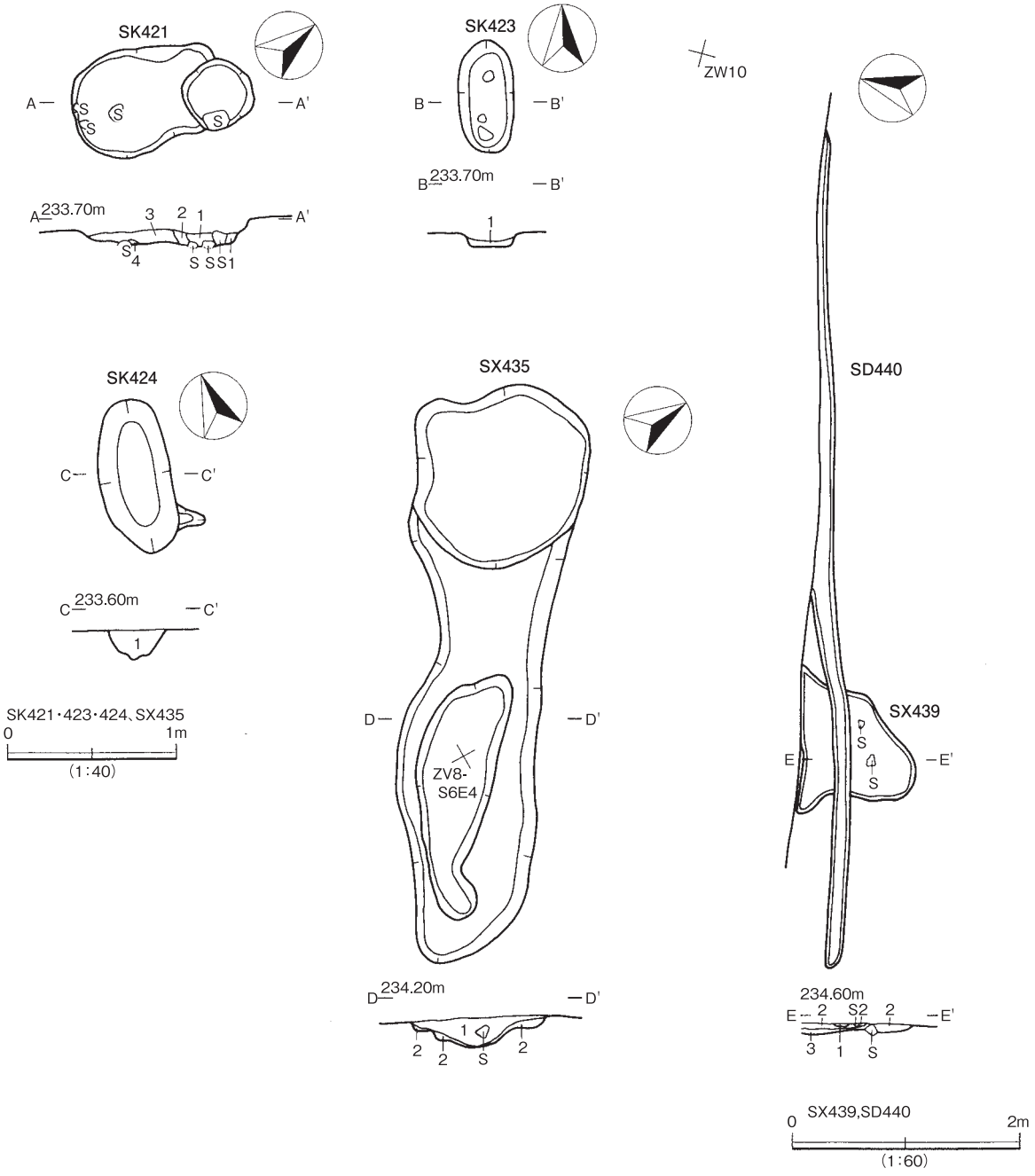
SX428(I-I')
1 10YR2/2 黒褐色シルト　しまり強い、褐色シルトブロック(径10～250㎜)を多く含む、白色風化礫(径10～30㎜)・炭化物を少量含む
2 7.5YR4/3 褐色粘質シルト　しまり強い、粘質やや強い、にぶい黄橙色砂質シルトブロックを含む

第21図　中・近世の遺構(柱穴・土坑・性格不明遺構)



SD567
Ⅰa 10YR3/3 暗褐色シルト　しまり中程度、粘性やや弱い、炭化物(径5㎜)を少量含む（表土）
Ⅰb 10YR3/3 暗褐色シルト　しまり中程度、粘性やや弱い、にぶい黄褐色礫(径5㎜)を微量含む（表土）
Ⅱa 10YR3/2 黒褐色砂質シルト　しまり強い、にぶい黄褐色礫(径5～10㎜)を少量含む
Ⅱb 10YR3/2 黒褐色シルト混じり砂　黒色シルトブロックを微量、にぶい黄褐色礫(径5～10㎜)を少量含む
Ⅲa 10YR2/3 黒褐色砂混じりシルト　しまり強い、黒色シルトブロック・にぶい黄橙色礫(径5～10㎜)を含む
Ⅲb 10YR4/2 灰黄褐色砂　しまり弱い、黒褐色シルトブロック(径5～10㎜)・にぶい黄橙色風化礫(径5㎜)を少量含む
1　10YR2/2 黒褐色シルト　しまり強い、にぶい黄橙色礫(径5㎜)・にぶい黄褐色砂ブロックを微量含む
2　10YR4/3 にぶい黄褐色砂　しまり弱い
3　10YR2/2 黒褐色シルト　しまり強い、黒色シルトブロックを含む、にぶい黄橙色礫(径5～10㎜)を少量含む
4　10YR5/3 にぶい黄褐色砂　しまり弱い、炭化物を微量含む
5　10YR2/3 黒褐色砂まじりシルト　しまり非常に強い、にぶい黄橙色礫(径5㎜)を含む、炭化物を少量含む
6　10YR5/4 にぶい黄褐色砂　しまり弱い、下層は粗砂になる（地山）
7　10YR4/3 にぶい黄褐色砂混じり礫　しまり強い、径10～40㎜の礫層（地山）
8　10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂　しまり強い、黒褐色シルトを少量含む（地山）

第22図　中・近世の遺構(溝跡)



SK421(A-A')
1 2.5YR3/2 黒褐色砂質シルト　しまり強い、黄褐色および白色風化礫・黒色シルトブロックを含む（現代の撹乱か）
2 10YR3/1 黒褐色砂質シルト　しまり強い、粘性やや弱い、黄褐色および白色風化礫を少量含む
3 10YR2/1 黒色シルト　しまり強い、白色風化礫を少量含む
4 10YR2/2 黒褐色砂質シルト　しまり強い、粘性やや弱い、酸化鉄を含む

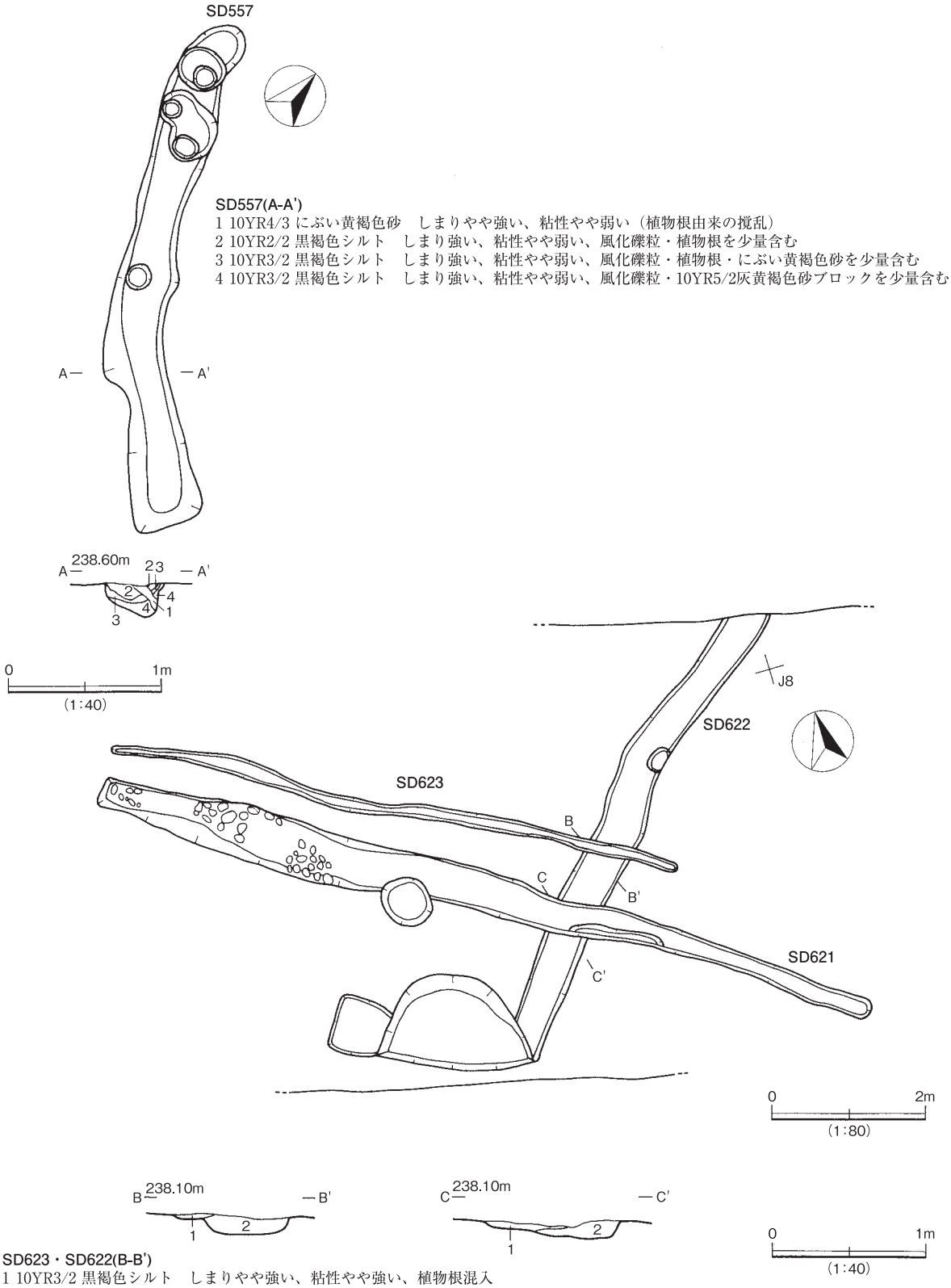
SK423(B-B')
1 10YR4/1 褐灰色砂質シルト　しまり強い、粘性弱い（撹乱か）

SK424(C-C')
1 10YR2/2 黒褐色砂混じりシルト　酸化鉄・風化礫(径1㎜)をやや多く含む

SK435(D-D')
1 10YR4/2 灰黄褐色シルト　しまり強い、風化礫粒を多く含む、風化礫・炭化物を少量含む、酸化鉄を微量含む
2 10YR4/2 灰黄褐色シルト　しまり強い、粘性やや強い、風化礫粒(径1～3㎜)・酸化鉄を少量含む

SK421(A-A')
1 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト　しまり強い、酸化鉄を微量含む
2 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト　しまり非常に強い、粘性やや弱い、風化礫(径5～10㎜)を多く含む、黒褐色シルトが少量混じる
3 10YR3/1 黒褐色シルト　しまり強い、粘性やや強い

第23図　その他の遺構（土坑・性格不明遺構・溝跡）



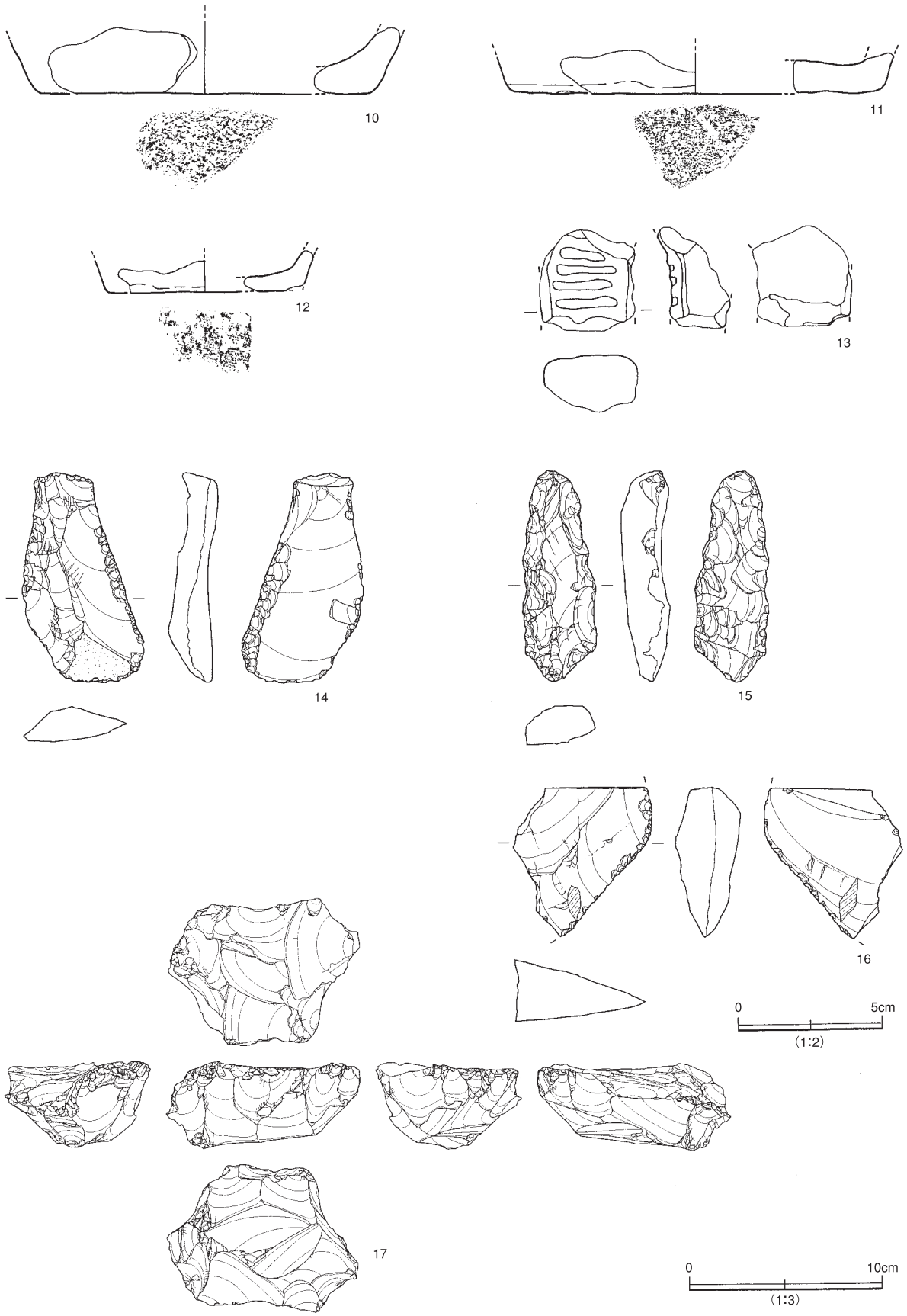
SD557(A-A')
1 10YR4/3 にぶい黄褐色砂　しまりやや強い、粘性やや弱い（植物根由来の撹乱）
2 10YR2/2 黒褐色シルト　しまり強い、粘性やや弱い、風化礫粒・植物根を少量含む
3 10YR3/2 黒褐色シルト　しまり強い、粘性やや弱い、風化礫粒・植物根・にぶい黄褐色砂を少量含む
4 10YR3/2 黒褐色シルト　しまり強い、粘性やや弱い、風化礫粒・10YR5/2灰黄褐色砂ブロックを少量含む

SD623・SD622(B-B')
1 10YR3/2 黒褐色シルト　しまりやや強い、粘性やや強い、植物根混入
2 10YR3/2 黒褐色シルト　しまり強い、黄褐色風化礫(径500㎜)含む

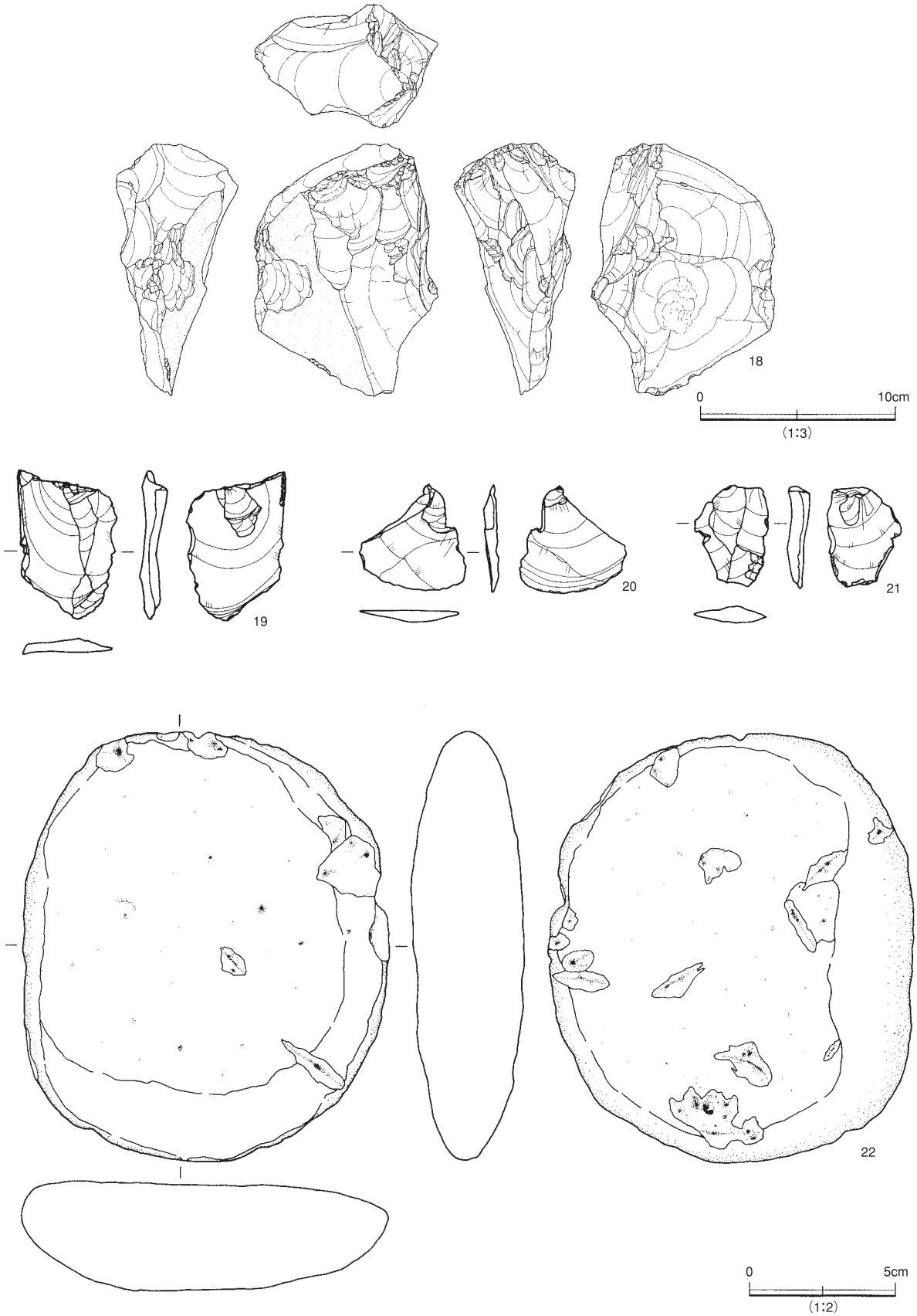
SD621・SD622(C-C')
1 10YR3/2 暗褐色シルト　しまり強い、植物根混入
2 10YR3/2 黒褐色シルト　しまり強い、黄褐色風化礫(径500㎜)含む

第24図　その他の遺構(溝跡)

第25図　縄文時代の遺物（土器）



第26図　縄文時代の遺物（土器・土製品・石器）



第27図　縄文時代の遺物（石器・石製品）

表７　縄文土器・土製品観察表

番号	図版	写真	器種	部位	時期・型式	地区	遺構・層位 グリッド	器厚 (mm)	文様	縄文 原体	調整 外面	調整 内面	調整 底部	胎土質 焼成	備考
1	25	21	浅鉢	口縁部	大木8a式	7a	SX630	7	縦位短沈線文	不明	ナデ	不明	－	7.5YR6/8橙色、粗砂混入、良好	炭付着、内面磨耗
2	25	21	深鉢	口縁部	大木8a式	7a	SX630	8	縦位短沈線文	LR	ナデ	ナデ	－	7.5YR6/6橙色、粗砂混入、良好	
3	25	21	深鉢	口縁部	大木8a式	7a	SD587	10	不明	不明	ナデ	ナデ	－	10YR6/3にぶい黄橙色、粗砂混入、良好	
4	25	21	深鉢	口縁部	大木8b式	7a	SD587	8.5	渦巻文	不明	ナデ	ナデ	－	5YR6/6橙色、粗砂混入、良好	
5	25	21	深鉢	口縁部	大木8b式	7a	SD587	10	不明	不明	ナデ	ナデ	－	10YR7/2にぶい黄橙色、粗砂混入、良好	
6	25	21	浅鉢か	口縁部	不明	7a	SX630	6.8	押圧縄文	不明	ナデ	ナデ	－	10YR6/4にぶい黄橙色、粗砂混入、良好	炭付着
7	25	21	深鉢	口縁部	不明	7a	表土・F2	6	不明	不明	ナデ	ナデ	－	10YR7/2にぶい黄橙色、細砂混入、良好	炭付着
8	25	21	深鉢	底部	不明	7a	SX630	7.5	－	－	ナデ	ナデ	網代痕	10YR8/4浅黄橙色、細砂混入、良好	内面炭付着、上げ底
9	25	21	深鉢	底部	不明	7c	SP506	11	－	－	ナデ	ナデ	不明	10YR5/2灰黄褐色、細砂混入、良好	上げ底、中央厚
10	26	21	深鉢	底部	不明	7a	SX630	10	－	－	ナデ	不明	ナデ	10YR7/3にぶい黄橙色、粗砂混入、良好	底部内面黒変
11	26	21	不明	底部	不明	7a	SX630	10	－	－	ナデ	ナデ	ナデ	10YR6/2灰黄褐色、粗砂混入、良好	
12	26	21	深鉢	底部	不明	7a	SX630	5	－	－	不明	ナデ	不明	10YR6/3にぶい黄橙色、細砂混入、良好	内外面黒変
13	26	21	土偶	右脚部	中期中葉	7a	SX630	9	横方向集合沈線文	－	－	－	－	7.5YR6/6橙色、良好	

表８　石器・石製品観察表

番号	図版	写真	器種	地区	遺構・層位 グリッド	石材	計測値(mm) 長さ	幅	厚さ	重量	破損状況	加工状況
14	26	22	掻器	8	ZV5	頁岩	17.1	37	15	31.7	完形	両面を二次加工
15	26	22	石篦	8	ZV5-E5S5	玉ずい	17.2	12.5	15	33.9	完形	両面を二次加工
16	26	22	剥片	9	ZW9-E5S5	頁岩	15.2	14.5	12.1	40.4	基部を破損	片面を二次加工
17	26	22	石核	9	ZU9-E5	頁岩	14.3	19.4	17.3	284.6	完形	
18	27	23	石核	7a	SX630	泥岩	12.8	9.2	6.1	491.5	完形	
19	27	22	剥片	7c	表土	頁岩	14.6	13.3	8.5	8.6	完形	裏面の右上部を二次加工
20	27	22	剥片	8	表土	頁岩	13.6	13.5	4	4.1	完形	
21	27	22	剥片	9	表土	安山岩	13.3	12.5	7	4.8	完形	表面の右下部を二次加工
22	27	23	磨石	9	ZU7-E5	流紋岩	147	125	38	749.1	完形	

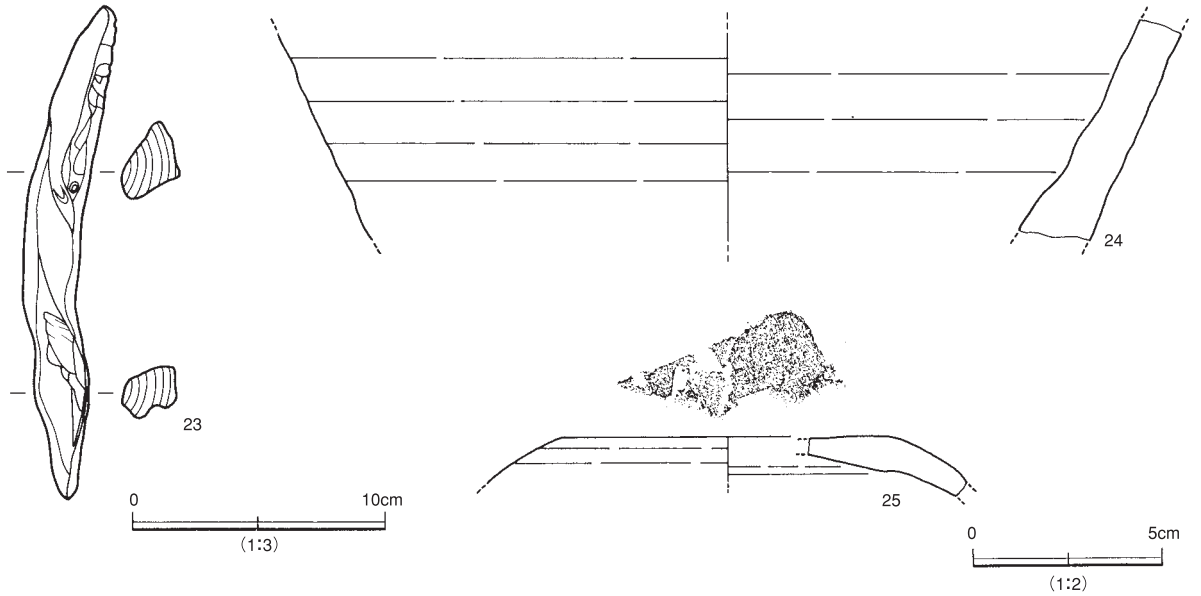


表９　木製品観察表(古墳時代)

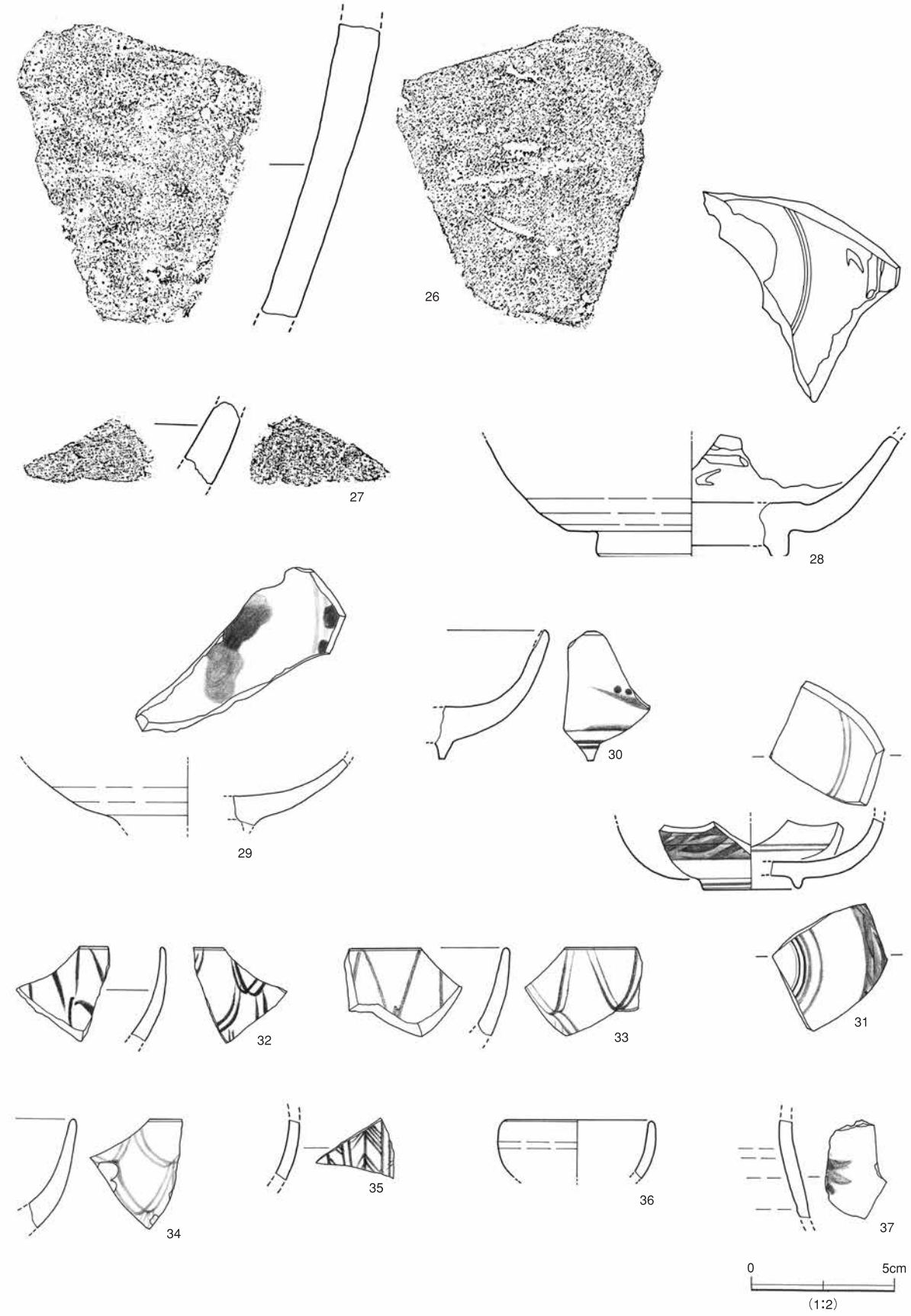
※(　)内の数値は、残存長を表す。

番号	図版	写真	種類	地区	遺構・層位 グリッド	計測値(mm) 長さ	幅	厚さ・径	形状・加工状況　他	備考
23	28	26	杭材	9	SP413	(195)	(23)	(25)	胴部に加工の痕跡あり	

表10　須恵器観察表

番号	図版	写真	種類・器種	地区	遺構・層位 グリッド	計測値(mm) 口径	器高	器厚	調整・その他	胎土・焼成
24	28	24	須恵器・壺か	9	ZU7-E5			11	(外面)ロクロナデ、(内面)ロクロナデ・自然釉	10YR7/1灰白色、黒色粒入る
25	28	24	須恵器・坏蓋	9	ZU7-E5			4	(外面)ロクロナデ、(内面)ロクロナデ	10YR6/1褐灰色、黒色粒入る

第28図　古墳時代の遺物(木製品)、奈良・平安時代の遺物(須恵器)



第29図　中・近世の遺物（陶磁器）

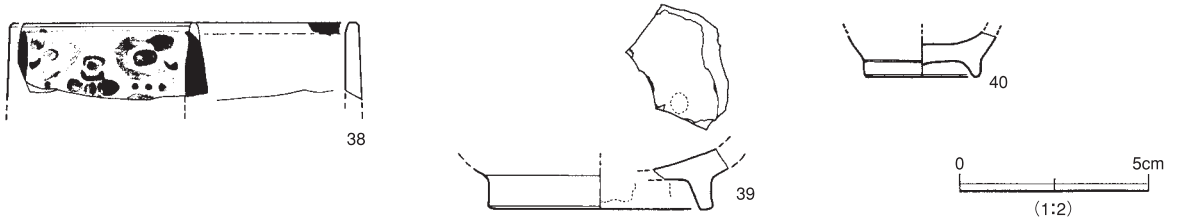


表11　陶磁器観察表

番号	図版	写真	種類・器種	生産地	地区	遺構・層位 グリッド	計測値(㎜) 器厚	年代	文様	調整	胎土	備考
26	29	24	陶器・壺か	在地か	7b	表土	12	中世	−	外−ヘラケズリ、内−指頭痕	10YR4/1褐灰色	漆接ぎあり
27	29	24	陶器・壺	在地か	8	表土F2	10	中世	−	外−ヘラケズリ、内−ナデ	2.5Y6/2灰黄色 細砂混入	
28	29	24	青磁・碗	中国・ 龍泉窯	9	表土	5	12〜 13c	内−劃花文・見込沈線	両面−青磁釉(7.5Y5/2灰オリーブ色) 外−ケズリ、内−ロクロナデ、底−ケズリ	N6灰色	
29	29	25	磁器染付・皿	肥前	9	表土	3.5	17c前	内−不明文・二重圏線	両面−透明釉	N8灰白色	
30	29	25	磁器染付・碗	肥前	9	表土	5	18c後	外−草花不明文、二重圏線(高台脇)	両面−透明釉、畳付−無釉	N7灰白色	
31	29	25	磁器染付・碗	肥前	9	表土	4	18c後	外−草花不明文、三重圏線(高台脇) 内−二重圏線、不明文(見込)	両面−透明釉	N8灰白色	
32	29	25	磁器染付・碗	肥前	9	表土	2	18c前	外−二重網目文、内−一重網目文	両面−透明釉	N8灰白色	
33	29	25	磁器染付・碗	肥前	9	表土	3	18c前	外−二重網目文、内−一重網目文	両面−透明釉	N8灰白色	
34	29	25	磁器染付・碗	肥前	9	表土	3	18c後	外−二重網目文	両面−透明釉	N8灰白色	
35	29	25	磁器染付・碗	肥前	8	表土F2	4	18c	外−矢羽根文	両面−透明釉	N8灰白色	漆接ぎあり
36	29	25	磁器・小杯	肥前	8	表土	3	18c後〜 19c前	−	両面−透明釉 口縁部−2.5GY7明オリーブ灰色	N8灰白色	
37	29	25	磁器染付・瓶類	肥前	9	表土F3	4	17c後	外−植物文	外−透明釉 内−ロクロナデ	N8灰白色 黒色粒混入	
38	30	25	磁器色絵・段重	肥前	9	表土	4	19c	外−不明文	内外−透明釉、口縁部−無釉	N8灰白色 黒色粒微量混入	被熱
39	30	25	陶器・碗	在地か	8	表土	6	19c	内−足付きハマ跡？	両面−灰釉、畳付・高台内面−一部無釉	5Y6/3灰オリーブ色	
40	30	25	白磁染付・小杯	肥前	7a	表土	5	17c前	−	両面−透明釉、畳付−無釉	10YR8/1灰白色	兜巾高台

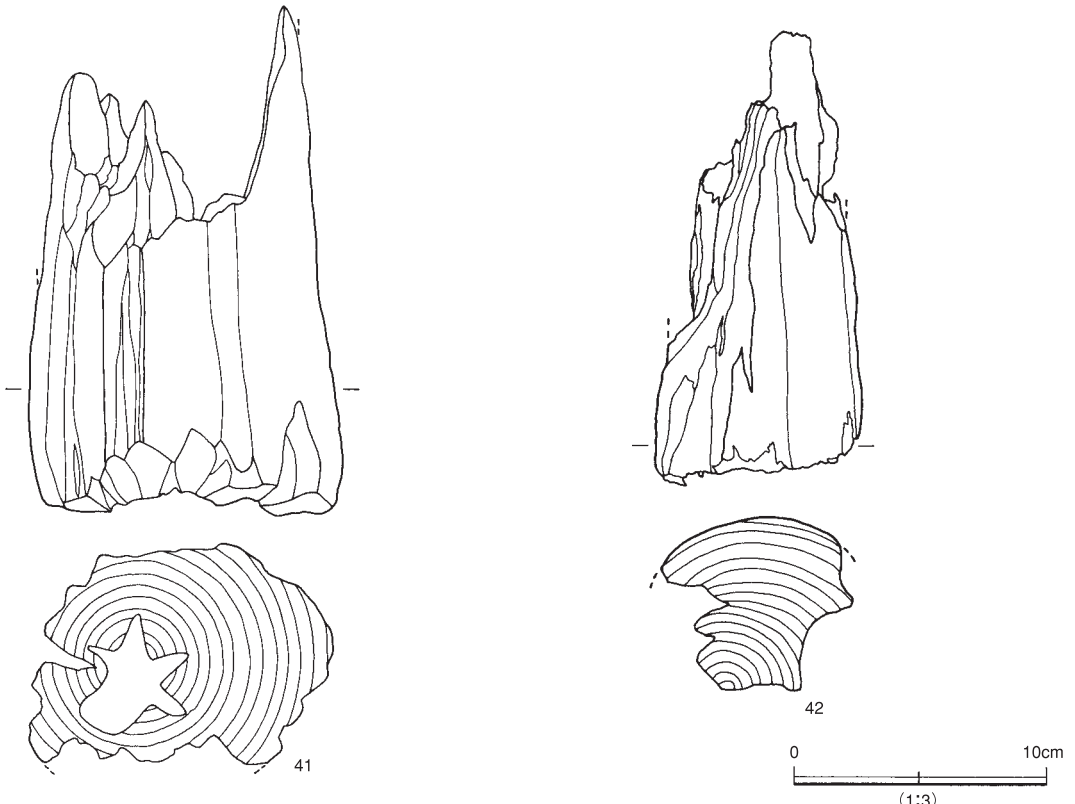


表12　木製品観察表(中・近世)

※(　)内の数値は、残存長を表す。

番号	図版	写真	種類	地区	遺構・層位 グリッド	計測値(㎜) 長さ	幅	厚さ・径	形状・加工状況　他
41	30	26	柱材	7a	SP616	(220)	(122)	(11.8)	丸太材・根元部分のみ残存
42	30	26	柱材	7a	SP665	(179)	(81)	(72)	丸太材・根元部分の一部のみ残存

第30図　中・近世の遺物(陶磁器・木製品)

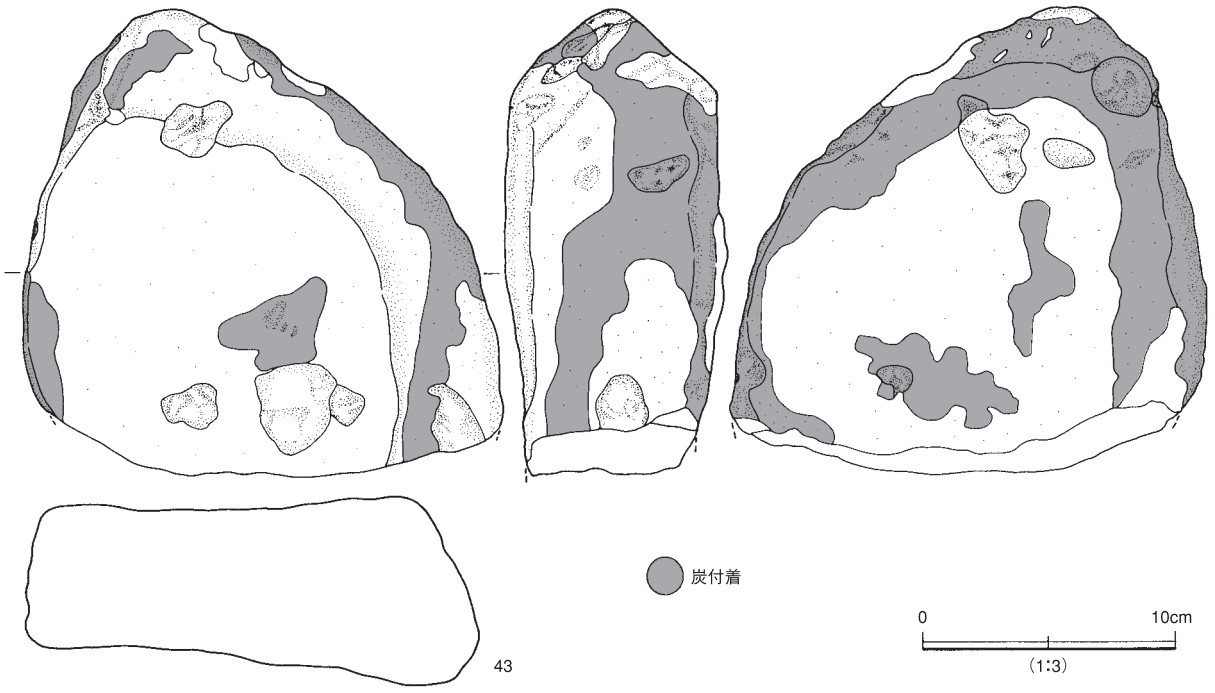


表13　石製品観察表(中・近世)

※(　)内の数値は、残存長を表す。

番号	図版	写真	器種	地区	遺構・層位 グリッド	石材	計測値(mm) 長さ	幅	厚さ	最大径	重量	破損状況	加工状況
43	31	26	根固め石	7a	SP559	花崗岩	(182)	180	82.5		2524.8	大きな割れあり	

第31図　中・近世の遺物(石製品)

写真図版

遺跡遠景（西から）

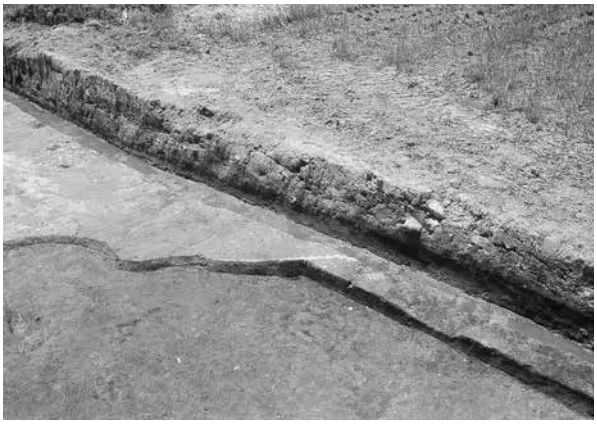
8･9区全景（北東から）

8･9区完掘（上が北）

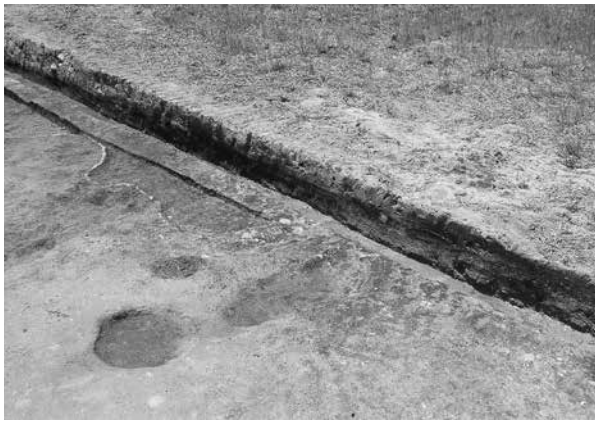
8区遺構完掘（上が北）

8区遺構検出（南東から）

8区遺構検出（西から）



8区西壁基本層序（東から）



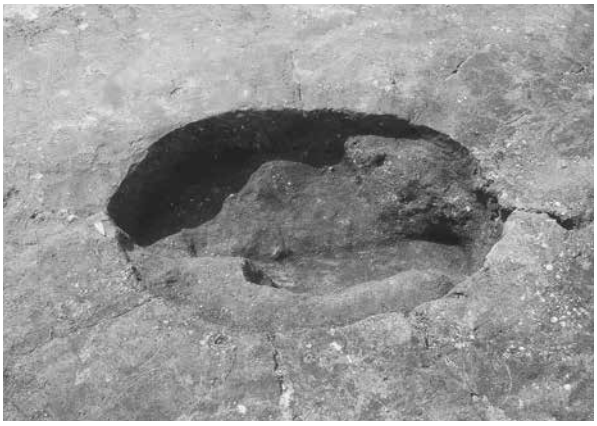
8区西壁本層序（東から）

8区SK408・409・410完掘（北面から）

8区SK408完掘（南から）

8区SK409完掘（西から）

8区SK410完掘（東から）



8区SK420完掘（南東から）

8区SK421完掘（南から）

8区SK422完掘（北東から）

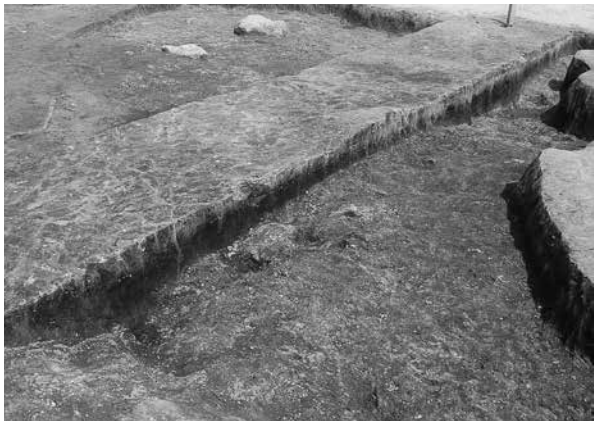
8区SK423完掘（南東から）

8区SK424完掘（北から）

8区SK426完掘（北から）

8区SG425完掘（北東から）

8区SG425断面（南東から）



8区SG425断面（西から）

8区SP402・403・404完掘（南から）

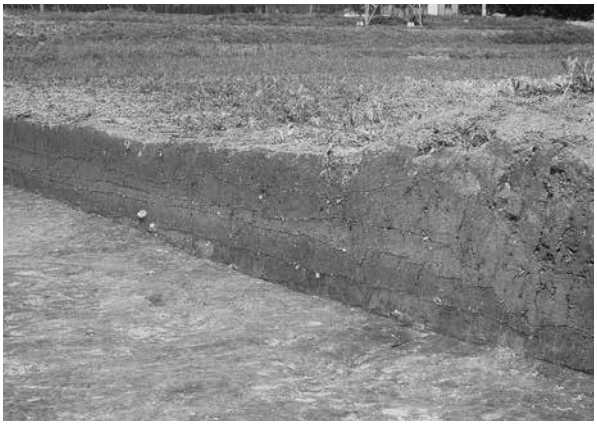
8区SP405完掘（南西から）

8区SP406断面（南西から）

8区SP411完掘（南から）

9区遺構完掘（上が東）

9区北部遺構検出（西から）



9区東壁基本層序（南西から）

9区東壁基本層序（北西から）

9区北壁基本層序（南西から）

9区北壁基本層序（南東から）

9区SK427断面（南から）

9区SK427完掘（南西から）

9区SK432断面（東から）

9区SK432完掘（東から）

9区SX428断面（南から）

9区SX428完掘（西から）

9区SX435断面（東から）

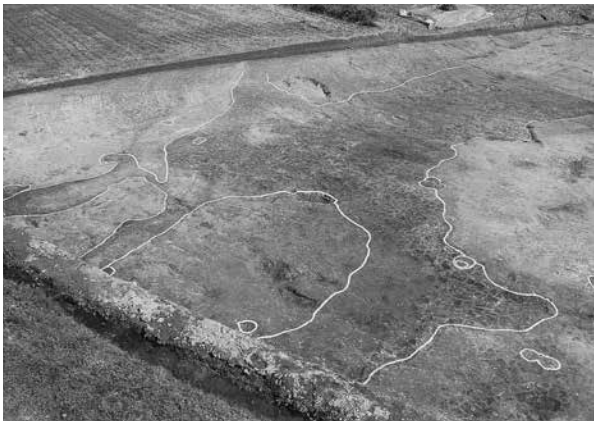
9区SX435完掘（南東から）

9区SD433断面（南西から）

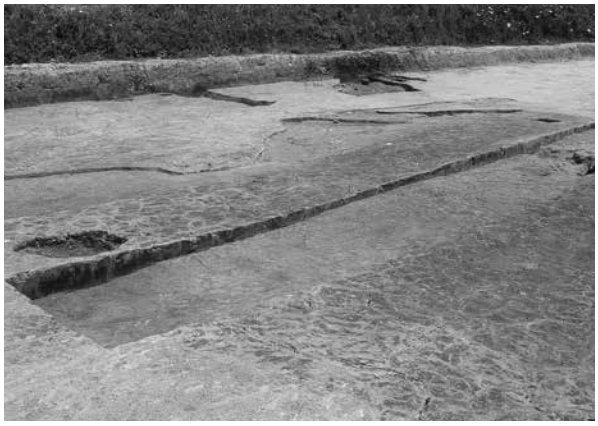
9区SD433断面（南西から）

9区SD433完掘（北西から）

9区SK439・SD440 断面（西から）



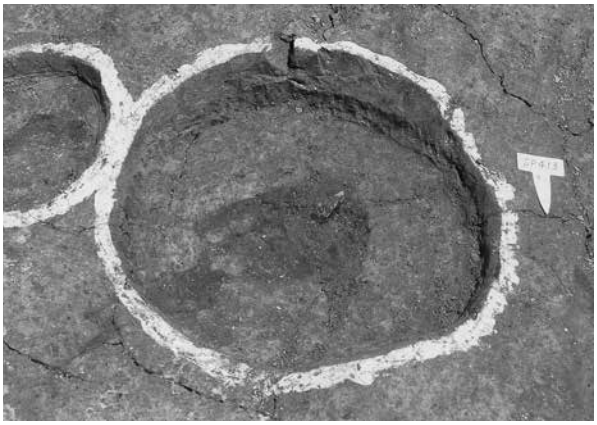
9区SG436検出（北西から）



9区SG436断面（南西から）

9区SG436完掘（上が北）

9区SG436完掘（北東から）

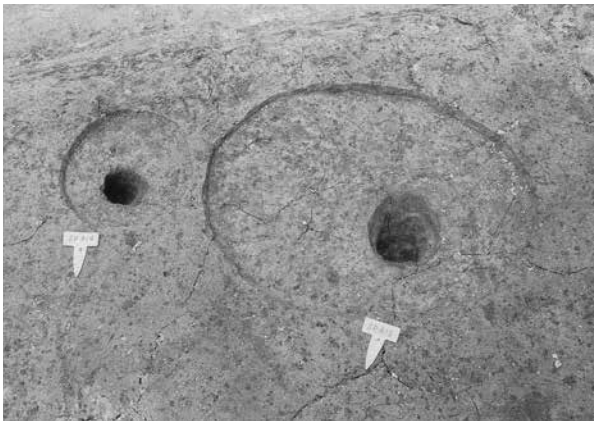


9区SP413杭検出（南西から）

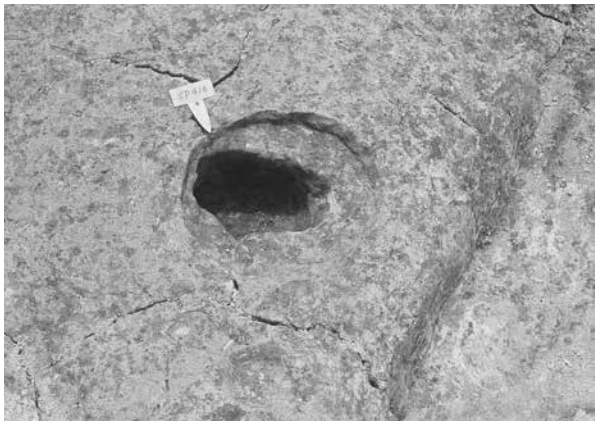
9区SP413杭断面（南東から）

9区SP413杭出土（南から）

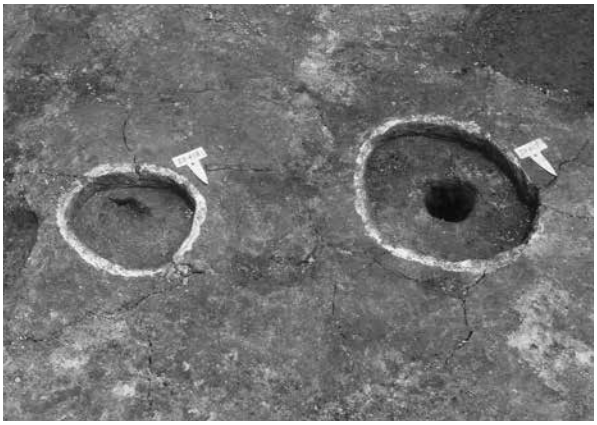
9区SP413完掘（東から）



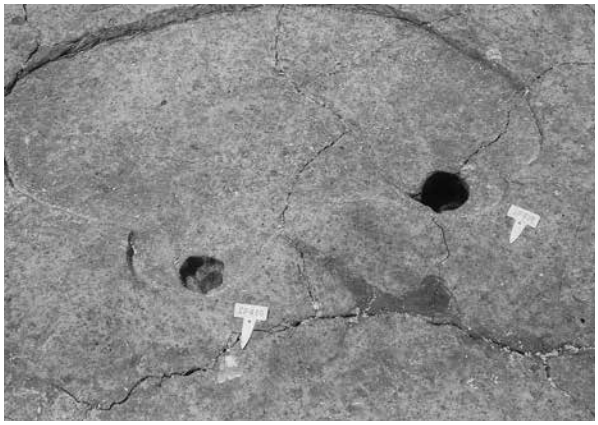
9区SP414・415完掘（南東から）



9区SP416完掘（北から）



9区SP417・418完掘（西から）



9区SP429・430（東から）

7a区近景（西から）

7a区全景（東から）

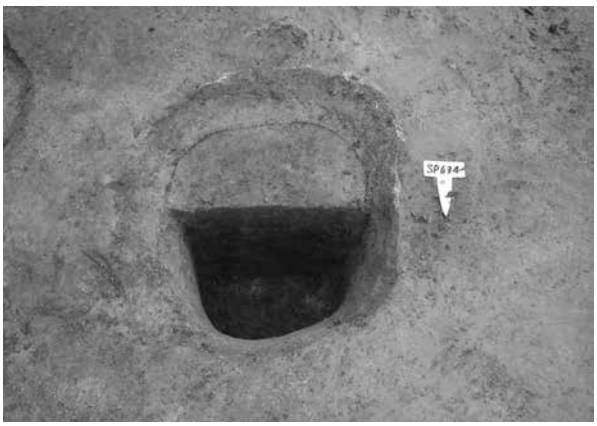
7a区完掘（西から）

7a区完掘（東から）

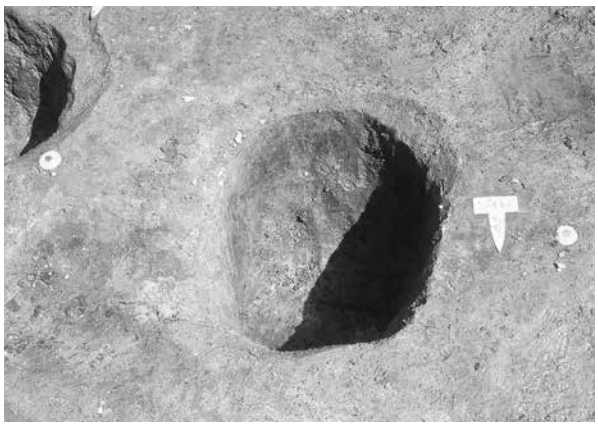
7a区北壁基本層序（南西から）

7c区東壁基本層序（南西から）

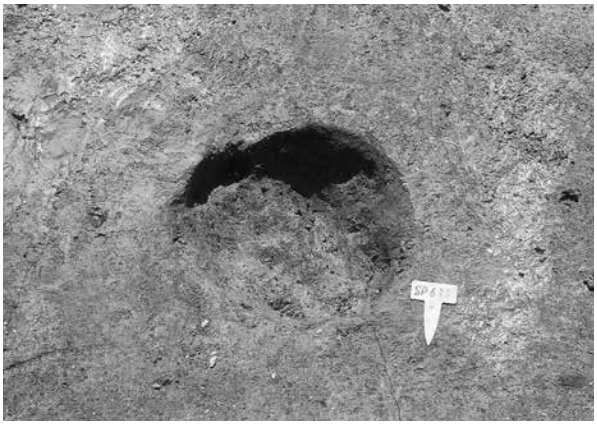
7a区西部（SB680)完掘（東から）



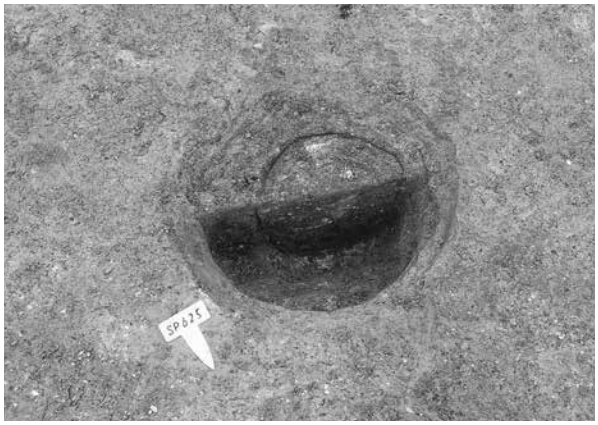
7a区SB680EB634断面(東から)



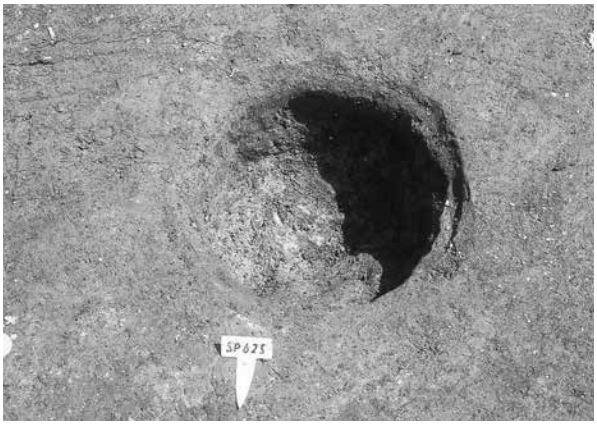
7a区SB680EB634完掘(西から)



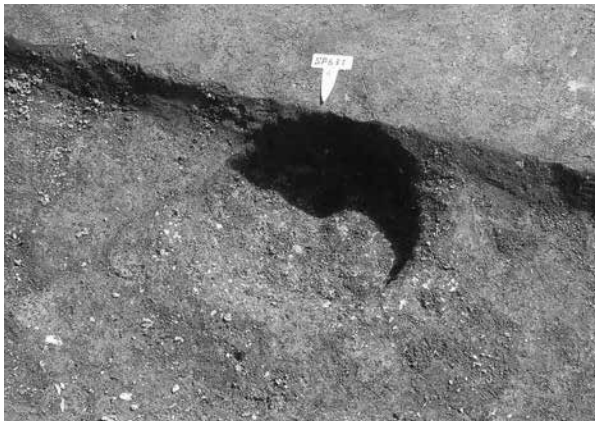
7a区SB680EB633完掘(北から)



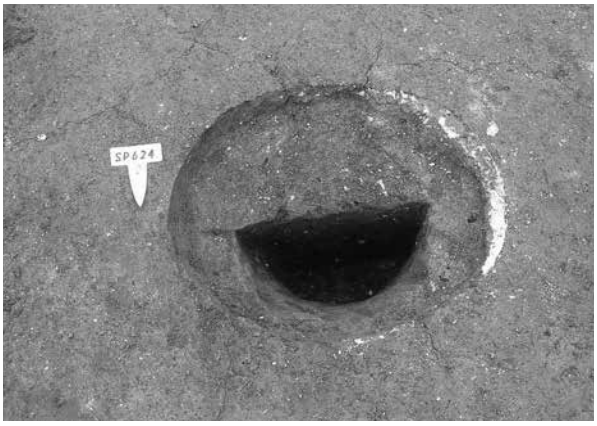
7a区SB680EB625断面(西から)



7a区SB680EB625完掘(西から)



7a区SB680EB631完掘(西から)



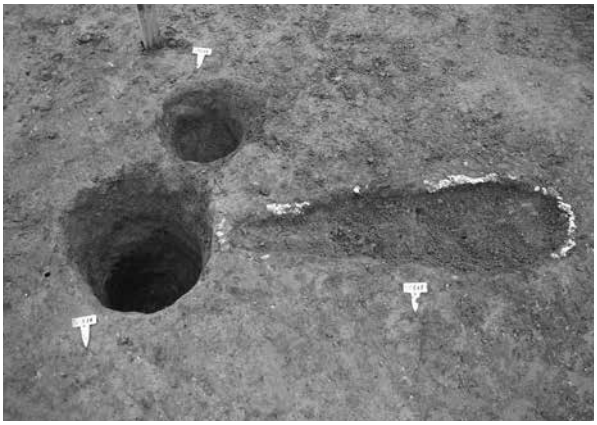
7a区SB680EB624断面(南から)

7a区SB680EB624完掘(西から)

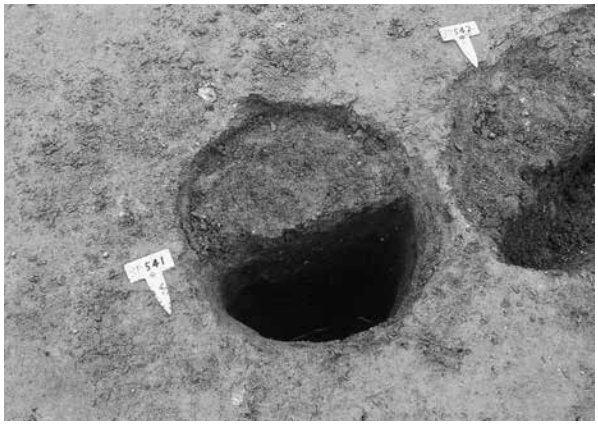
7a区中央(SB681・682)完掘（西から）

7a区SB681EB516完掘（西から）

7a区SB681EB519断面（西から）

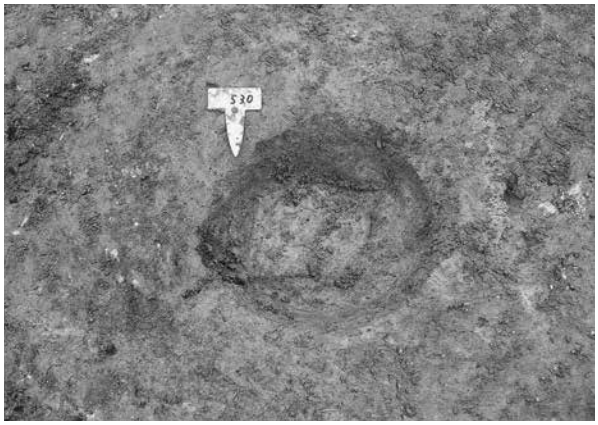


7a区SB681EB533、SB682EB534完掘（南から）

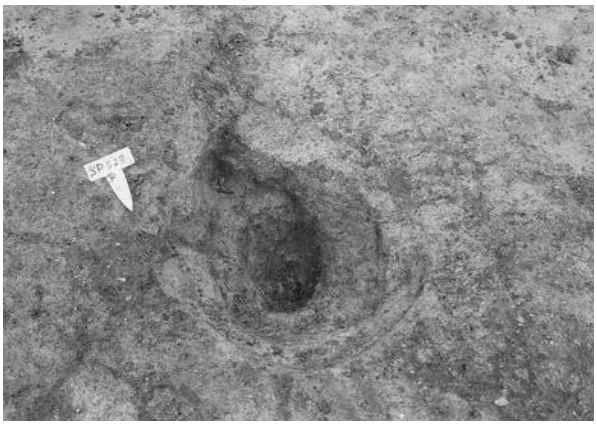


7a区SB681EB541断面（西から）

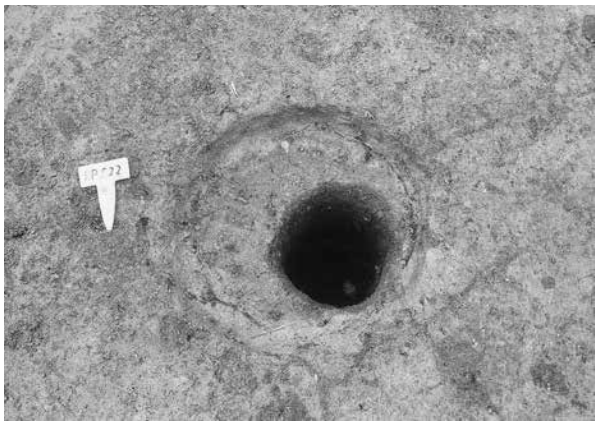
7a区SB681EB531完掘（西から）



7a区SB681EB530完掘（南から）

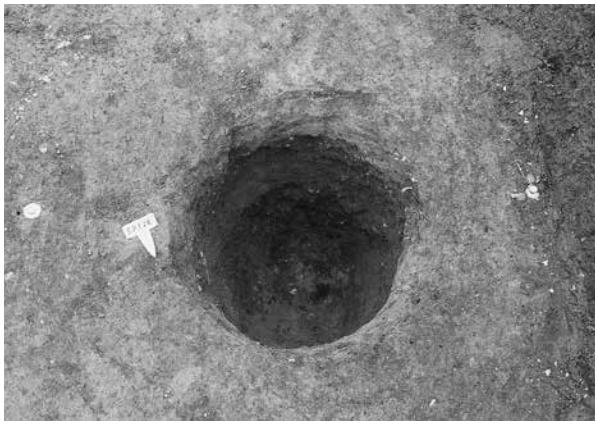


7a区SB681EB529完掘（西から）



7a区SB681EB522完掘（西から）

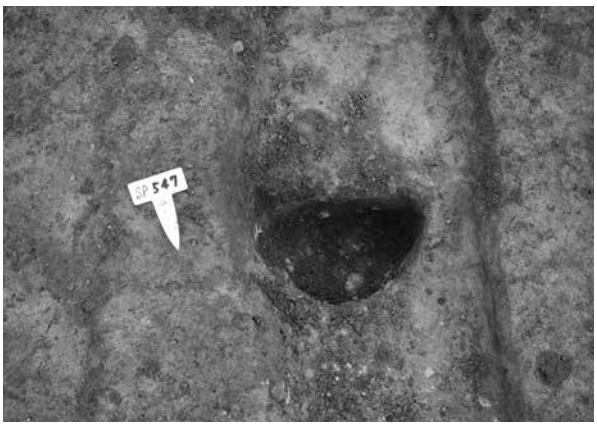
7a区SB681EB519、SB683EB520完掘（西から）



7a区SB682EB528完掘（西から）

7a区SB681EB541、SB682EB543完掘（西から）

7a区SB681EB533、SB682EB534完掘（南西から）



7a区SB682EB547断面（西から）

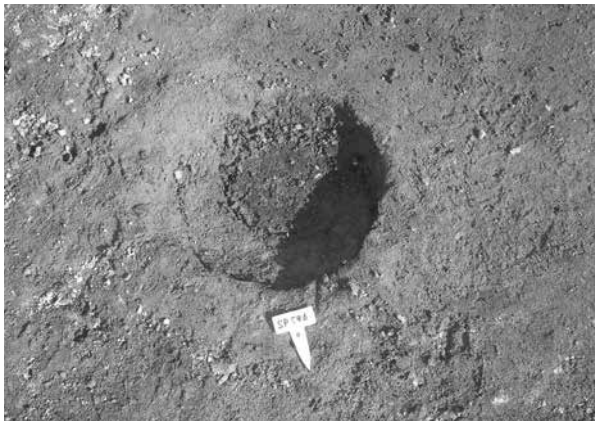
7a区SB682EB527完掘（北から）

7a区SB682EB544・550完掘（北西から）

7a区SB682EB544完掘（南から）

7a区東部(SB683)完掘（東から）

7a区SB683EB594・596・597完掘（北東から）



7a区SB683EB596検出（西から）

7a区SB683EB594完掘（南東から）

7a区SB683EB662（南東から）

7a区SK599断面（南西から）

7a区SK607断面（南西から）

7a区SX548完掘（北西から）

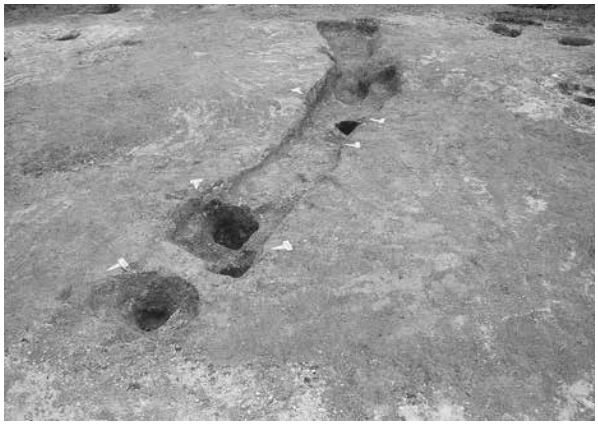
7a区SX590縄文土器片検出（東から）

7a区SX630 縄文土器片検出（西から）

7a区SX630縄文土器片検出（南から）

7a区SX630縄文土器片検出（北西から）

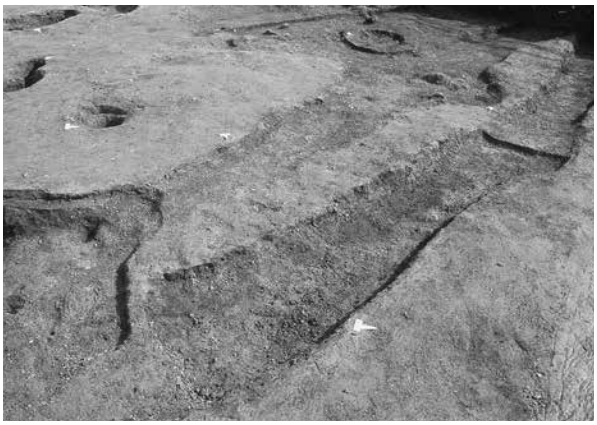
7a区SD557断面（東から）



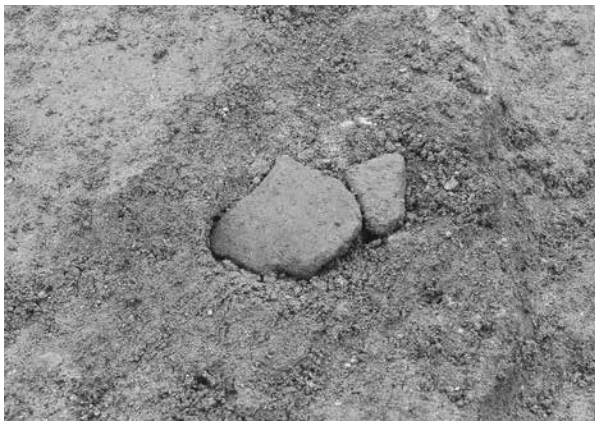
7a区SD557完掘（北西から）

7a区SD567完掘（南西から）

7a区SD567完掘（北東から）



7a区SD587完掘（北から）



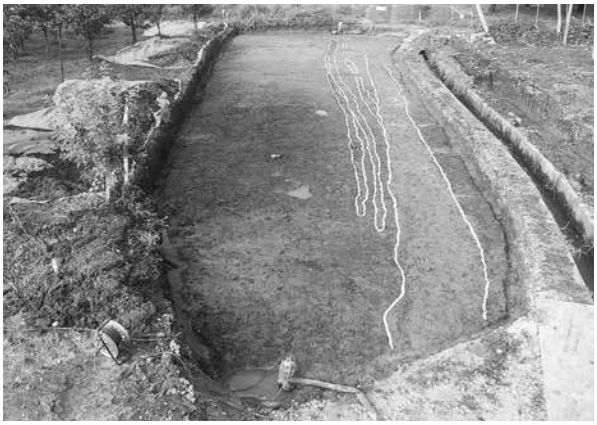
7a区SD587縄文土器片検出（北西から）

7a区SP559根固め石検出（西から）

7a区SP665柱材検出（北から）

7a区SP616断面（南西から）

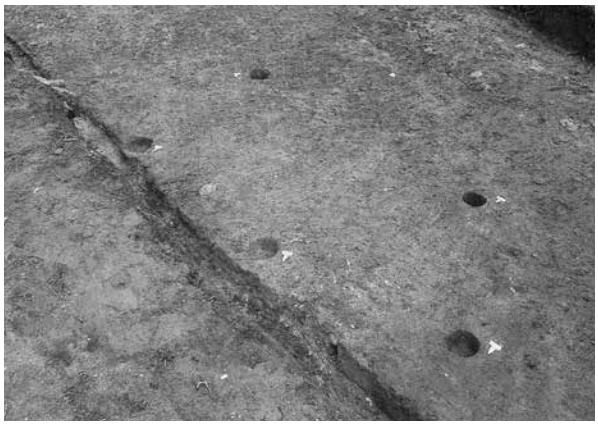
7a区SP616柱材検出（南から）



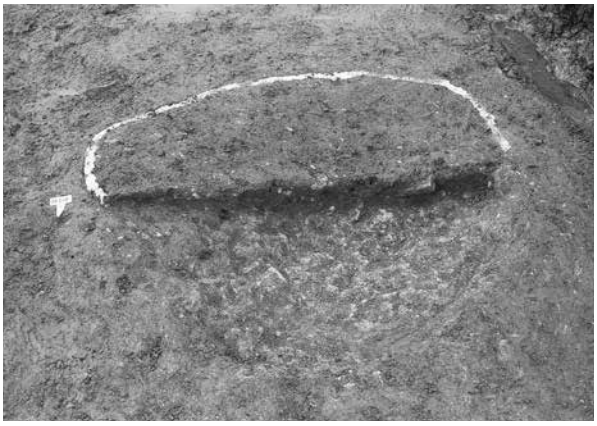
7b区遺構検出（南西から）

7c区遺構検出（北から）

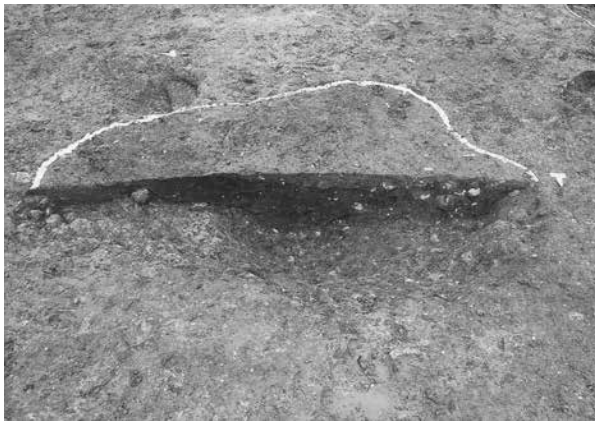
7c区遺構完掘（南西から）



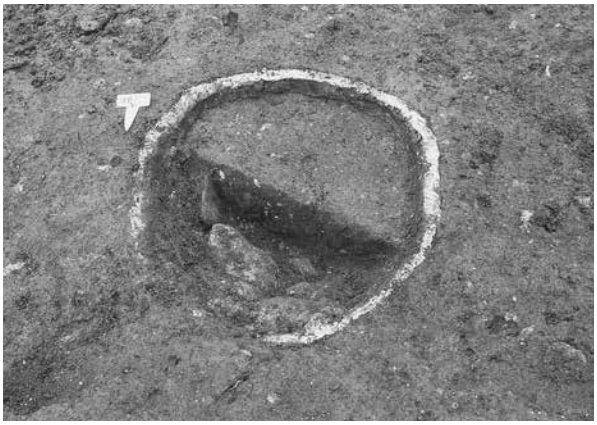
7c区北側柱穴群（北東から）



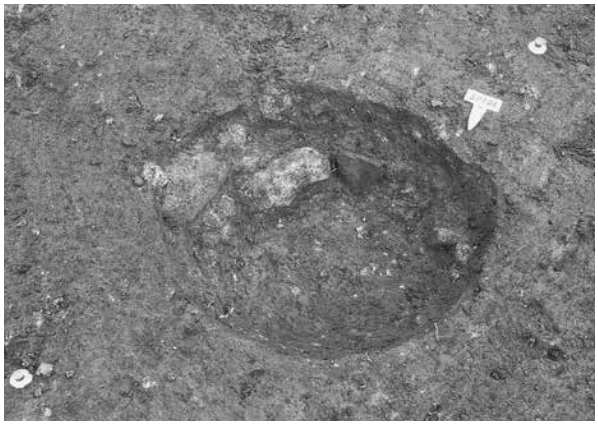
7c区SK510断面（南から）



7c区SK511断面（南から）

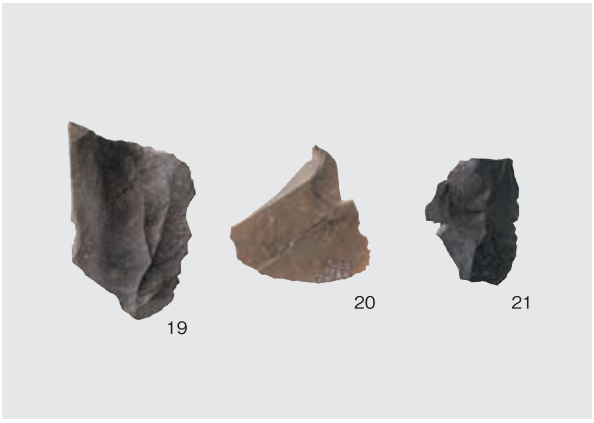


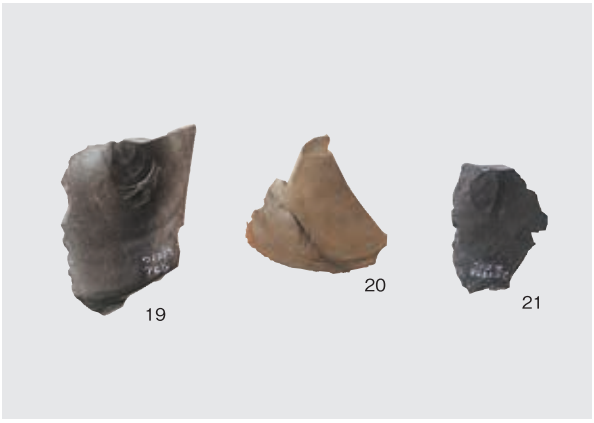
7c区SP506断面・縄文土器片検出（南から）

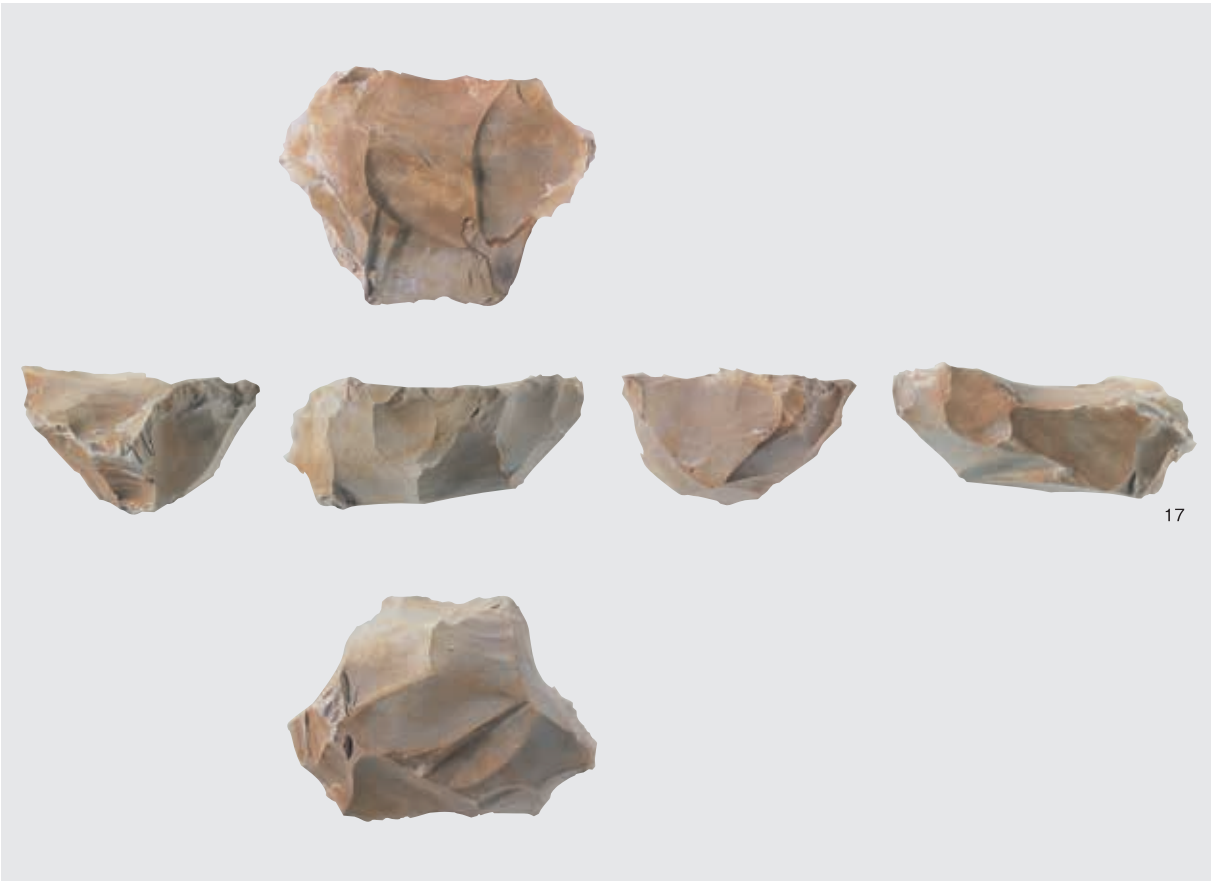


7c区SP506完掘（北東から）

縄文土器・土製品



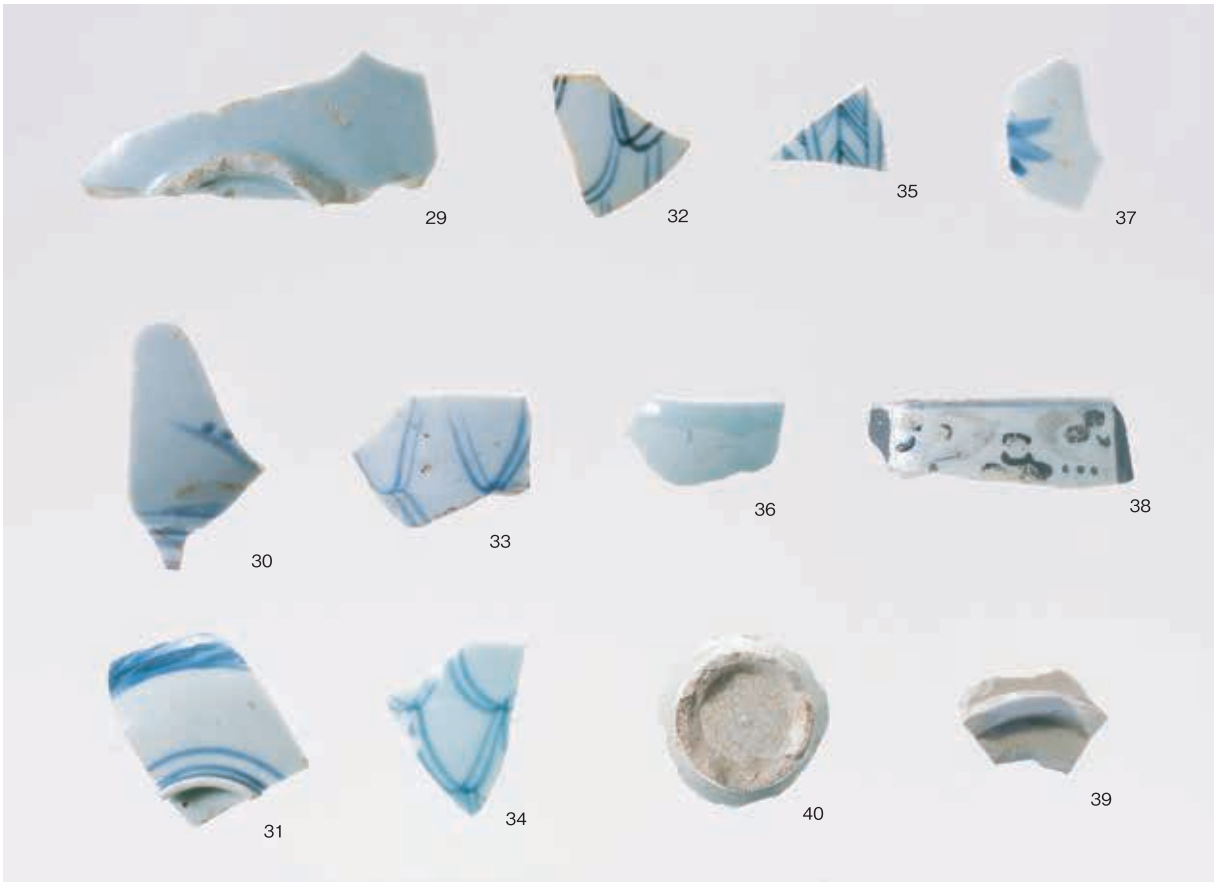


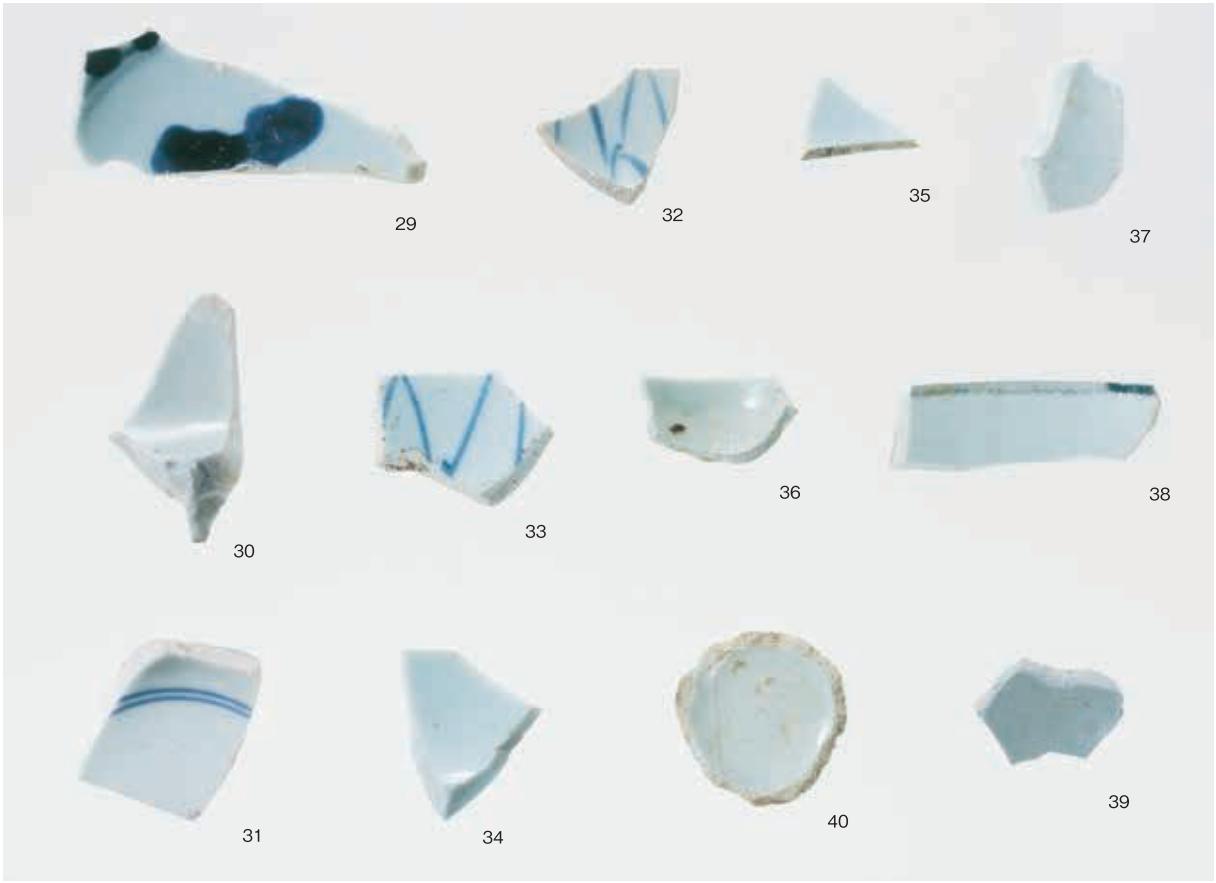


石器（縄文時代）

石器・石製品（縄文時代）

須恵器（奈良・平安時代）・陶磁器（中世）





陶磁器（近世）

木製品（古墳時代・中世）、石製品（中近世）

報告書抄録

ふりがな	わのいせきだいにじはっくつちょうさほうこくしょ
書名	上野遺跡第２次発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第162集
編著者名	須藤孝宏
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター
所在地	〒999-3161　山形県上山市弁天二丁目15番1号　TEL　023-672-5301
発行年月日	2007年３月28日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
わのいせき 上野遺跡	やまがたけん 山形県 なんようし 南陽市 おおあざわの 大字上野 あざわのよんほか 字上野４他	6213	平成16年度新規登録	38度03分37秒	140度09分14秒	20060508〜20060619 20060904〜20060926	2,500	農地環境整備事業（上野地区）

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落跡	縄文時代（中期）	土坑、河跡、柱穴 性格不明遺構	縄文土器、土製品、 石器、石製品	縄文時代から中世・近世にわたる複合遺跡。縄文時代では、中期中葉の土器片とともに西ノ前タイプ土偶の脚部破片が検出された。中世・近世では、４棟の掘立柱建物跡が確認され、上野集落の変遷を解明する資料を得た。 （文化財認定箱数：7）
	弥生時代	土坑、溝跡		
	古墳時代	杭跡	木製品	
	平安時代		須恵器	
	中世・近世	掘立柱建物、土坑、 河川、溝跡	陶磁器、木製品、 石製品	

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第162集

上野遺跡第２次発掘調査報告書

2007年３月28日発行

発行　財団法人　山形県埋蔵文化財センター
〒999-3161　山形県上山市弁天二丁目15番１号
電話　023-672-5301
印刷　株式会社アサヒ印刷
〒990-2251　山形県山形市立谷川２丁目486番14号
電話　023-686-4331